

人物を中心とした

# 文化郷土史

—鳥取県—

徳永職男



因幡鳥取藩

因幡鳥取藩は、因幡・伯耆の二か国から成っていた。その領域そのままを管下に、現在の鳥取県がある。

鳥取藩は、明治二年の版籍奉還当時に於いてみると、表高三三二万五千石で、二七七藩中、第一二位を占める大藩であった。表高といふのは、諸藩の正式の（表面上の）収穫高で、実際の収穫高は、各藩とも、新田の開拓などによって表高より多く、これは、実高と呼んでいる。鳥取藩の実高は、明治初年の記録によると、約四一万石で、表高の一・二六倍であった。この比率は、一般的に見て決して高いものではなく、表高二四万二千石で、順位第一九位の土佐藩などは、すでに寛政年間（一七八九—一八〇〇）に、実高四五万石（一・八六倍）に達している。

江戸時代の大名は、表高によって格式づけられ、表高に従つて、幕府の各種の課役や御用金を負担したので、実高があまり多くない上、他に収入の道も乏しかった「大藩」鳥取藩の財政は、決してらくではなかった。したがって、藩士の家禄も、石高の十分の二、時には十分の一だけ支給されることも珍しいことではなかった。このように、因幡鳥取藩は、天下の大藩とされながら、経済的に見て、藩も家中も決して豊かではなかつたのである。

経済力と文化発展は、必ずしも一致するものではないが、両者が密接な関係をもつことはいうまでもない。したがって、江戸時代の鳥取藩の文化に、多くを期待することはできないと思われるが、實際は、困難な諸条件に制約されながら、注目すべき人材が少なくない

稻三伯の胸像（歌は香川景樹）

かった。彼らは、いざれも日本文化史上注目すべき業績を挙げ、あるいは地方文化に大きい貢献をしたのである。

その代表的人物をあげると、まず江戸末期の蘭学者稻村三伯（宝曆八—文化八）がある。彼は藩の侍医で、大槻玄沢の「蘭学階梯」をみて発奮し、江戸に出て玄沢の門下となつたが、蘭日辞書の編集を思ひたま、五年の歳月を費して、フランス人フランソワ・ヘルマ（F. Halma）の蘭仏辞書を翻訳して「波留麻和解」を完成した。これは、わが国最初の外国语辞書で、蘭学の發展に寄与するところが大きかった。

賀茂真淵の歌論を批判して、「歌はことわるものにあらず、しらぶるものなり」とい、和歌を柿本人麻呂・紀貫之の時代の在り方に復活させようと、「桂園派」を創始した香川景樹（明和五—天保一四）は、鳥取藩士荒井小三次の次子で、二六歳の春京都に上り、小沢蘆庵らについて指導を受け、後に歌道家香川景柄の養子となつた人である。景樹の号をとつて名づけられた桂園派は、京都を中心に、やがて全国を風びし、明治の短歌革新期にまで及んだ。

鳥取藩の国学興隆は、本居宣長の同族であり、その門人でもある伊勢の人衣川長秋によるものであるが、鳥取に迎えられた長秋に

ついて学んだ人々のうち、俊秀は、氣多郡（今氣高郡）加知彌神社の祠官飯田秀雄（寛政三—安政六）で、藩の国学・歌道の振興は、彼によるものと言えよう。その子に、後に述べる飯田年平（文政三—明治一九）がある。

江戸時代には、全国各地で地誌の編さんがさかんに行なわれたが、鳥取藩では、藩の侍医小泉友賢（元和八—元禄四）による「稻場民談」（「因幡民談記」ともいふ）と、安陪惟親（享保一九—文化五）の「因幡志」とが双べきである。また注目すべき人物に、藩の大目付を勤めた岡島正義（天保四—安政五）がある。彼の数多い著述の中で、「因府年表」は、学問的にも高く評価されている。これは、寛永七年（一六三〇）から、天保一二年（一八四一）までの史実を、藩史を中心記録したもので、年表とは題しているけれども、記述内容は精密で、史料に忠実な点に特色がある。

美術の部門についてみると、日本画に、藩の絵師土方稻籠（天保一—文化四）があった。彼は沈南蘋の画風を好み、その門人宋紫石に師事したが、その写実の妙は、円山応挙を畏怖させたという。明治初年には、彼の作品で海外に流出したものがあり、明治十年に、元老院議官の海江田信義がドイツでスタンイン博士に会つたとき、スタンは、一室に掛けてあった双鯉の掛軸を指して次のように言ったという。「是れは貴國の画工広邦（稻籠）の描きし者なり。其発刺として身を翻したる首尾の氣勢（ひきめい）、口を水上に現わす）して口を張りたる面頬の形状より、鱗・鱗・濃淡の墨色等、写真・油絵より一層精神ありて、眞に迫るを覚えたり……永久保存を図るべき者にて、美術に於て要用たるものなり。」（宮内府藏「須多因譲義筆記」）

このように、江戸時代の鳥取藩文化には見るべきものがあつたが、それが、貧困の中に生まれた場合も多かつたことは、注目されなければならない。香川景樹は、京都で学んだとき、按摩や青侍となつてその生活を支えていた。安陪恭庵は、「因幡誌成る此には、家宅雨漏を見るも、復た修繕の資なきに」至つた（「鳥取藩史」）と云えられる。

### 近代文化の発達

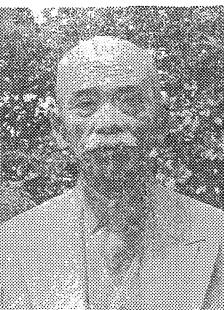
明治四年の廢藩置県によつておかれた三府三〇二県の中の鳥取県は、旧藩そのまま、因伯両国を管轄し、同年末これに隠岐が加えられた。この最初の鳥取県は、明治九年の府県統合で島根県に吸収されたが、十四年になつて、因伯両国からなる当初の鳥取県が再置されて現在に至つている。

鳥取県の再置に先立つて、山陰を巡回した参議山県有朋は、その中心となつた旧鳥取藩士族については、「山陰ノ隅ニ僻在シ、三百年来大藩ノ余風ヲ固守」（「公文録」）していると評している。山陰一道が交通不便で、「人文の開進」がおくれていたことは、一概に否定はできないけれども、「大藩ノ余風固守」については、ただ頗迷とだけ受け取るのは酷で、新時代に対処して、藩政時代に劣らぬ政治・文化を樹立しようとする県民意識もあつた。

鳥取県の文化発展の先覚者の中で、注目すべき人物が二人ある。

遠藤董（嘉永六—昭和四〇）と村岡範為馳（嘉永三—一九二九）がそれである。

遠藤董は、鳥取城下材木町に、藩士重嘉の長子として生まれ、九歳から一六歳まで、藩校尚徳館で漢學・フランス語・習字などを学び、この間、狩野派の藩絵師根本幽齋（文政七—慶応二—八六六）に就いて日本画をよくした。明治十年には五四歳で上京し、日本洋画の大先輩といわれる高橋由一の門に入り、洋画をも消化した。彼の活躍は鳥取に帰つてから開始された。彼は郷土洋画壇の先駆として、又、文化施設の創設に大きい貢献をしている。早く女子教育の重要性に注目し、明治二十一年には邑美・法美・岩井・八上・八東・智頭の六郡（後、因幡）高等小学校に女子部を開設させ、これは後に鳥取市立高等女学校（後の市立因幡高等女学校）へと発展した。また、現在の鳥取県立鳥取図書館は、遠藤が因幡高等小学校長に在任中の明治二十三年、同校内に設けた久松文庫がその滥觴で、これが私立・市立鳥取図書館と変わり、さらに昭和四年、県立に移管されたものである。



村岡範為馳は、藩士

岡秀造の子で、父は蘭学者であった。範為馳は幼

にして父の薰陶を受け、さらに藩校尚徳館に学んだが、明治三年七月、政府が大学南校（もとの開

成学校・洋学）に、各藩

遠藤 董（胸像）

江戸時代の国学については上に述べたが、飯田秀雄の二男飯田平（文政三—明治十九）は、父と同じく本居宣長に師事し、国学・和歌に名を成し、同門の加納諸平・石川依平と共に「三平」の名で推称された。明治四年の大嘗会に、西方の祭場（主基田・安房國長狭郡蓬ヶ島）を詠んだ「名くはしき蓬が島は君が代の長狭県の神やつくりし」の一首は、年平の詠進歌である。

日野郡溝口町出身で東大教授であった池田龜鑑（明治二九—昭和三一）は、国文学に文献的研究を開拓した点で注目すべき業績を残し、「校讎源氏物語」、「古典の批判的処置に関する研究」は不朽の名著として、その数多い著述の中でも高く評価されている。一方訓点語学・国語教育で知られるもと東大教授遠藤嘉基（明治四三）は、前記の遠藤董の孫であることは興味深い。

国語教育、中でも児童の綴方教育に貢献した人に西伯郡の人峰地光重（明治二三—昭和四三）があり、早く大正九年には、同郡小学校で児童文集「芽生え」を出し、十一年には「綴方は児童の人生科である」という「文化中心綴方新教授法」を出版した。昭和四年には綴方教育雑誌「綴方生活」を刊行している。

地方史研究の分野では、明治四十一年に始まった旧藩主家池田伸博による藩史の編さん事業があり、その編さん責任者に、湯本文彦・梶川栄吉らがあった。編さん委員の一人であった岩美郡宇倍野村（現国府町）の人植紫竹造（文久元一月九三〇）は、藩史編さんをも含めて、鳥取県の地方史研究の開拓者であった。「岩美郡史」・「八頭郡史考」・「氣高郡史考」のほか未刊に終わった「東伯郡史考」・「西伯郡史考」があつて、県下各郡の歴史を手がけ、「因伯大年表」の労作もある。

昭和十二年に、当時県立図書館に寄託されていた旧藩時代の膨大な藩史史料の整理のために図書館司書となつた荻原直正（明治二十九年六月一九四二）は、本務のかたわら郷土史を研究したが、彼はその著述を「私の一生を通じて、詐わらず、背かず、暖かく、安らげく、はぐくみ育てて呉れた郷土、その郷土へささげる讃美であり、憧憬であり、陶酔である」と言い、また「郷土愛必ずしも懷古的とは限るまい。竭くることなき郷土恩慕の中に、広い世界に通ずる何者かを見出して、故郷を世界の表に押し上げて行く。これが自分としては精一杯の念願である」と述べている。郷土史の中に、民衆の生活を取り入れることも忘れないが、異色の郷土史家で、著書も多く、「因伯の本地屋」・「因伯地名雑話」・「百姓一揆年代記」等々がある。

「武信和英大辞典」（大正七年刊）によって、わが國英語学界に多大の貢献をした武信由太郎（文久三一月九三〇）は、氣高郡青谷町の出身である。明治三十年には、頭本元貞（文久二月一九四三）と共に The Japan Times を創刊し、三十八年には早稲田大学教授となり、在

任中 The Japan Year Book を創刊して日本の海外紹介に努めた。頭本元貞は、日野郡の人で、ジャパンタイムズの支配人であり、青少年層に英語と外国事情を知らせるために、その「学生号」・「少年号」なども発行した。また海外渡航二十数回という国際人でもあり、政界とも関係をもつて、伊藤博文・小村寿太郎らの知遇を得た。

思想界には、いわゆる「西哲学」を樹立した西晋一郎（明治二十九年一月九三三）がある。彼は東京帝国大学で哲学科に学び、後、広島高等師範学校・広島文理科大学に倫理学を講じて、東洋倫理学の重鎮となつた。著書に昭和十五年刊行の「東洋道德研究」をはじめ多くの名著があり、碩学であるとともに人格高潔で、子弟の教育にも力を注ぎ、門下に多くの学者が輩出している。

異色の思想家として、八頭郡智頭町の出身である伊福部隆彦（明治二十九年一月九五三）の存在も忘れない。彼は、後に述べる生田長江に師事して、文芸評論家として出発したが、詩人としても名を成し、「無為隆彦詩集」は、ヘルマン・ヘッセの激賞を受けた。後半生に入つては「老子」と「正法眼藏」の研究に没入し、また「人生道場無為修道会」という結社を創立して没年までこれを主宰した。

いわゆる「福本イズム」の提唱者福本和夫（明治二十七年一月九四三）は、東伯郡北条町の出身で、「経済学批判に於けるマルクス資本論の範囲を論ず」・「唯物史観の構成過程」等の論文がある。後者は、河上肇の唯物史観の研究方法を攻撃したものである。

著名的な公法学者である佐々木惣一（明治二十一月九四〇）は、鳥取市の出身で、憲法・行政法に関する自著三三一、編著二、論文四九七篇に

及んでいる。一般にその名が知られたのは、昭和八年の滝川事件のことである。戦後の昭和二十年十月に、内大臣府御用掛として帝国憲法の改正に着手し、翌月、「佐々木案」と呼ばれる「帝国憲法改正の必要」を天皇に進講したことであろう。

自然科学の分野には、まず医学に原田謙堂（文化二年一月九三〇）がある。気高郡青谷町山根の出身で、江戸に出て篠作院甫に種痘について学び、明治四年の種痘令に先立つて因伯二州に種痘を施行した。彼は種痘の再三接種説を主張し、これが「種痘規則」に取り入れられた。

電気生理学を専攻した橋田邦彦（明治二五年一月九四〇）倉吉市のが生まれで、昭和十五年、近衛内閣の文部大臣となり、終戦後戦争犯罪人の指名を受け自決したことはよく知られている。著述には、生理学関係のほか、禅に関して「正法眼藏解意」などがある。その門弟に、日野郡日野町出身で「日本医師会雑誌」編集委員長の杉靖三郎（明治三九年一月九〇六）がある。

このほか、癌研究に東伯郡羽合町出身の中原和郎（明治二十九年一月九四六）・齋母学に日野郡溝口町出身の橋谷義孝（明治二一年一月九四六）らもある。

## 美術の世界

遠藤董が、郷土洋画壇の鼻祖であることは前に記した。その作品として「鳥取城」二号・「清水彦五郎像」一五号の二点が鳥取図書館所蔵となっている。しかし、かれ以後に名をなした画家に、遠藤がどのようなつながりを持ったかは明らかでない。

香田勝太（明治二八年一月九四六年）は、日野郡溝口町の生まれで、明治四



京に前田寛治写実研究所を創設して新写実主義を提唱するとともに、郷里の「砂丘社」とも提携し、地方画壇の振興に寄与するところも大きかった。

西部の香田、中部の前

田に統いて、東部に伊谷賢藏（明治三十五—昭和四五）が現われた。彼は鳥

取市出身で、大正十二年、京都高等工芸学校卒業後、関西美術院で黒田重太郎に師事した。大正十五年に二科展に入選して以来、二科会を中心に活躍し、関西の二科系作家による白虹会を組織した。

また終戦後、同志とともに行動美術協会を創設している。戦中はしばしば華北に渡り、大同石伝や、中国の庶民生活を描いているが、そうしたことから、晩年には東洋的油彩ともいべき画壇を拓いて、関西画壇の重鎮となつた。

現在活躍中の洋画家も多く、米子市出身の篠鹿彌（明治三四—）は日本評議員、光風会評議員・審査員として活躍している。もと鳥取大学教授であった浜田宣伴（明治三三—一九〇〇—）は独立会友で、入選三十回に及んでいる。鳥取市出身で鳥取市在住の尾崎悌之助（明治四三—一九一〇—）は、伊谷賢藏の徒弟で、画風もその影響を受け、行動美術協会会員として個展開催も數十回に及び、行動美術派の俊英とされている。

洋画界の盛況に比べて、日本画はやや不振といえる。その中にあって異彩を放っているのは、大阪市初の名譽市民となつた菅橋彦（明治一八七八—一九六四）であろう。彼は鳥取市に生まれ、幼時を倉吉市に過ごしたが、五歳のとき大阪に移り、終生をここに暮らした。絵は独学といわれるが、父盛南も画家であったと伝えるから、その影響は当然考えられる。画風は古土佐、大和絵の格調の高いもので、昭和二十四年以来、日雇に招待出品を続け、三十三年には芸術院恩賜賞を受けている。

彫刻家として知られる人に、仏像彫刻の国泰石（明治一二一昭和三七）がある。彼は八頭郡智頭町の出身で、明治三十六年、日本美術院

に入り、三十八年には国宝修理技師となつた。彼が関係したのは、奈良の法隆寺・興福寺・東大寺を始め、近畿・中四国・九州の各地寺院の仏像修理で、また東京湯島の靈雲寺・大阪四天王寺はじめ各地に仏像・肖像彫刻の作品も多い。

大正・昭和期に入つて、本県でも「彫塑」界は大いに活氣を帯びてきた。

鳥取市出身の長谷川塊記（明治三一八）は、朝倉文夫について学び、日本彫塑协会会员、日展審査員で、その作品で郷土に飾られているのも多い。

倉吉市出身の早川魏一郎（明治〇五一）は、新制作会員、多摩美術大学教授で、代表作に「女の顔」がある。

日野郡出身の辻晋堂（明治四三—一九一〇—）は京都市立美術大学教授で、二紀会員・院展同人であり、代表作「詩人」がある。

数少ない建築家に、東伯郡北条町出身の岸田日出刀（明治三二一）がある。前東京大学工学部建築科教授で、東大安田講堂、同図書館、ニューヨーク万国博日本館等を設計し、倉吉市庁舎は、彼の郷土に残した代表作である。

工芸界には、明治から大正初年にかけて活躍した刀士宮本包則（天保一八三〇—大正一五）がある。かれは東伯郡三朝大柿の人で、二三歳のときから備前の祐包についてその技を学び、明治年間に再度の神宮式年祭に御刀を鍛えた。また明治・大正・今上天皇をはじめ、宮家の守刀も奉納している。明治三十九年には、帝室技芸員に任せられている。

鳥取県の工芸を語る時、忘れてならない人物が吉田璋也（明治三一八九八）である。

鳥取県の工芸を語る時、忘れてならない人物が吉田璋也（明治三一八九八）である。

（昭和四七）である。かれの本業は医学博士の耳鼻咽喉科医であるが、

ある意味では民芸運動がその本業であったといえるのかも知れない。日本の民芸運動は、民芸という言葉とともに柳宗悦によつて始められ、その第一歩は昭和元年の「日本民芸美術館設立趣意書」の発表と「工芸の道」の刊行であるといわれるが、吉田璋也が柳宗悦に師事したのは、これより数年前の大正九年であったと彼が語っている。

地方の民芸品の復興運動・新作運動が生まれるのは、昭和六年以降であるが、この年たまたま大阪から帰郷して医院を開設した吉田は、鳥取県の民芸運動の開拓者となった。彼の帰郷早々、鳥取民芸協同がつくられて新作運動が展開され、昭和二十四年には日本初の東洋の民芸品を陳列する鳥取民芸美術館もつくれられて、鳥取県の民芸の名を全国的に高らしめている。

## 文芸

文芸・社会・宗教の各分野で活躍した特異な人物に生田長江（明治一五一—大正二二）がある。日野郡日野町の人で、東京帝国大学哲学科に美学を学んだ。在学中、上田敏・馬場孤蝶らが創刊した雑誌「芸苑」の同人となり、卒業の年、明治三十九年には、評論「小栗風葉論」を同誌に掲載して注目された。四十年には与謝野晶子を中心とした秀文学会を作り、大正三年には、森田草平と雑誌「反響」を創刊した。その立場は、新理想主義から社会主義に移ったが、晩年には宗教的人間觀を深めていった。著書には、評論「最近の文芸及び思潮」、小説「哀史」、戯曲「円光」、翻訳「ニイチヨ全集」などあり、未完の

遺稿「釈尊伝」がある。

詩人には、まず横瀬夜雨と並んで「文庫派」詩人の代表とされてゐる伊良子清白（明治一八七七—昭和二二）がある。八頭郡河原町曳田の出身で、本職は医師であったが、その詩風は明治のロマン主義文学の一面を代表するもので、取材の視野は甚だ広い。詩集としては、精選した詩一八編を収めた「孔雀船」一巻（明治三九）がある。

純真な魂の苦悩を歌つた感傷的な詩風で世に迎えられた詩人生田春月（明治二五—昭和五）は、米子市道笑町の出身で、家が貧しく、一家とともに朝鮮に渡り、のち一六歳のとき帰郷したが、明治四一年、一七歳のとき上京して、生田長江のもとに寄宿してその厚意を受け、文学と語学とを独學した。詩集に、「靈魂の秋」・「感傷の春」、小説に長編の「相寄る魂」があり、ハイネ・ゲーテ・ドストエフスキイなどの翻訳も多い。昭和五年五月、瀬戸内海で投身自殺をとげた。

俳人坂本四方太（明治六一—大正六七）は岩美郡若美町大谷の人で、東京帝国大学国文科を卒業した。「高時代に仙台で高浜虚子に親しみ、上京後は虚子の紹介で正岡子規の指導を受けた。明治三十一年九月「ホトトギス」が東京で発行されるようになつた時、編集同人に、子規をはじめとして、内藤鳴雪・高浜虚子・河東碧梧桐・四方太らであった。作品は物語的内容「齋表くみて下谷を帰る夜寒かな」「あはれる女もありし絵踏かな」といふ傾向をもつてゐる。のちに、子規が創めた写生文に力を注いで、「写生文集」「夢の如し」などの著作がある。郷土の俳壇にも尽すところが多く、鳥取の「卯の花会」は同好者の集まりで、会の名は四方太が命名している。

自由律の俳人尾崎放哉（明治一八五—大正一五）は、鳥取市立川町二丁目

の出身で、東京帝國大学法學部を卒業して約一〇年間、保險会社に勤めたが、酒の失敗で大正十二年に退社した。そこで、自ら無一物となつて、京都鹿ヶ谷の一燈園に投げ、下座奉仕の生活に入ったが、長く続かず、京都知恩院常照院・兵庫須磨寺・福井常高寺等の寺男として転々とし、大正十四年になって、小豆島の札所南郷庵によつて病のためこの世を去つた。かれは大正五年ごろから荻原井泉水らの「層雲」に投句しているが秀作は晩年に多く、短期間に近代俳句史上に不滅の作品を残した。句集に「大空」がある。「咳をして一人」、これは病中の作である。鳥取市にあるその句碑には、「春の山のうしろから煙が出だした」の一句が刻まれている。

鳥取「卯の花会」の一員で、前記の坂本四方太の影響を受けた田中寒樓（明治一〇一～昭和四五）は、八頭郡河原町小畠の人で、子規の編集発行した新聞「小日本」に投句していた。

明治三十三年ごろ、四方太が寒樓に送った手紙に、子規が「近頃の『日本』の投書家内では、寒樓が『等だ』と言つたとある。また、子規は「浪速に（松瀬）青々、因幡に寒樓あり」とも言つたと伝えられる。「草萌のいのちを人にわかつたばや」「五月雨のものや川屋にゆく所」などの句がある。晩年には、わが在るところを「寒樓道場」と称し、天衣無縫の言行で、野人ぶりを發揮した。

小説家白井喬二（明治二二～八八九）は、本名井上義道で、父母ともに鳥取藩士族の出身。父は官吏で、各地に転勤したので、かれは横浜市に生まれたが、父が晩年郷里に帰つて郡長・町長などを勤めたので、かれも少年時代を米子市に過ごした。米子市の小学校に在学中に

野出身の小寺雷吉が、明治二十二年以来音楽教師として勤務していくから、村岡の帰郷以前に二人は、多少ともその感化を受けていたかも知れない。岩美郡岩美町馬場出身の田村虎藏は、音楽学校卒業後、兵庫県師範学校に勤務し、ついで明治三十一年には、東京高等師範学校兼東京音楽学校助教論に転じた。

明治三十年代は、言文一致運動の確立期で、文学界・教育界ともに言文一致運動が大きく取り上げられ、国定尋常小学読本に口語文教材が多くなり、尋常小学校唱歌の歌詞にも言文一致文が用いられた。音楽教育に言文一致体歌詞の必要を説いたのが田村虎藏であり、かれはその歌詞に納所弁次郎と共に進んで作曲した。田村の作曲は、明治・大正期生まれの人々に印象深い「大黒様」「金太郎」「花咲爺」「浦島太郎」など、その数は多い。彼は、明治四十三年、東京音楽学校教授となり、大正十一年には音楽研究のため欧米視察に赴いたが、この視察中に児童の发声法の研究、鑑賞教育の必要性を痛感し、帰國後、教育音楽の元老として多方面に活躍した。

永井幸次は、鳥取市の生まれで、幼少のころから讃美歌に親しみ、一五歳のとき鳥取に来た宣教師（アメリカ人）ローランド夫妻について音楽を学んだ。かれの音楽学校入学は、田村虎藏に刺激されたものと伝えられる。音楽学校卒業後は静岡県師範学校・鳥取県師範学校教諭となり、鳥取には約六年いて、この地方の音楽の普及に尽力した。三歳のとき、明治三十七年に神戸に、ついで大阪に移り、ここで永井の夢であった音楽の普及と音楽教育の確立が実現することになった。音楽教科書の編さん、市民合唱団の指導がそれであり、大正四年には、大阪音楽学校の創立となつた。これが、のちに昭和

の出生で、東京帝國大学法學部を卒業して約一〇年間、保險会社に勤めたが、酒の失敗で大正十二年に退社した。そこで、自ら無一物となつて、京都鹿ヶ谷の一燈園に投げ、下座奉仕の生活に入ったが、長く続かず、京都知恩院常照院・兵庫須磨寺・福井常高寺等の寺男として転々とし、大正十四年になって、小豆島の札所南郷庵によつて病のためこの世を去つた。かれは大正五年ごろから荻原井泉水らの「層雲」に投句しているが秀作は晩年に多く、短期間に近代俳句史上に不滅の作品を残した。句集に「大空」がある。「咳をして一人」、これは病中の作である。鳥取市にあるその句碑には、「春の山のうしろから煙が出だした」の一句が刻まれている。

鳥取「卯の花会」の一員で、前記の坂本四方太の影響を受けた田中寒樓（明治一〇一～昭和四五）は、八頭郡河原町小畠の人で、子規の編集発行した新聞「小日本」に投句していた。

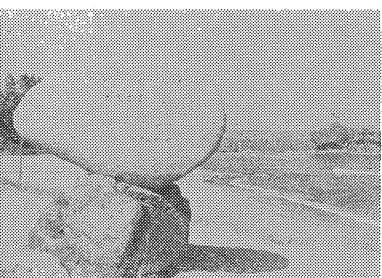
明治三十三年ごろ、四方太が寒樓に送った手紙に、子規が「近頃の『日本』の投書家内では、寒樓が『等だ』と言つたとある。また、子規は「浪速に（松瀬）青々、因幡に寒樓あり」とも言つたと伝えられる。「草萌のいのちを人にわかつたばや」「五月雨のものや川屋にゆく所」などの句がある。晩年には、わが在るところを「寒樓道場」と称し、天衣無縫の言行で、野人ぶりを發揮した。

小説家白井喬二（明治二二～八八九）は、本名井上義道で、父母ともに鳥取藩士族の出身。父は官吏で、各地に転勤したので、かれは横浜市に生まれたが、父が晩年郷里に帰つて郡長・町長などを勤めたので、かれも少年時代を米子市に過ごした。米子市の小学校に在学中に

は、生田春月らと小回覧誌をつくり、また米子で中学校に入学した年には、一歳で小説を執筆して地方新聞に連載するという早熟ぶりであった。大正末期に始まる大衆文学運動の自他共に評す指導者で、作品多く、中でも「富士に立つ影」は、中里介山の「大菩薩峠」と並ぶ代表的長編時代小説である。

日野郡溝口町出身の大江賢次（明治三八～一九〇五）は、大正末年から「一俵の米」「行け、ラジル」などの農民小説を書いたが、昭和五年に、パルチザンを描いた「シベリヤ」が「改造」の懸賞創作に入選して有名になった。「絶唱」や、自伝「アゴ伝」などの作品がある。

### 多彩な音楽界



田村虎藏（大黒様）碑  
(白兔海岸)

明治二十五年七月、当時東京音楽学校の校長であった村岡範為馳が帰郷したことが、鳥取の音楽界に大きい刺激となつたこと、その影響で林重浩らが音楽学校入学を志したことは前に記した。この年九月に音楽学校に進んだのは、林のほか田村虎藏（明治六一～昭和一八）、永井幸次（明治七三一～九四三）と永井幸次（明治七三一～九四三）で、林と田村の二人は、いずれも鳥取師範学校の卒業生であった。鳥取師範学校には、上

二十七年には大阪音楽短期大学となり、三十三年、かれ八四歳のとき、現在の学校法人大阪音楽大学となつた。彼こそは、音楽家であると共に、偉大な音楽教育事業家といふべきであろう。

岡野貞一（明治一～一九四一）は、鳥取市西町の生まれで、林・田村・永井より四年おくれて音楽学校に入学し、卒業後は研究所生となり、明治三十九年から昭和七年まで、同校の助教授・教授として在任した。堀内敬三氏の談によると、彼は声楽を専門としたが、ピアノやオルガンをよく奏し、またチョロもたしなみ、ことに作曲に秀でていた。樂界に残した業績は、声楽教授と作曲の面においてであり、ことにその作曲した唱歌は、歌いやすく、よく詩情をとらえてその情景を写し、わが國小中学生は勿論、一般国民の愛唱せるものが多かった。「春が来た」「故郷」「臘月夜」などの作曲がそれである。

### 結び

鳥取県は、総面積三、四九一・七〇平方キロメートル人口五六八、七七七人で、面積・人口とも四七都道府県中、下位にあり、人口は最少である。交通の便も冒頭に見た明治初年より大きく前進したとはい至便とはいえない。

しかし、このような悪条件の上におかれた鳥取県の近代文化史が意外に輝かしいものであることを注目したいと思う。それを支えるものは、藩政時代以来の伝統であり、風土の生んだ内省的なまつ不屈不屈といえる一面をもつ県民性に由来するものといえよう。

（鳥取大学教育学部教授）

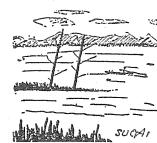
（参考）新日本人物大綱鳥取県・鳥取県百傑伝・鳥取県郷土史

## 人物を中心とした

## 文化郷土史

—島根県—

## 枝野茂



今から千二百余年前、若い国守として、はるばる奈良の都から意宇郡（今の八束郡）の国府に来住した門部王（かどぐのおおきみ）は「奈良の都を思うて」と題して

おうのうみ 河原の千鳥 汝が鳴けば

わが佐保川の おもほゆらくに

と詠じた。万葉の歌人の故郷を思う感懷は、今なお現代の人の心をもうつものがある。

同じく万葉の歌人として私達が忘れることが出来ない人に柿本人麻呂（かきのもとのひとまる・大化年間頃）がある。その本領とする相關歌に、彼の純真な生命の息吹きを感じることができるものといえよう。

官位は低かったが、歌聖としてたつとばれているこの人物は島根の文化のあけぼのを告げる人物であった。

もともと飛鳥時代にはすでに島根の最も古い寺である鷦鷯寺とか清水寺は創建されているし、考古学的遺跡は他の県と同じように、繩文式文化時代はおろか、石器時代にもさかのぼることができが、やはり、この頃から文化の光がさしこんできたというべきであろう。

このように歴史のある島根県である。そこで、多分に羅列的なきらいはあるが、明治以後の芸術・文化の担い手であった人々を、故人を対象にしづつて、ありかえってみるとよい。

帰り来て 又あふほども 行くかたも

\*  
思へば遠しみ 越路の雪

と詠んで歌人に千家尊福（せんげたかとみ・弘化三——大正七）がある。彼は政治家としても名をなしたが、著書に「越の雪ぶり」とか「筑紫の道ゆきあり」あるいは「まちし出でまし」などがあるよう、国学和歌をよくした。

俳人として最初にあげなければならない人物に大谷纏石（おおたにぎょうさせき・明治三——昭和八）がある。彼は松江中学在学中、小泉八雲に愛され、東大英文科卒業後、教壇につとめた。二高在学中に俳句を志し、上京後は正岡子規の門に入り、日本派の新進として早くから名を成しておらず、島根とくに出雲地方における日本派俳壇が興隆したのも彼の誘導によるものが多く、纏石の名は永遠に残することはできないであろう。

脚氣やゝ怠る湯治 春暮るる

大谷纏石の一句である。

おなじく地方俳壇の興隆につとめた功績の大きかった俳人に奈倉梧城（すとうごじょう・明治四——大正四）がある。

柿落葉 柚侘びつゝ 掃きにけり （五城作）  
月（なぐらごげつ・明治九——？）があつた。  
助炭おく 音に鳥立つ 池館かな （梧月作）  
この梧月を終始一貫たすけて地方俳壇の開拓に尽したのが祝羽風（ほうりはふう・昭和七歿）である。

切りつくす 谷の雜木や 水温む （紅山作）  
その句作に熱心なことは驚くばかりで、殆んど全生活を句作に傾注したといってよいであろう。また出雲地方に対して石見地方の俳壇とくに浜田俳壇の全盛時代をつくったのが山崎紅山（やまさきこうざん・明治九——昭和一八）である。

長火鉢 苦吟の鼻を あぶりけり （羽風作）  
子規の指導をうけたが、子規歿後俳壇が碧梧桐の手に帰し、新傾向の俳句が盛んだった頃に、碧門の四天王の一人として、独特的風格をもち、天下の俳人として仰がれたのが広江八重櫻（ひろえやゑざくら・明治一二——昭和二〇）である。また、ホトトギスに投稿をつづけ、天下に俳名を知られた人に原石鼎（はらせきてい・明治一九——昭和二六）があった。彼はホトトギスの編集にあたり、或は東京日々新聞に入ったこともあるが、大正十年には独立して中央俳壇に活躍し、「鹿次屋」を創刊、二千数百の門下をかかえて、俳壇の雄となつた。

一枝の 椿を見んと あることに （石鼎作）  
感受性のつよい俳句である。

春の山 草履をはいて 上りけり

これは虚子の俳壇復帰以来、終始一貫ホトトギスの陣営を守つて奮闘し、出雲俳壇の元老として仰がれた山本村家（やまとそんか・明治一六——昭和一九）の句である。大正年代に入ってから、後進に大きな刺激を与えた俳人に原本神桜（はらもとしんおう・明治二〇——昭和一六）がある。

鯉はうつしぬ 残るにほひに 行水す （神桜作）

その句作に熱心なことは驚くばかりで、殆んど全生活を句作に傾注したといってよいであろう。また出雲地方に対して石見地方の俳壇とくに浜田俳壇の全盛時代をつくったのが山崎紅山（やまさきこうざん・明治九——昭和一八）である。

その作風は温雅軽妙、用語の練達、着想の新鮮、などによつて動か  
は也立つ乍らとひ多く我へてゐる。

また、漢詩の面では、山陰詩界を一丸とすることに成功した横山雨露（よこやまたいせつ・明治元――大正11）の名があげられるべきであろう。

た文学博士、医学博士森欧外・森林太郎（もりりんたろう・万延元  
――大正一一）がある。森林太郎が美術学校教官時代、坪内博士ら  
と論戦をしたかわしたのは森林太郎の面目躍如たるものがあった。  
彼はのちに帝室博物館長（今の東京国立博物館の前身）帝室美術院  
長（今の日本芸術院長）となるなど幅広い活躍をしたことはあまり  
にも有名である。ドイツ文学、ロシア文学、仏文學、英文學などに  
精通し、著書も多く、近代日本文学史に不滅の光をはなった人物で  
ある。



(浜田農耕所理事)に頼望され、島村家に養子となつたのが島村抱月(しまむらほうげつ・明治四十七)である。彼が著名論文を発表したのは明治三十九

年再興の早稲田文学主幹と

詩を發表し、その詩は直截的な表現の中に現実味と高雅な詩境をしめした。

詩を發表し、その詩は直截的な表現の中に現実味と高雅な詩境をしめした。

まで十四年間本格的な作家であり、その上文学活動が少ない。彼は石見が生んだらわずか四十一歳で短い生

・  
・ 挿野和夫（えののかづお）  
・

朝日新聞の「天声人語」は天下の絶品と評され、ために新聞の紙価を高らしめたが、その名筆をふるったのが永井瓢斎（ながいひょうさい）。明治一五——昭和二〇）であった。彼は昭和二十年八月六日の空襲にあたって直撃弾をうけて即死したが、県下には「天声人語」の切り抜きを保存し、あるいは得意の俳画を珍藏して、故人をしのぶ人が多い。



詩を發表し、その詩は直截的な表現の中に現実味と高雅な詩境をしめした。

西周（にしあまね・文政一二——明治三〇）は日本人として正式に西洋近代の人文諸科学を学んだ最初の人であった。また「哲学」という言葉自体の造語にかかるものである。

（三〇）は美術研究家で、殊に浮世絵

権威として重きをなし、また郷土に関する著作

が多いため、児童文学史上に大きな足跡を残した天野雑音

明治一二一—昭和一九)も忘れることの出来ない

小波、久留米武彦らと日本趣味講演会を組織し

興につとめて新分野を開拓し、全国を巡回し演したが、新しハ題材と独自の話術によつて、

され、県民に親しまれたが、昭和一九年九月の

な焼死をとげた。

原爆の聖者として輝く人が永井隆（ながいとよむすめ）

昭和二六)である。彼は飯石郡三刀屋町出身で、原爆にあって妻を失い、自らも被害をうけて、

いた原子病が易進し、遺児一人をつれて病臥

「ロザリオの鐘」「この子を残して」「ふふふ

いた」等の著書はすべて病床で繰り返し日本に紹介された。また、病床にある数年間、毎日欠かさず

を記録したが、これは原爆症状について貴重

専門医にとって大切な文献となつた。いま郷

なって因われたる文藝他二篇の論文であった。以後彼は西歐文芸、新演劇の方に一見識を持つに至り、同四十二年「文藝協會演劇部」を創立したが、大正二年には自己の革新的立場から同協會を脱して、芸術座を起し、それ以後は芸術座の事業に没頭し、身心を打込んで新劇運動の旗をあげ一かどの成功をおさめたが、五十歳にもならず惜しくも病歿した。いま浜田市には「島村抱月顕彰碑」が栗島公園（あわしまこうえん）に建てられてあって、若い高校生の姿がそこに見られる。この島村抱月と共に、明治四十四年文藝協會で演出にあたったのが中村吉蔵（なかむらきちぞう・明治一〇——昭和一六）である。島村抱月は浜田市の奥の金城村の出身であったが、彼は島根県の小京都とよばれる津和野町出身である。大正三年が、文藝協會が解散し、芸術座が成立すると、抱月に招かれて、同座舞台監督となり、飯、帽子とビン、真人間その他の社会劇を鉛筆上演した。大正七年抱月歿後は専ら創作にふけり、井伊大老の死、大塩平八郎、錢屋五兵衛父子等多くのものを發表し、且つ上演している。彼は島村抱月が開拓した新劇運動の実践に成功したともいえるし、又歐州演劇に関する研究及び作劇術、また舞台劇場に関する理論と實際両方面における造詣がふかく、近代演劇史など多くの著作がある。同じく、劇作家、劇評家として名声をほしいままでいたのが伊原青青園（いばらせせいえん・明治三——昭和一六）である。彼は健筆をふるい、その著述に日本演劇史、近世日本演劇史、明治演劇史などがある。

井隆博士記念館が建てられて、永井博士に闇するいろいろな資料が展示されている。

鉄鋼の研究、製鉄技術の指導に不朽の功績をあげたのが俵国一（たわらくにいち・明治五一一昭和三三）である。彼は浜田市出身、長じてドイツより金属顯微鏡を輸入し、鉄鋼の顯微鏡組織研究を導入し、大正十年には「日本刀の科学的研究」により学士院賞を受け、のち昭和二十一年文化勳章を、さらに二十六年には文化功労者として表彰された。現在、安来市に和鋼記念館があつて、そこに彼の研究資料がすべて寄贈されている。

また、現在の島根県立図書館の前身の島根県最初の図書館である「私立松江図書館」を有志とはかって松江市に開館したのが、木幡久右衛門（こはたきゅうえもん・明治元一一明治四二）である。明治三十二年に開館されたこの図書館が地方文化向上に果たした役割は大きいものがあった。

また、得意の名筆をふるつて、山陰の景勝を天下に紹介し、胸のすくような書きびきびした文章で青年を魅了したのが大町桂月（おおまちけいげつ・明治一一大正一四）であった。桂月の文と名は渴仰的だったのである。

\*

画人として、私達の視界にとびこんでくる人達は多いが、洋画家を先ずとりあげてみると、小豆沢碧湖（あずきざわへきこ・明治二〇頃死）を忘れる出来ない。彼は初めて日本画を学んだが、中年から油絵を研究し、油絵を松江に伝えた最初の人である。彼について洋画を学び、明治十七年には「方園舎」と称する私立画学校を創立したのである。

島根がプロレタリア陣営に送った唯一人の洋画家として千金貢事（ちがねかんじ・明治三四一一昭和四〇）がある。彼は浜田市の出身で、大正一二年浜田図書館階上で個展をひらいたが、浜田の人々は、このときははじめて油絵というものを接したわけで、油絵というものを持ちこんで紹介した最初の人物が千金貢事であったといふことになる。つまり、彼が浜田に最初に洋画を持ち込んだわけである。余談になるかもしれないが、そのときの個展の絵は未來風だったといわれ、画用紙に髪の毛がはりつけてあったりして、「これ

のサロンにも出品し、帰朝後も我が國名士の肖像画を数多く描いている。彼は島根が生んだ我が國肖像画の第一人者として仰がれ、多くの奇行を残して、惜しまれながら帰郷中亡くなつた。江津市出身の森脇忠（もりわきちゅう・明治二一一昭和二四）は不運の画家（洋画家）であったといふべきであらう。黒田清輝に画才をみとめられながら、そして帝展でも數回特選賞を受けながら、家事の都合で、その画業を十分のばすことが出来なかつたのである。もし、こうした事情に災いされなかつたら、彼は官展系作家として大成したであらうと思われる。伊藤素軒（いとうそげん・明治九一一昭和三一）は、はじめ日本画を学び、帝展に入選しているほどである。しかし、後には洋画に志して渡米し、かの地で美術学校に入学して苦学している。洋画を学ぶかたわら日本画を描いたが、とくに鯉の絵は好評を博したといふ。滯米六年で帰国し、和洋折衷ともいふべき絵を画いた。後には再び日本画に帰り、日本画とともに鯉の絵に専念した。郷土島根にも帰り、今県内にも優れた絵を残していく。

島根がプロレタリア陣営に送った唯一人の洋画家として千金貢事（ちがねかんじ・明治三四一一昭和四〇）がある。彼は浜田市の出身で、大正一二年浜田図書館階上で個展をひらいたが、浜田の人々は、このときははじめて油絵というものを接したわけで、油絵というものを持ちこんで紹介した最初の人物が千金貢事であったといふことになる。つまり、彼が浜田に最初に洋画を持ち込んだわけである。余談になるかもしれないが、そのときの個展の絵は未來風だったといわれ、画用紙に髪の毛がはりつけてあったりして、「これ



和訓 橋石会、王立油絵協会、などのメンバーに挙げられ、パリ遊して泰西美術の粹をたずねて研究につとめ、當時イギリスでは外国人としてはじめてサーの称号をもつ画家となり、英國王立肖像画会、王立油絵協会、などのメンバーに挙げられ、パリ

が油絵というものかとびっくりぎょう天（よしおん）するような絵であった。その後、日本プロレタリア文芸連盟が作られると、美術部のメンバーの一人となって、ポスターを作り、また社会主義的な雑誌に表紙やカットをのせていく。彼はまた島根にはじめて労農運動の火をつけた人でもあり、昭和四年には松江に帰つて、全国農民組合連合会島根支部の書記長となり、画を書いて、農民労働者の真只中に身を投じた。彼は昭和六年同志とともに治安維持法のために検挙投獄されたが、同九年に出獄後は再び画家として東京で活躍、春陽会、春台展などに作品を発表し、第二次世界大戦後には第二の故郷とした長野県で珠玉のような作品を数多く残した。今、彼の墓は県下の農民労働者諸君の温かい募金で浜田市に建てられているが、パレットに鉛を組み合わせた图柄が正面に見える。美術史をいくらめぐつてみても千金貢事の名は見えないけれども、そして、彼の作品はごく少数民族内にはないが、プロレタリアという言葉の存在するかぎり、彼は島根がプロレタリア陣営に送った唯一人の洋画家といふべきである。ごく最近亡くなった洋画家で、本県出身のうち最初に正規の美術教育を受けた人に草光信成（くさみつのぶなり・明治二五一一昭和四五）がある。彼は東京美術学校に西洋画科が出来てからしばらくして明治四十四年に西洋画科本科に入学したのであるが、これは本県出身の洋画家で東京美術学校で美術教育をうけた第一号であった。彼は大正五年東京美術学校を卒業し、ひきつづいて和田三造門に入り以後死に至るまで教導をうけた。そして、彼は他の郷土出身の洋画家の中でもとりわけ孤独の画家とよばれるにふさわしいのではあるまいか。というのは「絵画を画く」というのは所詮一人

ほ、その空室での作業に外ならない』ということを誰よりもつよく感じていたのではなかろうかと思われるからである。この画家が他の誰れよりも深切に郷土松江を愛したことや、さまざまな機会のさまざまなエピソードなどはすべてのことと無関係ではない。彼は大正九年一時帰郷し、松江に松江洋画研究所が誕生すると、その講師の一人となって、島根の地に洋画を根づかせることに一役買つたこともある。また、この画家の絵画には身近かに画家をとりまいているもの、例えば親しみのある風景や家族や周囲の人々をテーマにしたものが多い、その意味で、彼はアンチミズムの画家だったといえよう。大正十一年帝展に初入選、そのご帝展特選三回、そして、その後死に至るまで官展系作家として終始した。後年には、彼の作品に大作やダイナミックな迫力を求めるとは意味のないことであるが、小品や水彩画には他の追従をゆるさないものがある。昭和三十年に、川島理一郎、和田三造らと共に新世紀美術協会の創立会員にもなっている。

るつたが、明治三十七年には同志と謀つて山陰画協会をつくり、毎年展覧会を開催した。これは後に土筆会（つくしかい）と改名されたが、この土筆会展覧会が島根で日本画展覧会のはじめであった。彼はまた横山大観の来遊以来、文人墨客との往来も繁く、斯界の世話役をもつて任じた。

ある隠棲から、本籍が平田市にある藩倉鉄風（おちあいりうぶう・明治三〇——昭和一二）もあげるべきであろう。彼はチャキチャキの江戸ッ子氣質の画家であった。文展から院展に移り、そこでも容れられず再び帝展に逆もどりしたが、情実はびこる帝展に嫌気がさし、青龍社展に移り、そこも去って当時の沈滞した画壇に新風を起した。こそうとして明朗美術連盟を創設した。彼は天才的造型力と新色彩感覚とをもって、大胆な原色の駆使をほしいままにして、品位と感情を表現する作品を発表した。これは当時としては全く驚異であった。先年島根県立博物館で落合朗風遺作展が開催され、今では彼の作品が一層高く評価されるようになった。彼はわずか四十一歳で夭折したが、彼のような画家こそうぢもれた鉄脈といふべきである。

島根県が生んだ書道家は宇摩重治（いにしうまかずし、明治元昭和三）がある。彼は日下部鳴鶴翁が来遊したので、その門に入り、爾來書道に専念するに至った。大正六年には鳴鶴翁を会頭として、全国各派を網羅して大同書会を結成し、満天下に書道をひろめ、書道の雑誌「書勢」の編輯に当たり、十有二年、書道雑誌の権威として、各地を巡回し、後進の指導に当たった、そして書道の大家を郷土に多数東道したので、本県には明治大正の書家の作品が多く残っている。藥師寺弥峯（やくじじびほう、明治三八——昭和二〇）も島根書道界にとって忘れる出来ない人物で黎明期の島根書道の開拓者の一人であったといえよう。

郷土芸能の方面でとりわけねはならない人物に高山雅市（たかやままさいち・明治三九一一昭和三八）がある。彼は大阪で漫才を修業して帰郷したが、安来節の鼓は音のよさと巧みな間（ま）のとり方で名人芸とうたわれ、どじょうすくい踊りの写実的な名演技と獨特の表情は他の追従をゆるさぬものがあった。また、安来節の名を全国にひろめたのが渡部お糸（わたなべおいと・明治九一一昭和二九）で、地元の安来ではその功績をしのんで「お糸まつり」が毎年行われている。伊沢蘭春（いざわらんしゅ・明治二一一昭和三三）は起伏の多い人生経験をへたのち女優となり、演劇や映画さらにラジオにも登場して非常に人気があった。人形芝居のなかでもっとも操法が困難で熟練を要する糸操り人形が残っているのは全国に三か所といわれている、この稀少価値の高いものが石見の益田に残されているが、それには加藤三之亟（かとうさんのじょう・明治？——大正？）の功績にもよるというべきであろう。また出雲の漁村に生まれて土地の芝居で役者になり、大阪に出て左団次の門に入り、さらに東京に出て明治の二大名優団十郎、菊五郎と女形として一座した人物に市川門之助（文久二一一大正三）がある。おそらく島根県が生んだ俳優で、これくらい出世したものは珍しいといわねばならない。いま、生け花様式として小原流の名は全国に高いが、この小原流創始者が小原雲心（おばらうんしん・文久元一一昭和五）である。彼ははじめ池坊の花を修めたが明治四十五年に小原式國風盛花と命名して新たに一流をひらいた、これが小原流である。この独創的な「盛り花」形式の生け花は洋風建築に大いにマッチした。小原流はこうして当時の社会的風潮にのって大いに歓迎された。盛り花の基礎が築かれたのであった。また、古浦円流（こううらえん

した小村大雲（おむらたいうん・明治一六一—昭和一）は、宮展系日本画家であつた、檍戸観海（まきどかんかい・明治？—昭和？）などがある。直接島根県出身ではないにしても、父が島根県平田市の出身で

郷土芸能の方面でとりあげねばならない人物に高山雅市（たかやままさい・ち・明治三九——昭和三八）がある。彼は大阪で漫才を修業して帰郷したが、安来節の鼓は音のよさと巧みな間（ま）のとり方で名人芸とうたわれ、どじょうすくい踊りの写実的な名演技と獨特の表情は他の追従をゆるさぬものがあった。また、安来節の名を全国にひろめたのが渡部お糸（わたなべおいと・明治九——昭和二九）で、地元の安来ではその功績をしのんで「お糸まつり」が毎年行われている。伊沢蘭晉（いざわらんしゅ・明治二二——昭和三三）は起伏の多い人生経験をへたのち女優となり、演劇や映画さらにラジオにも登場して非常に人気があった。人形芝居のなかでもっとも操法が困難で熟練を要する糸操り人形が残っているのは全国に三か所といわれている。この稀少価値の高いものが石見の益田に残されているが、それには加藤三之亟（かとうさんじょう・明治？——大正？）の功績にもよるというべきであろう。また出雲の漁村に生まれて土地の芝居で役者になり、大阪に出て左団次の門に入り、さらに東京に出て明治の二大名優団十郎、菊五郎と女形として一座した人物に市川門之助（文久二——大正三）がある。おそらく島根県が生んだ俳優で、これくらい出世したものは珍しいといわねばならない。いま、生け花様式として小原流の名は全国に高いが、この小原流創始者が小原雲心（おばらうんしん・文久元——昭和五）である。彼ははじめ池坊の花を修めたが明治四十五年に小原式國風盛花と命名して新たに「盛り花」と名づけられたのである。この独創的な「盛り花」形式の生け花は洋風建築に大いにマッチした。小原流はこうして当時の社会的風潮にのって大いに歓迎された。盛り花の基礎が築かれたのであった。また、古浦円流（こうらえん

りゅう・明治一七——昭和二九）は松江に小原流の今日の盛況を見に至らしめた功労者である。

茶道は松平不昧以来の伝統をうけついで、現在でも盛んであるが、生涯を茶道（不昧流）に捧げた人物に海野林太郎（うんのりんたろう・明治三一一昭和三六）がある。茶道に關係して、茶器において名工振りを發揮したのが染次如錦（そめじょきん・明治一八一一昭和二三）で、なつめの二重張りの技法とすす竹の細工などは染次獨得の名人芸として世人の目をみはらせ、大正昭和にわたって彼は名声をほしいままにした。

＊

近代日本彫刻史に島根県出身ではじめてその名が見えるのが荒川龜斎（あらかわきさい・文政一〇一一明治三八）である。しかし、彼はあくまでも近代日本の彫刻のあけぼのを告げる時代の一人の職人といつた方が適切かもしだれない。そしてこの人に見る芸道一筋の情熱が幾多の後進に刺激を与えた。

彼はまた金彫、石彫、塗物、建築、庭園、書画等すこぶる多種にわたる作品を残している。荒川嶺雲（あらかわれいん・明治元一一昭和一六）は荒川龜斎の甥で松江に生まれている。はじめ龜斎の門に入つたが、のちには高村光雲など諸大家について和洋の彫刻を研究して帰郷した。

彼は松江から日本海に面したさびしい一村に移住し、世の常の如く名利や権勢を追うことなく、一心にその道に技を傾け、人格を練つた。根付、木彫など彼の作品は県下の各地にあるだけであるが、それらの作品には実にこまかい細工がほどこしてあつたりして、高い風趣があるものが多い。

ては、橋の美觀と宍道湖畔のふん囲氣をこわさないために欄干を本格的な高欄造りにするとともに、擬宝珠も昔ながらの姿にすることを主張した。現在の松江大橋を渡る人々のうちでどの位の人が彼のこうした配慮を知っているであろうか。残念なことは、戦時中郷里吉田村に疎開したまま上京の機会を失い、松江に移つたものほとんどは病のため作家活動も減衰し、その上戦後の芸術的風潮が激変したために、どうかすると中央から忘れられがちな境遇にあつたが、最も少ないのみ数で最も多くのことを表現する氣刀法を編み出し、日本民族固有の美を木彫に開花させようとした理想と情熱に支えられた作家としての業績は不滅のものがあるといえよう。その他、帝展で特選賞を受賞したこともある山根八春（やまねはっしゅん・明治一一昭和四八）、高村光雲の門に入り木彫を学び、高村光雲から高く評価され、光雲の一字を許されて景雲と号し、傑作も多い加藤景雲（かとうけいん・明治七一一昭和一八）、はじめ木彫を研究し、後、木象がん界に大きな進歩を与えた青山泰石（あおやまたいせき・元治元一一昭和八）、青山泰石の門に入り、大正初め頃帰国して出雲市大津に住み、彫刻に専念した圓山研石（そのやまけんせき・明治六一一昭和一三）、郷里の先輩米原雲海に師事し、帝展入選数回、師雲海と共に長野善光寺の仁王像を製作した石本曉海（いしもときょうかい・明治二一一昭和一〇）、叔父米原雲海の弟子となり、東京美術学校卒業後は帝展に数回入選して前途を期待されながら、晩年病氣になり、安来市の自宅で歿した木山青鳥（きやませいちょう・明治二九一一昭和三二）などがある。島根の藤絵は松江藩の藤絵師であった小島漆菴（こじましつこき）、や勝軍木光英（ぬるであんみつひで）以来の伝統をほこっている鶴原

それにしても、彫刻のジャンルでの一つの巨星は米原雲海（よねはらうんかい・明治二一一大正一四）であった。彼は内國勧業博覽會や東京彫工會、日本美術協会などに幾度も出品受賞し、審査員もつとめ、文展が創設されるや、そこにも出品受賞すること数回、ここで審査員をつとめ、自ら日本彫刻會を組織し彫塑から木彫への新しい途をひらこうとするなど、彫刻界のために尽すところ大であった。それは伝統的彫刻の最後の明星とよぶにふさわしかったかも知れない。郷里安来には松江の彫刻家荒川龜斎と浮彫の仁王像を左右一体ずつ製作しているしました、長野善光寺の仁王像も米原雲海が完成したものであった。これは明治、大正を通じての木彫の大作といわれ、彼の代表作である。彼が死んだとき、師高村光雲はその告別式にのぞみ、「自分の片腕をうばわれた」といつて暗涙にむせんだという。明治末年から文展の彫塑部では塑像派と木彫派との対立が次第にはげしくなり、氣刀彫りという新しい技法で古典彫刻を新しい姿で現代に生き返らせようとしていた木彫派の内藤伸（ないとうしん・明治一五一一昭和四二）は平櫛田中らと共に文展を去つて、横山大穂、下村徳山らの院展に移った。しかし彼はまもなく帝展へ帰つて、それはおそらく在野団体としての院展に失望したからであろう。彼は後年昭和二十一年には日本芸術院会員に推された。文展、院展、帝展、日展への出品三十二回、作家の意欲をもしつづけ、その間幾多の弟子を育てている。いま日展の木彫界がかつて何らかの形で彼の指導を受けた人たちによって盛況を見せている事実は見逃がすことは出来ないであろう。今東京音羽の護国寺には氣刀彫りの作品の代表的な作品があるが、県内に残る傑作の一つに隠岐神社にある「狛犬」がある。また松江大橋の架け替えに際し



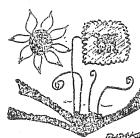
鶴羽（つるはらかくう・明治一三一一昭和二〇）は時代の世界に私達が見出すことの出来る人物の第一人者である。彼はまた招かれであろう。河井寛次郎（かわいかんじろう・明治二三一一昭和四一）ほど現代の陶工で個性的な釉を創り、使いこなしたものはないであろう。焼物の名手とはけだし彼にふさわしい言葉である。いま、倉敷の大原美術館には富本憲吉、パーナード・リーチ、河井寛次郎、浜田庄司の四人の陶工の作品だけを陳列した「陶器館」があり、彼の郷里にある足立美術館では「陶芸室」を設けて、彼の作品ばかりを陳列している。昭和三七年に島根県無形文化財に指定された船木道忠（ふなきみちただ・明治三三一一昭和三八）もまた島根のはこに足る陶工で、彼の窯は布志名（ふじな）窯である。古来布志名第一の名工としては雲喜（うんせん）があげられていて、しかし裏喜は技術に優れ、彼は独創力と心構えにまさっている。彼は布志名窯の伝統を復活すると共に、昔の布志名にもなく、彼が渡つて学んだ英國にもない、現代に生きる船木道忠そのものの仕事を打ち出したのである。

人物を中心とした

# 文化郷土史

—岡山県—

田柴



龜眠崎

学問（教育）を労働（生産）との結びつきにおいて捉えるこの実学思想の線上に、偉大な企業家・発明家が現われる。そのひとりが花筵の考案者、織機の発明家として名高い磯崎眠龜（一八三四～一九〇八）である。かれは窪屋郡茶屋町（現、倉敷市茶屋町）の生まれで、家は小倉織の帶地をつくっていた。安政五年（一八五八）二十五歳のとき両親に死別したかれは、江戸に出て領主戸奉公をはじめて輸入されたのは文久三年（一八六三）であるが、かれは輸入紡績糸を見学するため大阪まで出むき、改めて撚糸機の改良、糸染めの工夫の必要を痛感した。かねて小倉織の粗雑さに不満を抱いていたかれは、さつ

辞退し、ひたすら農業と教育・学問に精進したのもそのためである。陶淵明の徳をしたい田舎夫子の境遇にあまんじ、若者たちと共に芋を焼き淡茶をすすて学問を論じた三餘塾から、犬養毅・大原孝四郎・犬飼松韻・坂本金弥ら次代を背負ってたつ多くの逸材が輩出した。

この量表の技法に豪華絢爛たる新しい小倉織の技法を結合させようという試みである。明治五年（一八七二）家督を息子にゆずったかれは、狂人のように一部屋にひきこもり、黙々と筵織機の改良に専念した。ときあたかも明治政府は殖産興業政策をかけ、岡山県令高崎五六も地方産業の開発に情熱をそそぎ、製糸法の改良についても、政府を通してインド花筵の見本を取りよせ、業者を奨励して技術改良をすすめていた。このような風潮のなかで、眠龜は明治九年セイロン産のリュウビン織の帽子にヒントを得て、蘭草筵の模様織つまり花筵の発明のいとぐちをつかんだ。研究に家産を傾げながらもまず堅織二人織機を完成し、塩基性アーリン染料を使って蘭草の染色に成功し、明治十一年ついに極彩色の錦花筵を織りあげた。同十四年はじめロンドンに輸出し大変な評判になつたが、これが花筵輸出の発端であった。それはわが国の重要輸出品のひとつとなり、かれの事業も織機千台を擁するところまで発展した。同三十年事業を息子に譲って隠居し、同四十一年七十五歳でなくなつた。

このような生産的な近代文化の創造とともに、政治と深いかかわりをもつ情報文化がおこった。西尾吉太郎（一八五七～一九二九）が始めた『山陽新報』が、岡山県における近代的情報文化の草分けであった。かれは岡山市新西大寺町の古着商の家に生まれたが、たまたま明治九年（一八七六）十九歳のとき上京した。かれもまた、

近世もなかばを過ぎたころから、それまであるわなかた門谷学校も殷盛におもむき、また私塾・寺子屋の数もこのころから爆発的に増加した。岡山県民の知的水準をたかめ、近代文化を受容し創造する素地を形成するうえで、それらの果たした役割はきわめて大きいが、そのうち特に注目したいのが犬飼松窓（一八一六～一八九三）の經營した三餘塾である。

かれは都宇郡山地村（現、岡山市山地）の農家の生まれで、幼少のころ備中倉敷村（現、倉敷市）の儒者神崎小魯の門にまなんだが、深く悟るところがあつて家業に従事するかたわら独学で儒学を修め、その名声は近郷にひびき招ねられて講筵をひらくこともたびたびであった。そこで安政三年（一八五六）自宅の門長屋の一部屋を私塾にあて、近郷の若者たちを集め経書を講じ史書を論じた。これが三餘塾である。三餘とは、冬は春夏秋のあまり、雨の日は晴の日のあまり、夜は昼のあまりといふ意味で、その塾の名は、あくまで農耕を第一とし、勤労の余暇を利用して教育し学習する塾という意味を託したものである。農民学者であつたかれはまた近郷きっての篤農家で、耕地改良から施肥の工夫、さらに多角的経営の導入を試み、懇切に農民を指導した。この学問と労働を統一する論理がかれのいわゆる「守分躬行」である。百姓の修める儒学はあくまで百姓の生きかたの指針となる百姓の哲学でなければならないというのである。足守藩主で文学大名のほまれたかかった木下利玄の招きも

わずか二か月ばかりの滞在の間に新聞の意義と将来性をみぬき、岡山においても新聞事業を起そうと決心した。ところが、そのころすでに新聞発刊を計画していたひとがあった。岡山師範学校・岡山中学校の教師であった野崎又六がそれである。かれは県令高崎五六の後援で発刊を企てていたが、西尾青年にあい、その意氣に感じたかれは、その企画を快く西尾に譲ったうえ、新聞刊行に必要な編集長に小松原英太郎（一八五二～一九一九）を迎えたがよからうと親切に助言した。小松原は後年ドイツに留学し、そのころから長州閥と結びつき、桂内閣の文部大臣、枢密顧問官にもなった人物であるが、当時は自由民権の論客で『東京評論』という新聞に「圧制政府頗るすべし」という激越な調子の論文を発表し投獄されたこともある猛者であった。小松原は野崎の紹介で西尾にあつた。「新聞紙を発行して普通營利の業となさんと欲せば、よろしくこれを断念すべし。もしよいよ發行せんと欲せば、祖先伝來の資産を擧げてこれを失うことあるも悔いざる覚悟なかるべからず」と決意のほどをたしかめたが、西尾も負けず、「たとえこの事業のため資産を擧げてこれを失うも、悔ゆるところあらず」と答え、二人の意氣は投合し小松原は編集長におさまった。こうして明治十二年『山陽新報』は発足したが、ときは自由民権運動の全盛時代、岡山県でも両備作三國親睦会という民権団体が組織され、さかんに政府を批判し国会開設の要求運動を展開したが、それを熱心に支援し指導していたのが西尾・小松原の『山陽新報』であった。県令高崎五六は、強迫と懐柔の両面から『山陽新報』の廃刊を迫つたが、西尾は頑としてその圧迫をはねつけ言論・出版の自由をまもりぬいた。かれが生命・財産を賭しきりに助言した。

て育てた『山陽新報』こそ、今日の『山陽新聞』の前身であった。この自由民権の思想は、一時的であるにせよ文学・演劇にまで影響を及ぼした。角藤定憲（一八六五～一九〇七）の壯士芝居がそれである。かれは現在の御津郡御津町野々口の生まれで、十六歳の春、青雲の志を抱いて上京し、いちど郷里へもどったが再び大阪へ飛び出し、郵便配達夫や巡査になつたが、このころから民権思想に立場にたつ新聞であるが、この新聞に定憲が連載した政治小説が『東雲新聞』の記者になった。これは中江兆民の主宰する民権論の立場にたつ新聞であるが、この新聞に定憲が連載した政治小説が『剛胆の書生』である。そのころ末広鉄腸が『雪中梅』という政治小説を書いて評判になり、それを中村雁治郎が上演した。その演劇を観た中江兆民は定憲に「新聞や演説で主義主張を宣伝すると、その筋の取締りがつきものだが、芝居の筋のなかでやれば、自然でもあるし観衆に及ぼす影響も大きい。ひとつ一座を組織して芝居をやつてみないか」と勧めたという。こうしたことが動機になって角藤定憲の壮士芝居がはじまるのであるが、その最初の出し物が『剛胆の書生』。自作自演の素人芝居では大変骨が折れたが、民権運動のムードの中では東京でも結構評判になった。しかし民権熱がさめればそこは素人芝居の悲しさ、評判はがた落ちである。明治二十八年東京市村座の興業に失敗し、これを機に地方巡回の旅に出たが、明治四十年神戸大黒座の座屋でたおれ、四十三歳の短い生涯をおえた。

これら民権運動の系譜とは別に、信仰の自由の獲得運動が展開さ



オスボンを招き英仏医学館を開設させ、また同年横川太郎大医師ロイトルを招いていることなどから中も窮われる。このような風潮のなかで近代的な教育は政府の上からの指導だけではなく、民間の有志によつても進められていった。とりわけキリスト教の果たした役割は大きいが、これを岡山県に導入した人物として中川横太郎（一八三六～一九〇三）の存在を見落すことはできない。かれは岡山藩士の息子であるが、明治四年断髪令が出るとそつそく頭髪をきり断髪礼讀の街頭演説をやり、また解放令が発布されると、未解放部落のひとびとと積極的に交わり、部落の子弟の教育や衛生思想の普及のために奔走したといふ進歩的な思想家であった。そのかれがいち早くキリスト教に深い関心をよせたのも不思議ではない。明治八年四月かれは当時日本に来ていた宣教師テイラー博士を自宅に招き説教會をひらいたが、これがキリスト教師の岡山伝道の最初とされている。これを機に横太郎とその家族は熱心な信者となつたが、最初はこれを邪教として妨害・悪口するものも少なくなかつた。しかし横太郎の信仰は固くテイラー・アッキンソンらを招き伝道にあらせたが、同十一年にはベリー博士を神戸に訪ね、来岡して定住するよう促した。その結果、翌年ベリー・ケリー・ペラーの三宣教師とウイルソン女史が来岡した。ときの県令

れた。その指導者が日蓮宗不受不施派の僧日正（一八二九～一九〇八）である。かれは津高郡九谷村（現、御津郡御津町）の貧しい農家に生まれた。この地方は不受不施派の篤信者の多いところであるが、かれも八歳のときから摂津衆妙庵の僧日照や高楓の本行寺の僧日遍らについて修業を重ね、安政五年（一八五八）和氣郡益原村（現、和氣町益原）に大樹庵を結びその庵主になった。その後、不受不施派の僧侶・信徒はたびたび宗派再興の直訴を繰りかえしたが、日正が運動の前面にたつようになったのは明治元年（一八六七）大政奉還の直後からである。最初は京都二条城の新政府に訴えたが許されず、その後、不受不施派解禁の訴状をたずさえ、東京・岡山間を往来すること数回に及んだ。しかし、岡山県権令石部誠中の彈圧や日蓮宗他派の妨害にあって、目的の達成は容易でなかつたが、政府のキリスト教解禁、県令高崎五六の好意的な斡旋など局面の転換するなかで、明治九年ついにその宿願を達成した。その年、日正は益原の大樹庵から金川に移り不受不施派の本山として妙覺寺を建てた。こうして信徒の尊信を一身にあつめた日正も、明治四十一年八月で大往生をとげた。

## 二 欧米文化の影響

明治維新以後ほうはいとして高まつた革新的思想は、革新な欧米文化を積極的に取り入れようとする衝動にからでた。そのことは封建教学のメカであった岡山藩学校においてさえ、明治三年（一八七〇）皇學・漢学と並んで洋学の講座を設け、英國人ペシワル・

高崎五六も大歓迎で、東山の宣教師の住居ができるまで県令官舎をその宿舎に提供したほどであった。ベリーは岡山県立病院の医師、ウィルソンは同病院の看護婦、ケリーとペティーは旧藩主池田家の設けた源泉学舎の教師に迎えられ、それぞれ医療・教育に尽したが、ベリーはまた安息日学校（後の日曜学校）を開設し、また高崎県令も同十三年県令官舎を仮教会堂として岡山基督教會をつくった。

こうして中川・高崎らの尽力でキリスト教は岡山の知識層を信者にしてひろまつたが、その女子教育の発展に及ぼした影響はきわめて大きい。

岡山県ではじめて設けられた私立女学校は、明治十九年に創立された私立岡山女学校と私立山陽英和女学校で、今日の清心学園と山陽学園の前身である。前者は時の県知事千阪高雅の娘が社会事業のひとつとして始めたものであるが、その後ノートルダム会のシスターに経営をゆだねて今日に至っている。それに対し、後者は小野田伊之吉がアメリカ人宣教師オーチス・ケレーの協力を得て設立したものであるが、以後一貫して日本人の手で経営されてきた。なかでも見落すことができないのは上代淑（一七九一～一九五九）の影響である。

淑は愛媛県松山市に生まれ、明治二十二年大阪の梅花女学校を卒業するとともに、創立

三郎（一八八〇～一九四三）がある。かれは倉敷紡績所・倉敷銀行の創設者大原考四郎の子で、閑谷馨から東京専門学校（早稲田大学の前身）に進み、近代的経営者としての教養を身につけた。明治三十七年（一九〇四）二十五歳で家督を相続したかれは、倉敷紡績社長、倉敷銀行頭取、県下最大の地主として大原財閥を築いた。しかし、かれは決してエゴノミックアーマルではなかった。大正時代といえど地主と小作、資本家と労働者の階級対立がはげしく、至るところで小作争議・労働争議が起っていた時代である。かれはその対立を緩和し共存共栄をはかるために、大正十年（一九二一）大原家族会をひらき、それよりさき同八年には、かれの提案で労資協会を東京でひらいた。また、労働問題・社会問題の発明のため、同九年大阪に大原社会問題研究所を開設したが、ここでは労働

後まもない山陽英和女学校に赴任した。同二十六年アメリカ合衆国に渡りマウント・ホーリー・ヨーク女子大学に入学し、同三十年パチエ・オブ・サイエンスの学位を得て卒業、あたたび山陽英和女学校の教授にたつた。洋行帰りの新知識上代淑は、同四十一年わずか三十八歳で同校の校長に挙げられ、昭和三十一年他界するまでその職にあって学校経営と教育にその情熱を注いだ。彼女は熱心なキリスト教徒で、そのキリスト教的な人間尊重の教育は、山陽英和女学校創立の精神と完全に合致するもので、教育によって女性の人格をたかめようとする理念はたしかに素晴らしいものであった。しかし、家族制度をそのまま認め「良妻賢母」主義の域を一步も出なかつたこともいなめない。

キリスト教の影響のもとですぐれた美術家となつたものに大原孫三郎（一八八〇～一九四三）がある。かれは倉敷紡績所・倉敷銀行の創設者大原考四郎の子で、閑谷馨から東京専門学校（早稲田大学の前身）に進み、近代的経営者としての教養を身につけた。明治三十七年（一九〇四）二十五歳で家督を相続したかれは、倉敷紡績社長、倉敷銀行頭取、県下最大の地主として大原財閥を築いた。しかし、かれは決してエゴノミックアーマルではなかった。大正時代といえど地主と小作、資本家と労働者の階級対立がはげしく、至るところで小作争議・労働争議が起っていた時代である。かれはその対立を緩和し共存共栄をはかるために、大正十年（一九二一）大原家族会をひらき、それよりさき同八年には、かれの提案で労資協会を東京でひらいた。また、労働問題・社会問題の発明のため、同九年大阪に大原社会問題研究所を開設したが、ここでは労働



大原孫三郎

者を昼夜交代で就業させた場合の生理的心理的な影響などについて研究させている。また翌年には倉敷労働科学研究所を設け、同十二年には労働者の健康管理のために倉敷中央病院を設立した。

これらにみられる孫三郎の一貫した労資協調主義が、地主資本家的な発想にもとづくものであることはもちろんあるが、決してそれだけではなく、その発想はかれの強固なキリスト教的博愛主義にうらづけられたものであった。かれは明治三十二年（一八九九）二十歳のとき、岡山孤児院に石井十次（一八六五～一九一四）を訪ねた。十次は宮崎県のひとで医学を修めるため岡山に来ていたが、健康を害し邑久郡大宮村上阿知（現、岡山市西大寺上阿知）に転地療養していた。そのとき食の子供の面倒をみたのが縁となり、熱心なキリスト教徒であったかれは、明治二十年（一八八七）固い決心をもって岡山市門田の三友寺に孤児院を開設していたものである。

孫三郎は十次の人柄に傾倒すると共にキリスト教の教えに深く心酔し、ついに二十六歳のとき倉敷キリスト教会で洗礼をうけクリスチヤンになった。

かれは何不自由のない身でありながら、キリスト教的禁欲主義をもって生活の節度を守り、またキリスト教的博愛主義の立場から十次の孤児院経営を物心両面からたすけ、十次の没後はみずから孤児院長となりその経営に努力した。かれの偉さは、資本家としての利潤追求と、労働者・農民の幸福、文化の発展との調和にたえず心を碎いたところにある。とりわけ注目されることは、明治三十五年のこの倉敷教育懇談会というものを組織し、その年から日曜講演会という開放講座をひらき、志賀重昂・大隈重信・菊池大麓・幸田露

### 三 近代文化の全盛

明治末期から大正、昭和の初期は、岡山県の文化活動の飛躍的な発展の時期ではないかと考えられるが、その背景には明治期の中等教育の充実がある。明治十二年岡山藩学校以来の伝統をもつ岡山中学校（朝日高校の前身）が設立され、同二十八年津山・高梁中学校がつくられ県立中学校も三校になつたが、私立中学校も関西・関谷・金光・興譲館・矢掛・金川・天城などの中学校が設立され、教育熱にあふれた個性的な教育で多くの人材を輩出したが、県民の教育的関心をたかめたものは第六高等学校の存在であろう。

明治三十三年、広島県との烈しい学校誘致競争のすえ、県民・市民の熱狂的な支持を得て、第六高等学校を岡山に誘致することに成功した。学校には県内外の俊秀が雲集し、卒業後は大学に進んで有為の人材となつたが、そのなかから優れた学者も輩出した。そのひとりが近藤万太郎（一八八二～一九四六）である。かれは邑久郡豊

村五明（現、岡山市西大寺五明）の生まれで、第六高等学校を卒業して東京帝国大学（東京大学の前身）農科に進み種子学を専攻したが、明治四十四年ドイツに留学し、帰国すると大原孫三郎にむかえられ大原斐農会農業研究所の所長となった。かれは米麦の發芽力の研究や、稻・蘭草などの品種の改良につとめ、『日本農林種子学』『穀物講義』『米穀の貯藏』などの名著をあらわした。種子学の世界的權威として学界に重きをなし、昭和二十一年学士院会員にえられたが、その年六十四歳で死んだ。かれが育てた研究所は、現在岡山大学農学部の大原農業研究所として存続している。

近藤万太郎より三年先輩に理論物理学の權威仁科芳雄（一八八〇～一九五一）がいた。かれは明治二十三年浅口郡里庄町にうまれ、第六高等学校から東京帝国大学理学部の電気工学科に進んだ。子供のころから秀才のほまれがたかかったが、大正七年大学を首席で卒業し、そのまま長岡半太郎の理化研究所にはいった。三年後に海外留学を命ぜられ、ケンブリッジ大学のラザーフォードのもとでX光線の研究に従事し、ついでコペンハーゲンのボーアのもとで量子力学を研究した。昭和三年八年間の留学をおえて帰朝し、やがて理化学研究所に量子力学研究室を設け、その主任として原子物理学や宇宙線の研究とともに後輩の指導にあたつ



前田泣董（一八七七～一九四五）竹久夢二（一八八四～一九三四）正富旺洋（一八八一～一九六七）がそれである。柴舟は津山市椿高下の出身で北郷姓を名乗っていたが、兵庫県竜野の尾上家に養子に入った。東京府立第一中学校から第一高等学校、そして東京帝国大學へと秀才コースを歩んだが、早くから文学にあこがれ、一高時代に落合直文の指導をうけ、東大在学中に新年お歌会の選にはいった。“大君のとせをよばぶ田鶴がねに、松の風は静まりにけり”がそれである。大学卒業後、お茶の水女子高等師範学校の教授になり、また学習院でも教鞭を執ったが、かれは若くして詩人として一家をなし、「車前草社」を組織したが、その社中には若山牧水、前田夕暮・三木露風・正富旺洋・有本芳水ら、次代の文壇を背負うすぐれた詩人がひしめいていた。牧水は柴舟の歌風を批判して「先生はお茶の水の良家の子女どもや、学習院の連中など相手にしているから歌が微温的なんです」といったそうであるが、たしかにかれは清新な氣鋭の歌人とはいえないし、また社会の矛盾に目をむけたものでもない。しかし柴舟のわが國歌壇に残した功績は、黒崎秀明も指摘しているように、その豊かな抱擁力で多くの人材を育て、個性を伸ばさせたことであろう。昭和三十一年八十歳でなくなつたが、かれの歌碑が生れ故郷津山市の鶴山公園の片隅、桜のもとに建てられてゐる。

小説では、近松秋江（一八七六～一九四四）正宗白鳥（一八七九～一九六二）内田百閒（一八八九～一九七一）片岡鉄兵（一八九四～一九四四）らが大正の文壇に登場した。白鳥は明治十二年和氣郡伊里村穂浪（現、備前中穂浪）に生まれ、近くの閑谷譽に入學し

た。研究生や門下生はかれのことを「親方」と呼んでいたそうであるが、これはかれの門下生おもいの人柄をよくあらわしている。湯川秀樹は「先生は偉大な指導者としてわが国の理論物理学の隆盛をもたらし、また戦後のわが国の科学の再建のために一身を犠牲にして努力された」とその功績をたたえているが、湯川・朝永の両氏がノーベル賞を獲得できた學問的基礎をつくったのもかれである。戦後文化勳章を授けられた学士院会員にえらばれたが、昭和二十六年業なかばにして死去した。

近藤・仁科より少し遅れて現われたのが経済史学の泰斗黒正巖（一八九五～一九四九）である。かれは上道郡可知村（現、岡山市）の中山家にうまれ、第一岡山中学校から第六高等学校を経て京都帝国大学経済学科に進んだが、その間、黒正家の養子となつた。経済史を専攻し、卒業後歐米に遊学、帰国して京都帝国大学の教授となった。著書に『経済史論考』『封建社会の統制と闘争』『百姓一揆史談』その他があるが、かれの百姓一揆研究の業績は戦後の社会経済史学の發展に大きな影響を与えた。學問的業績もさることながら、岡山県の教育の發展に果たした役割も見落すことができない。

昭和十年大阪経済大学の学長になつたが、ついで第六高等学校長を兼ね、校舎の再建その他の苦難を克服し、また戦後の新制大学の発足にあたつては岡山大学の誘致・設立に奔走し、優秀な教授陣をそろえたが大学の発足した昭和二十四年病のため五十五歳の生涯をおえた。

ここで目を文学界に轉ずると、詩歌・小説に名作を残し人物が大正期の文壇に登場する。詩歌では尾上柴舟（一八七六～一九五七）

た。そのころから徳富蘇峰が主宰した雑誌『国民の友』などを愛読し文学への情熱をそそられたが、同二十九年東京専門学校に進み、坪内逍遙のシェークスピアの講義に感奮し、その影響をうけて歌舞伎に熱中したことがあつたという。同三十六年読売新聞社にはり、文学・演劇・教育についての評論を担当しながら、創作にも情熱をそそいだ。入社の翌年かれは廻女作「寂寞」を雑誌『新小説』に発表し作家としての地歩を築いたが、数年にして新聞記者生活をやめ作家ひと筋の道に入った。ころは浪漫主義文學から自然主義文學への転換期で、かれは岩野泡鳴・田山花袋・島崎藤村・徳田秋声らとともに、自然主義を代表する作家として活躍した。かれの作品は黒崎秀明の指摘するように、「人生の平凡、倦怠、無為、虚無、幻滅が一見無難作な筆致で描かれている」が、キリスト教の信者であったかれは、私生活を律するには厳しく、八十三歳で他界するまで、小説に戯曲に評論に隨筆に幅ひろい活躍をし、実に二千五百篇の作品を残した。世間づき合いを好まず、ひたすら作家の目を通じて人生を深く見つめつけた。

かれらの文壇での花々しい活躍に対し、画壇とくに洋画界への進出もまためざましいものがあった。幕末のころ都宇都水江村（現、倉敷市）に、京都四条派の絵をよくする岡本豊彦（一七七八～一八四五）があらわれ多くの門弟を育てたこと、また狩野永朝（一八三一～一九〇〇）が弘化年間（一八四四～一八四七）岡山藩の筆頭家老伊木三猿斎（忠澄）にまねかれて虫明に留まり虫明焼の絵付けをしたり、西大寺や岡山で画塾をひらいて門弟を教育したことなどの事情もあって、明治のころにはすぐれた日本画家が現われた。古市

金嶼（一八〇五～一八八〇）はその代表的人物である。かれは児島郡尾原村（現、倉敷市児島尾原）のひとで紺屋の家にうまれたが、十七、八歳のころ京都に出て岡本豊彦の門を叩き、その内弟子として技を磨き、天保（一八三〇～一八四三）のころ尾原に帰り、画房をかまえて創作に情熱を注いだ。吉備津神社の本殿内陣の屏風「松鷹図」はかれの比較的初期の作品であるが、そのほか尾原慈眼堂の「龍虎の図」、倉敷市由加山蓮台寺の「蘭亭曲水」その他多くの作品を残し、明治十三年七十六歳で死んだ。倉敷村（現、倉敷市白楽町）の衣笠豪谷（一八五〇～一八九七）もこの時代のひとで、豪谷その他景勝の地を訪ね、風韻ゆたかな作品を残した。

幕末ごろから培われた日本画の伝統はその後も絶えることはなかったが、やはり時代の動きで明治・大正期になると洋画を志すものが多くなった。早くから洋学の洗礼を受けた松岡寿（一八六二～一九四四）、原田直次郎（一八六三～一八九九）は岡山県洋画界の草分けであった。

松岡寿は伊木長門の家来松岡隣の次男として、岡山市国富で生まれた。十歳のとき岡山藩学校の英人教師オスボンに英語をまなび、その翌年には東京に移り川上冬涯の門にはいり洋画家を志したが、明治九年工部大学附属の美術学校に移り、ここで日本洋画の育ての親ともいべきイタリア人教師フォンタネージの指導をうけた。同十三年イタリアに留学八年間の研究のち帰朝し、陸軍砲工学校の教官となり、図画、イタリア語を教授するかたわら洋画の振興につとめた。そのころ国家主義が台頭し洋画は画壇の片隅に追いやりられていたが、同二十二年かれは浅井忠・小山正太郎らと共に

に全国の洋画家に呼びかけ、明治美術会を創設した。また同二十七年明治美術学校が設立されると、かれは同校の教授となり、また東京高等工芸学校の設立に力を尽しその校長になった。このように洋画教育の振興に尽すかたわら、「コンスタンチン凱旋門」その他多くの名作をのこした。

原田直次郎（一八六三～一八九九）も松岡と同時代のひとで、備中鴨方藩士原田一道の子である。一道は文久三年（一八六三）遣欧使節としてヨーロッパに渡った鴨方藩主池田長発に隨行し、かさねを残し、明治十三年七十六歳で死んだ。倉敷市白楽町（現、倉敷市児島尾原）の衣笠豪谷（一八五〇～一八九七）もこの時代のひとで、豪谷その他の景勝の地を訪ね、風韻ゆたかな作品を残した。

幕末ごろから培われた日本画の伝統はその後も絶えることはなかったが、やはり時代の動きで明治・大正期になると洋画を志すものが多くなった。早くから洋学の洗礼を受けた松岡寿（一八六二～一九四四）、原田直次郎（一八六三～一八九九）は岡山県洋画界の草分けであった。

松岡寿は伊木長門の家来松岡隣の次男として、岡山市国富で生まれた。十歳のとき岡山藩学校の英人教師オスボンに英語をまなび、その翌年には東京に移り川上冬涯の門にはいり洋画家を志したが、明治九年工部大学附属の美術学校に移り、ここで日本洋画の育ての親ともいべきイタリア人教師フォンタネージの指導をうけた。同十三年イタリアに留学八年間の研究のち帰朝し、陸軍砲工学校の教官となり、図画、イタリア語を教授するかたわら洋画の振興につとめた。そのころ国家主義が台頭し洋画は画壇の片隅に追いやりられていたが、同二十二年かれは浅井忠・小山正太郎らと共に

に全国の洋画家に呼びかけ、明治美術会を創設した。また同二十七年明治美術学校が設立されると、かれは同校の教授となり、また東京高等工芸学校の設立に力を尽しその校長になった。このように洋画教育の振興に尽すかたわら、「コンスタンチン凱旋門」その他多くの名作をのこした。

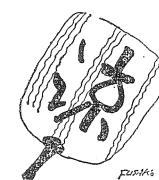
原田直次郎（一八六三～一八九九）も松岡と同時代のひとで、備中鴨方藩士原田一道の子である。一道は文久三年（一八六三）遣欧使節としてヨーロッパに渡った鴨方藩主池田長発に隨行し、かさねを残して明治四年山田顯義に従って渡欧した新知織である。その影響をうけてか直次郎も、八歳で大阪開成所、十一歳のとき東京外国语学校に入学してフランス語を学んだ。父一道はかれが外交官になることを期待したのかもしれないが、かれはこのころから洋画に興味を抱き、高橋由一について学んだが、明治十七年二十二歳で洋画研修のためドイツに留学した。そのころちょうどドイツにいた森鷗外と親交があった。鷗外の初期の小説「うたがたたの記」の主人公は、当時ドイツの女性と恋愛していた直次郎だといわれている。その後フランスに移り同二十二年帰朝し、鍾美館という画塾をひらいが、男爵・陸軍少將の息子で金錢に活潑としていたかれは、月謝もとらずひたすら門弟を育てたが、そのひとりが洋画界の鬼才和田英作である。また多くの力作を描いが、今日に残る作品は護国寺の「騎龍観音」と東京藝術大学の「靴屋のおやじ」など数点にすぎない。

それから少しおくれて鹿子木圭郎（一八七四～一九四一）満谷國四郎（一八七〇～一九三六）があらわれ、ついで児島虎次郎が登場する。虎次郎は川上郡成羽町のうまで、二十二歳のとき大原孫三郎の名画は、のちに大原美術館に収蔵され、多くの美術愛好家の足をひきつけている。大正十五年明治神宮の壁画の制作に没頭したが、中途にして精魂つきはて病氣にかかるて昭和四年に他界した。

ひらいた、こうして若き日の夢を表現した陶陽は、昭和四十二年なお惜まれながらこの世を去了。行年七十一歳。  
維新以後政治的には立ち遅れをとった岡山県も、文化的にはいちばん歐米先進文化を取り入れ、教育水準をたかめながら多くの人材を中央に送り、また地方文化の担い手とし、日本近代文化の発展に幅のひろい貢献をしてきたといえる。今日活躍しているひとも多いし、また書きもらしたひとで忘れないひとも少なくないが、紙幅の都合で割愛させていただいた。

なお小論の執筆にあたっては、黒崎秀明『岡山の人物』、秋山和夫『岡山の教育』、長光徳和『紀日正聖人伝』、巖津政右衛門『黎明期における四人の洋画家』（日本文教『おかやま風土記・続所収』）、駒田秀太郎・巖津政右衛門『岡山の絵画』、岡山市教育委員会編『岡山市史』（宗教・教育編）等を参考にした。あつくお礼を申しあげたい。

（岡山市立岡山商業高校教諭）



陶陽は明治二十九年備前焼陶工の名門金重家に生まれたが、素朴な土の匂を特徴とする備前焼の評価は決してたかいものではなかつた。しかし芸術家肌の陶陽はなんとか古備前の風格を再現しようとした。土を吟味し窯の構造に工夫をこらし、三十五歳のころには桃風の色調・気品を加えることに成功した。その作品は茶道界や陶芸界の評判になり、備前焼・金重陶陽の名声はにわかにたかまつた。その業績は高く評価せられ、昭和二十七年には国の無形文化財の指定をうけたが、さらに備前焼の真価を海外に宣伝するため、ハワイ、アメリカ、オーストラリア・ニュージーランドを巡回して陶器展を

人物を中心とした

## 文化郷土史

県 島 広 — 佐 藤 良 男 —



## 一 明治期の日本画家

初期は江戸期からある四条派、田山派、南画がもてはやされ、床の間芸術が主軸となした。

安芸藩の絵師で狩野派の山野峻峰斎の弟子小林月峰（一八三三～一八八八）、笠間桃園（一八一二～一八九一）、橋本峻峰（一八二九～一八九二）がいる。四条派では熊谷直彦（一八二八～一九一三）、田中驚郡（一八七一～一八七九）があり、南画では村上菊田（一八一一～一八八一）がいた。このうち熊谷直彦は広島藩士として幕末の動乱期大いに国事に奔走したが、廢藩の後かねてから修業していた画道に活躍した。明治十年代に始まつた内外の博覧会に出品、賞状を受け、明治三十七年帝室技芸員となり、活躍の舞台は東京であった。山県二承は俳諧をもよくし、もと足輕

として藩に仕えた。二承の号は耳が遠かったため、人から物を聞くたびにもう一度承ることを頼むゆえに自分から二承といつたという。はじめ絵を山田雪塘に学び、後岸駒に教えを受けた。殊に俳画に巧みで、好んで庶民生活を題材とした。性行も常人と異なったところがあり、筆硯を友として名所旧跡をたずね、いたるところに俳句と画を残している。

また、紀伊国名草郡の人で京に上り、苦學精励の傍ら絵画を修め國事に奔走、明治初年竹原、同四年広島に来て南画をかき、同十四年第二回内国勧業博に出品し褒状を受け名声をあげた者に名草逸峰がいた。

一方備後では藤井松林（一八二四～一八九四）や吉田東里、倉田雪舫、杉野怡雲、高田杏鳴らが輩出して彩管をもよおった。藤井松林は藩士の長子として福山に生まれ、幼にして画を同藩の土高田杏鳴、吉田東里に学び、後に上り中島来章に従いて田山派を学び、同門川端玉章、幸野棟嶺を凌駕するまでになったと記録されている。数年にして帰郷し藩主に仕え絵師となり、長州征伐には軍用図を描くため出征している。明治十年上京、第一回勧業博に出品、また宮中に「藤花・雀・鶴図」を献上したり。御前揮毫などして中央でも認められたが、同二十七年七十歳で没した。

ところで、江戸時代からの画家が多く没して、明治以後に成長した人々の時代となつた明治二、三十年代以後も、日本画の風潮はあ

## 三 明治初期の洋画

洋画を彼の地に渡って自ら研鑽した先駆者に小林花吉（号千古（南画）、和田華岳、藤井松山（一八八〇～一九六七 四条派）らで、画含もしだいに頻繁になつたが、その出品の様式など從来とあまり変わることころはなく、弟子たちに守られながら大きな流れとなつていた。

一方備後では藤井松林（一八二四～一八九四）や吉田東里、倉田雪舫、杉野怡雲、高田杏鳴らが輩出して彩管をもよおった。藤井松林は藩士の長子として福山に生まれ、幼にして画を同藩の土高田杏鳴、吉田東里に学び、後に上り中島来章に従いて田山派を学び、同門川端玉章、幸野棟嶺を凌駕するまでになったと記録されている。数年にして帰郷し藩主に仕え絵師となり、長州征伐には軍用図を描くため出征している。明治十年上京、第一回勧業博に出品、また宮中に「藤花・雀・鶴図」を献上したり。御前揮毫などして中央でも認められたが、同二十七年七十歳で没した。

ところで、江戸時代からの画家が多く没して、明治以後に成長した人々の時代となつた明治二、三十年代以後も、日本画の風潮はあ

## 四 展覧会と美術教育の始まり

洋画が広島に紹介されたのは明治四十年代に入つてからのこと

広島県は美術的に育成さるべき土壤が無かつた訳ではあるまいが、戦前の広島市は大陸進出の重要な軍都、呉市は海軍々港として、不幸な時代の花形となり、世界初の原爆の洗礼を受けて、多くの貴重な作品をなくした。

美術・工芸に絞つて紹介するのであるが、調査不十分のまま筆をおこす事を不安に思う。

で、明治四十一年四月広島県立師範学校の教諭として昭和三年まで勤めた米山利助（号竹亭　一八八五～一九六九　山梨県出身　東京高等師範学校卒）がその先駆的役割を果たした。

広島の画界が活気を帯びてきたのは、大正四年広島県物産陳列館、後の産業奨励館が元安川河畔にモダンな姿を現し、翌年からそこを会場として広島県美術展が開かれたころである。

明治末から大正にかけての指導的な日本画家は広島高等師範学校の教授として来任した原實之助（号白山）で、彼は東京美術学校創立まもない明治二十七年卒業の日本画科出身であった。また広島県立高等女学校の築瀬由太郎（号鶴洋　一八八五～一九六九　奈良出身　東京美術学校西洋画師範科卒）、広島高等師範学校付属中学校の石谷辰次郎（号柏園　一八八五～一九四一　和歌山出身　東京高等師範学校卒）なども広島土着の画人とともに活動した。

また大正末広島に来住した田中頼璋（一八六八～一九四〇）はこの地の画壇の大御所として重きをなした。田中頼璋は島根県生まれ。十六歳のとき山口県萩で森寛斎に学び、旅絵師となつた。後上京し川端玉章の門に入り写生風の山水画が得意で日本美術協会や文展に出品して入賞、官展作家として活躍したが御前揮毫の榮に浴した。大正十三年第五回帝展委員になり、日本美術協会日本画部評議員、美術会の審査員を勤めた。昭和十五年七十二歳で没した。



南 薫造（一八八三～一九五〇）は賀茂郡内海町（現在豊田郡安浦町）に医師の長男として生まれ、県立第一中学（現国泰寺高校）を卒業後上京、明治四十年東京美術学校西洋画科を卒業。この年イギリスに留学。ボロー・ジョンソンにつきヨーロッパを巡遊して同四年帰國、滞欧記念展として油絵七点、水彩画四十七点を発表した。明治四十三年第四回文展に

「座せる女」を出品し三等賞になり、同四十四年第五回文展の「瓦焼」が二等賞を受けた。大正元年第六回文展の「六月の日」が二等賞で文部省賞い上げとなり、第七回文展出品の「春さき」と第九回同展出品の「葡萄棚」が二等賞を受賞、同五年から同十四年まで文・帝展の審査員を勤めた。大正七年に光風会々員、昭和四年東京工業大学講師、同七年東京美術学校の教授になり同十八年まで勤めた。昭和四年帝国美術院の会員に推され同十九年帝室技芸員を任命した。

作品は印象派的画風で、代表作として「果園の隅」「五境」「樂器を持つ二人の男」「冬」「夏」「広島大本營（明治神宮絵画館）」「鶴渡る」「練習曲」「懸際」「甘藍煙」「ざくろ」「鯨遊」などがある。昭和十九年郷里に疎開し、戦後広島画壇の指導にも力を入れたが、同二十五年脳溢血のため六十七歳で没した。

小林徳三郎（一八八四～一九四九）は福山に生まれ、幼時上京、明治四十二年東京美術学校西洋画科卒業。大正元年一時大阪帝国新聞社に入社したが、すぐ辞し上京、洋画史上で一つのエポックをなす運動のフォーラン会の創立に参加、同二年島村抱月、松井須磨子によつて創立された劇団「芸術座」の舞台装飾主任を同六年まで続けた。大正八年院展洋画部に「鱒」出品、同十二年以後は春陽会に出品。昭和元年春陽会会員となつた。代表作として「金魚を見る子供」「江の浦残照」「海」「郊外落日」などがある。

戦災のため主要作を失い昭和二十四年心臓マヒのため六十五歳で急逝。日本フォーランの草分けの一人であった。

田中万吉（一八九五～一九四五）は香川県丸龜に生まれたが、明治四十五年来広、大正二年修道中學卒業後、修業のため上京、日本水彩画研究所に入る。二科展出品、大正十三年度渡仏、水彩の三宅克己、油絵の林堡衛・青山義雄・砂伊之助・鬼頭鑑一郎・酒井精一らと交友。アカデミーフォラム・シヨン洋画研究所に二年、後一年は南仏マルセイユ付近サンシャン村でプロヴァンスの老大家ルネサイソード氏

に師事、風景画の研究を深めた。昭和一年帰朝、印象派風の作品を春陽会に出品していたが、脱会し帰広、在広画家のリーダーとして広島洋画協会を組織、指導した。昭和十七年中央画壇復帰を志すも、同二十年十月脳溢血のため五十歳で急逝。

國盛義篇（一八九七～一九五一）は山県郡の生まれ、大正十二年京都市立絵画専門学校卒業。在学中関西美術院でデッサンを学ぶ。

大正十三年春陽会に「橋」初入选、同十四年と翌年と続いて春陽会賞受賞、会員に推挙された。昭和二十二年京都市立美術専門学校助教授、二十四年教授。学制改革により京都市立美術大学助教授となり没するまで後進の指導に当たった。昭和二十六年五十四歳で没した。

作風は終始写実に立脚、初期には卒直素朴、深い色調ながら温くふくよかであり、後期に至り漸次温雅な淡い美しさをたたえ静かで重厚な画面を作つた。

山路 商（一九〇三～一九四四）は新潟県長岡市に鉄道員の長男として生まれる。満鉄勤務の父に従い渡滿したが、大正九年十七歳で広島に来住。そのころから作画、野村守夫、檜山武夫らと広土社展開催、二科展、全国西展に出品。昭和五年写実派展をおこすも、翌年思想問題で内部分裂し自然解消、同十三年広島フォルム美術協会を創立（会員 山路商、坂本寿、灰谷正夫、岩岡貞美、木村武夫、実本仙、龜田伏見、紺野耕一）、第三回展から靈光も参加、同十四

## 五 大正—昭和前期（終戦まで）

### 洋画家たち

南 薫造（一八八三～一九五〇）は賀茂郡内海町（現在豊田郡安

浦町）に医師の長男として生まれ、県立第一中学（現国泰寺高校）を卒業後上京、明治四十年東京美術学校西洋画科を卒業。この年イギリスに留学。ボロー・ジョンソンにつきヨーロッパを巡遊して同四年帰國、滞欧記念展として油絵七点、水彩画四十七点を発表した。明治四

年中央で超現実主義的団体「美術文化協会」創立に当たり、靈光から入会の勧誘があつて出品したが、官憲の取り締りをびく展示されなかつた。

昭和十六年特別高等警察により検挙、身柄を拘留され、結核におかされた。昭和十九年六月喉頭結核のため四十歳で没した。

靈光（一九〇七～一九四六）は山県郡千代田町生まれ、本名石村日郎。大正十三年広島から大阪に出て天彩画塾に学ぶ。このころから靈川光郎と名乗る。

それを略して靈光と呼んだ。上京後太平洋画研究所に学び、

井上長三郎、麻生三郎らと知友となる。

二科展、独立展、美術文化展などに出



金島桂華（一八九二～一九七四）は深安郡神辺町生まれ、本名政太。幼きとき郷里を離れ兵庫尼崎に移住。大阪の平井直水に師

品、しばしば受賞。昭和十八年麻生三郎、鶴岡正男、松本峻介らと新人画会を結成するなど前衛的な創作活動を推し進めたが、同十九年応召、上海兵站病院で終戦の翌年、アミー・バー赤痢により三十九歳で病死。

作風は初め多くの画風を試み、ゴッホ、ルオーフィンなど、後宋元画の写実をとり入れて次第にシニール・レアリズムに傾斜して

宋元画の写実をとり入れて次第にシニール・レアリズムに傾斜して

宋元画の写実をとり入れて次第にシニール・レアリズムに傾斜して

ゆき冷厳な造形を追求、特異なスタイルを作りあげた。代表作に「日のある風景」「鳥」「馬」「シシ」などがある。

池田快造（一九一一～一九四四）は三原市に生まれ、昭和三年府

中学校卒業後大阪赤松絵画研究所に入り、さらに東京川端画学校に学ぶ。昭和六年東京美術学校油絵科入学、藤島武（教室に学び

在学中光風会展に「埴輪」を出品しF氏賞受賞、同十四年卒業。光

風会展に「昇天」を出品し光風賞受賞、光風会会友。第三回文展に「セロをならす」を出品。昭和十五年「運河」が光風特賞を受賞するなど若くして嘱望されていたが、病を得て同十九年三十三歳で没した。

#### 日本画家

— 88 —



児玉希望（一八九一～一九七一）は高田郡来原村（現在高宮町）生まれ、本名玉翁。二十歳のとき郷里で画家として出発したが、生活が立たないために二十歳のとき札幌へ移住、四年後二十六歳のとき上京、以後四十年近く東京北区の借家でその日暮暮らしの生活を送りながら画興のおもむくまま絵を描き続け、昭和三十一年不遇のうちに六十四歳の生涯をとじた。

作風は若いころ富岡鉄斎に傾倒し鉄斎ばりの絵を描いたほか、玉堂に私淑したり、梅原龍三郎、中川一政を学ぶなど自己の画境を求めて模索しつつ自由奔放な佳作を数多く残した。常に文人画家の正道を歩むことを念願し、清貧孤高の生涯を送り、死後に認められて

人物画では「十六夜」「刑軒」「木村重成夫妻」。

戦後は近代感覚に富んだ色彩画と心象画に在來の写実的基盤を生かした画法をとり入れ、「室内」（第八回日展）は日本芸術院賞を受け、近代的感覚と東洋の伝統的手法をかね備えた画の幅を持つ画家として注目された。

また、かつて川合玉堂門の大世帯を結集、藝展を開いて後進の指導に当たった。昭和三十四年日本芸術院会員、日展理事、同四十六年七十三歳で没した。



児玉希望（一八九一～一九七一）は高田郡来原村（現在高宮町）生まれ、本名玉翁。二十歳のとき郷里で画家として出発したが、生活が立たないために二十歳のとき札幌へ移住、四年後二十六歳のとき上京、以後四十年近く東京北区の借家でその日暮暮らしの生活を送りながら画興のおもむくまま絵を描き続け、昭和三十一年不遇のうちに六十四歳の生涯をとじた。

作風は若いころ富岡鉄斎に傾倒し鉄斎ばりの絵を描いたほか、玉堂に私淑したり、梅原龍三郎、中川一政を学ぶなど自己の画境を求めて模索しつつ自由奔放な佳作を数多く残した。常に文人画家の正道を歩むことを念願し、清貧孤高の生涯を送り、死後に認められて

#### H 芸作家

本県には見るべき工芸は少ないが、出身者で名をなした者が二人いる。

六角紫水（一八六七～一九五〇）は佐伯郡大柿町能美島大原に生まれ、幼名仲太郎、後注多良と改名。明治十六年広島師範学校初等師範科卒業後一時郷里の小学校訓導をしたが、同二十二年東京美術学校開校されるや即ち入学、同二十六年第一回生として卒業、同校助教授となり、岡倉天心とともに国内各地を回って古美術の研究

をした。後歐米を視察、明治三十七年米国ボストン美術博物館東洋部勤務、大正十三年母校教授。大正十五年朝鮮平壤樂浪古墳發掘調査に携わり、古来からの漆技及び塗料を研究、漆工界に貢献するところ大であった。

昭和五年帝展出品作「曉獅子吼手箱」に美術院賞を受け、同十六年帝国美術院会員、同二十五年八十三歳で没した。

清水南山（一八七五～一九四八）は三原市幸崎町に生まれ、本名龜藏。明治二十九年東京美術学校彫金科卒業、研究科に入つて加納夏雄、海野勝珉につき、さらに同三十二年塑造科に入学、藤田丈藏に師事した。明治四十二年から約六年香川県立工芸学校に勤めたが、大正四年病のため教職を退き、しばらく大和にあって古美術研究にふけつたが、法隆寺佐伯定圓に認められ、上京、大正天皇御即位記念に司法省より献納の大刀は、南山の作である。大正八年東京美術学校教授となり、昭和二十年まで勤めた。その間昭和九年帝室技芸員、翌十年日本勲金会々長、帝国美術院会員にあげられた。展覧会には昭和二年帝展第四科の設置以来逝去の年にいたるまで、審査員あるいは無鑑査として毎年かかさず出品、多くの秀作を残している。昭和二十三年七十三歳で没した。

## 六 戰 後

### 原爆画家

出来、以来同四十七年までに第十四部が完成した。

戦後画壇は色彩感覚による装飾的傾向がますます人気を得ると同時に、フランス近代絵画の影響として超現実主義絵画や抽象絵画が流行し、写実的な絵を描いていた作家まで、われもわれもとその方向に転向したのにたいして、前衛形式の集団に所属しつつ逆に写実主義の方向に新しい道を切り開くべく努力をはじめた最初の成果であった。

朝鮮戦争の始まつた昭和二十五年から同三十年にかけて、国内展を次々に開き、三百五十会場、九百万人の観覧者を集めた後、同三十一年から同三十八年までの八年間にヨーロッパ、中国、ソ連、モンゴル、朝鮮など二十か国を回った。さらに昭和四十五年にはアメリカ国内の八会場で展覧会を開いたが、必ず「原爆の図」が——ゴヤの「戦争の悲劇」、ピカソの「ゲルニカ」、ジエリコの「メジュー」号の物語などの一線上にある世界的な傑作である。——と絶賛された。その「原爆の図」は、昭和二十七年国際平和文化賞の金メダルを受けている。彼は伝統的な墨絵の世界に近代的感覚を盛り込み、壮大なスケールで展開しようとする数少ない作家である。

丸木 優（旧姓赤松、一九一二～）は北海道生まれ、女子美術専門学校西洋画部卒業、力づよい素描力にひいていた。昭和十六年当時画壇で戦争批判をしていた美術文化協会に加入、同年位里と結婚して、彼とともに作画をしたのである。昭和四十二年に埼玉県

東松山市に「原爆の図丸木美術館」を建て公開している。

また、「おばあさん画家」として一時有名になった丸木スマ（一八七五～一九五六）は位里の母親に当たる。明治八年安佐郡伴村（現広島市沼田町）に生まれ、丸木家に嫁し、農業家事に従い、終戦後はじめて位里、俊夫妻に絵の手ほどきを受け、昭和二十五年七十五歳のとき女流展入選、以後毎年出品、翌昭和二十六年院展に入選するなどしたが、同三十一年不慮の死にあった。作品は彼女の生活からにじみ出た純粋な感動によって童画のような素朴さと楽しさがあつた。

### 洋画家

岡部繁夫（一九一二～一九六九）は吳市の海運業を曾む家庭に、六人兄弟の三男として生まれる。十八歳のころ上京、兄弟で鉄工所を經營する傍ら油絵を独学。独立出品、昭和三十四年会員となつた。特に五十歳以後の活躍はめざましく、内外での個展開催のほか秀作展、国際展にしばしば選出されたり、優秀賞の受賞、政府買い上げ、日本芸術祭招待出品と代表使節団員としての渡米等々数々の栄誉に輝いた。

作品は、主としてモノクロームのパートの厚い抽象画で、殊にブルシャンブルーの作品に独自の画風を創立、その展開と発展を期待されていくとき、惜しくも昭和四十四年三月五十七歳で急逝。

太田 忠（一九〇八～一九七一）は広島市生まれ。國鉄機関士と



原爆の図（第5部＝少年少女・部分）  
昭和26年(1951年)丸木美術館蔵

広島における原爆投下は今世紀の大事件であり、この惨状をかいだ作家に丸木位里・俊夫妻がある。

して勧める僕ら画業に精進、中西利雄、小磯良平などに師事、昭和

十三年から新制作協会展に出品を続け、同十八年同会会友、戦後は三次市に居をかまえ、同二十三年から始まつた美術団体連合展に五回展まで出品、また昭和二十三年新制作展に新作家賞受賞、同二十六年同展十五周年賞受賞、翌年から会員となり、同二十八年から始まつた毎日新聞主催の日本国際展現代展にも出品する等活躍。

昭和三十八年主にフランスを中心で渡欧、さらに同四十三年にも渡欧したが、同四十六年急性心不全のため六十三歳で急逝。

作品は市街や工場風景を強い色調とフォルムで描き、天衣無縫な庶民感情を発想の基盤にしていた。

小林和作（一八八八—一九七四）は山口県吉敷郡秋穂町に生まれ、明治三十七年京都市立美術工芸学校に入学、同校卒業後日本画家川北霞峰の門に入り、霞村と号した。つづいて京都市立絵画専門学校に進学、在学中第四回文展に出品した「椿」が初入選となり、第七回文展では「志摩の波切村」が褒状を受けた。しかしその後は落選が続いたため洋画への転向を決意、庵子木壱郎の画塾へ通ったが、アカデミックな画風になじまず、大正十一年に上京。梅原龍三郎、中川一政、林武らの知遇を得て画技を磨いた。その後は春陽会展に出品し、大正十四年の第四回展と翌年の第五回展で春陽会賞を連続受賞。昭和二年には早くも会員に推された。つづいて昭和三年から同四年にかけて約一年間渡欧、イタリアとフランスに滞在し



昭和31年(1956年)51.4×99.8cm  
秋の山大伯著

た。同九年春陽会  
を辞して創立間もなく須田国太郎とともに会員として参加、同時に尾道市に移った。以後亡くなるまで尾道にあって作画活動を続ける一方、戦後ににおける本県美術界の指導的役割を果たすとともに文化振興にも意を注ぎ、物心両面から援助した。これら功績によって昭和二十六年山陽新聞賞、同二十七年

中国文化賞、同二十八年芸能選奨文部大臣賞を受賞。同四十九年十一月四日スケッチ遊行中三次市において八十六歳で逝去。

代表作に「ゆく春」「秋晴」「秋山」「佐田岬風景」「海」等があり、作風は戦後国際交流の活発化に伴って、具象、抽象と流れ動いたが、その流れに立ち入ることなく、自然とのふれ合いの中に作画の境地を求めて、東洋画の一様式である南画的な構成と、西洋画の技法を巧みに融合させている。わが国の柔らかい単調な色調を、色彩の顔料のうえにじっくり生かそうとする努力がみのって、かなりの厚塗りで筆触の盛りあげがそのまま効果を示して、整った調子にたかめられた一種の色彩効果をもっている。

#### 日本画家

奥田元宋（一九一二—）は双三郡吉舎に生まれ、本名嚴三。昭和六年上京、児玉希望に師事。昭和十一年文展に「三人の女」初入选、同十三年第二回文展に「盲女と花」で特選。戦後から風景画の世界に入り重厚味を加え、昭和三十七年第五回文展に「磐梯」で文部大臣賞受賞、同三十七年度の日本芸術院賞を受け、同四十八年日本芸術院会員となり、同三十八年日展評議員、同四十四年日展理事、同四十九年日展常務理事と活躍を続けていく。

#### 彫刻家

円鏡勝三（一九〇五—）は御調町に生まれる。昭和七年日本美

術学校卒業、沢田政広に師事。第十二回帝展に出品以後官展に出品を続け、同十四年第三回新文展から特選四回を重ねている。

戦後昭和二十六年日展審査員、同三十三年第一回新日展の審査員、同四十五年芸術院会員、日本彫塑会委員、多摩美大教授として活躍している。代表作に「しろうさき」「幻想」など。

#### 七 県立美術館の創立

明治百年記念事業の一環として広島市上幟町に建設され、昭和十四年九月開館。

収蔵品は本県ゆかりの作家の日本画、洋画、彫刻、工芸、書などを各分野にわたり、所蔵品の常設展示、年間約六回の企画展および貸し館による団体展が開催され、「美の殿堂」としてひらく県民はじめ多くの人びとに親しまれている。

#### 八 おわりに

以上、原則として本県出身者で我が国近代美術史に、あるいは広島の文化に大きな影響を与えた人物を選び、また本県の生まれではないが、広島県と深い関係があり美術的に影響の大きかった者も加えた。なお、研究と資料不足のため、かなり割愛した人もある。

また時代区分を一応はしたが、前と後の期間にも活躍があつたもののある事を了解してもらいたい。（広島県立美術館副館長）

## 人物を中心とした

## 文化郷土史

一山 口 県

## 琴 中 野 真



## はじめに

それぞれ捨身の行動によって、討幕という破壊作業を終えた青年群像は、維新が到来すると、それまで「志士」と呼ばれ、唱えていた離合解散体の内部から、自らを「知識を世界に求める」——建設作業体へ合流するよう迫られた。

「志士」の誇りを整理できない心情や環境に停滞したものは、尊王攘夷の「攘夷」を除ぞいた新政府の要路者を裏切者と見た。そこで、そうした志士群の外縁からのそりと新政府に登場した長州人大村益次郎を、まず明治二年九月に刺した。大村は十一月に亡くなつた。刺客の中に大村の隣の大樂源太郎の門下神代直人がいた。年が明けて三年になるとすぐ、脱隊兵騒動が、大村、大樂の生地周辺で起つた。

騒動の首魁の一人富永有隣はとらえられ、明治十七年に刑余の身となって出獄した。その有隣は国木田独歩の「富岡先生」のモデルとなつた。有隣はかつて吉田松陰に野山獄中で相知り、松下村塾の助教師もしたことがある。

騒動の背後の重要人物として、山口藩府から呼び出しを受けた大樂源太郎は、出頭の途次、脱走して九州へ渡つた。翌四年三月潛伏先で久留米藩士に暗殺された。尊王攘夷を唱えて迫つた源太郎は、一時、久留米藩論を掌中に入れてさえいた。

梅田雲浜、頼三樹三郎に兄事し、冷原為恭を暗殺したテロリスト

源太郎は、慶応二年から騒動の直前までは、故郷の地で「西山書屋」という私塾を開き多くの人材を教育していた。寺内正毅はその

門下の一人である。

下関の作家古川蘿は、その直木賞候補作品「走狗」（昭和四十四年）に、源太郎を描き、彼を夷狄を忌む漢字者の魂の持主としているが、山口市教育委員会勤務の郷土史家内田伸は、その著「大樂源太郎」（昭和四十六年）の付録として、源太郎の漢詩百三十七篇を蒐集し、彼に漢詩人の位置を与えるようとしている。

脱隊兵騒動のあと、征韓論の分裂、佐賀の乱、熊本の神風連、秋月の乱、そして明治九年十月に前原一誠の萩の乱が起つて、翌十年西南戦争がはじつた。これらは全て不平士族を中核とした人々が、攘夷の行方を新政府に問うたために献身破滅した行為であったが、山口県の騒動と乱の底流には、地下の吉田松陰にどう答えるかという思いがくすぶついていた。大樂源太郎も松陰没後における門中達の「一燈錢申合」に参加していた。萩の乱には松陰の近親者が数多く結びついている。

下關の詩人・作家富永博は「萩の乱と前原一誠」（昭和四十四年）に次のように書いている。

「前原一誠をたたくと吉田松陰の音がする。前原の悲劇は、世の中がどう変化していくても、吉田松陰の音色しか発しなかつたところにおこつた。」

昭和四十四年に萩の郷土史家松本二郎は「萩の亂真相」を書き、松陰や乃木希典の師でもあり、希典の実弟正詔の養父である玉木文之進が前原の背後にあつたことをいっている。正詔はこの乱で、兄弟典に参加を頼み、態度不鮮明な兄に誤別して、乱戦の中心に突入し悲壮な死をとげた。養父文之進も自殺した。

津和野生まれの森鶴外（父静男は防府市植松の大庄屋吉次家から森家へ入った人）が乃木の殉死に衝撃を受け一気に「興津彌五右エ門の遺書」を書き、更に「阿部一族」を書いたことは、そうした維新前後からの山口県人の寒心に対するアプローチだったのでなかろうか。夏目漱石にも「こころ」があり、芥川竜之介にも「將軍」があるが、鷗外の文が風土的な近親感を最も色濃くしている。芥川の父母のどちらかだったか、山口県人といわれているが、芥川の「將軍」の素材は山口県を主体として出版された「乃木式」という雑誌によつているようである。それらの意味で、芥川の乃木に対する態度にも何か近親的な心情があつたかもわからない。

明治維新をかちとつた風土に生まれたためにすぐれた芸術文化を

開花させ得る可能性が断たれた例が幾つあるかも知れない。県人の多くの才能が政治に傾注し、軍事や実業に没入している。

もし大樂や乃木が生まれた時間をずらしていたら、彼等はともにすぐれた詩人として大成したかも知れない。すでに二人は特異な教育者であった。日露戦争の中枢といわれる児玉源太郎にもその可能性が見られる。山口県の芸術文化が、明治以後不毛であったとするなら、そんなところに原因が求められるであろう。明治からの山口県人は、とにかく國づくりの渦中に身を投じることに生涯をかける風潮を主とし、文化の花園づくりは後事に托すという精神であったようだ。これから書かねばならない山口県の文化的人物像は、どうしたことか、苛烈な悲惨な、不要領な極端に地味な、しかし一途な魂の告白を吐露しつづける人々によって彩られている。今日までのところ田寂寞を充満させるような芸術文化人は極めて少ない。

今日もなお、一方に岸信介、佐藤栄作という政界の指導者をおき、他方に日本共産党議長野坂参三、書記長宮本顯治を配している。さらに志賀義雄、神山茂夫という人々を加えて考えるとき、それらの人材を培うこの風土を筆闇視することはできない。

若き日「敗北の文学」で小林秀雄と文芸評論賞を争い、後に作家宮本百合子と結婚した顯治……志賀義雄の生家は、すぐ隣に木戸孝充、筋向いに高杉晋作の生家がある。岸信介は「途上」の私小説作家嘉村義多と同じ時期に山口中学で学んでいる。

この風土の人間は、時流に密着し、叫びながらひた走るか、時流を横目で見て、ふつぶつとこと歩いて行くか、何にしても、一筋の道が、多くの県人の辿った生きようであった。

#### 歴史と評論

明治十一年末から各支藩の旧記編集事業が始まられた。私撰事業も起り、藤田徳、吉田嘉疏などが後に残る仕事をした。清石は独立で「山口県史略」「大内美録」などのすぐれた業績をあげたが、明治三十四年に「山口県風土誌」の編纂にかかり三十八年に至り三百五卷を成稿した。一方、私撰事業として明治二十三年以降、貴重な古書の複刻を企て「長周叢書」として刊行した村田峰次郎（昭和二十年八九歳没）が忘れられない。

これ等の成果は、元來、毛利家においては、元就以来の歴史に対する藩の姿勢があつて、その伝統に立ったものというべきである。たとえば、天保十二年に藩内会帳を草の根を分けるようにして蒐録された「防長風土注進案」（三九五冊）という、膨大な地誌が藩の事業として完成されていることは、その一つのあかしである。

このことはまた、山口県が實質的に鎌倉時代から大内氏、それにつながる毛利氏と、二氏に一貫として統治されていた事實と思われるせて考えねばならない。少なくとも江戸二百年間、この土地

にはお国善など一度もなかつたのである。

大正に入つて末松謙澄（大正十年六五歳没）の「防長回天史」、馬屋原二郎（大正四年七〇歳没）の「防長十五年史」が出され、末年には郡制廢止に伴つて郡治を記念する郡誌の編纂が多くなされた。このころから御園生翁甫（昭和四十二年九二歳没）の「防長地名淵鑑」「防長造紙史研究」、三坂圭治（明治三十八年生）の「周防國府の研究」などが刊行された。馬屋原も御園生もほとんどその老軀が終息する直前まで執筆しつづけている。その歴史に対する執念の熱っぽさは一体どこから来たものか。特に御園生の業績を埋めておくのは惜しみても余りがある。何れ全集刊行が企てられるだろう。

研究のグループとしては、昭和四年に防長史談会が設立され、五年から機関誌「防長史学」が刊行されたが、これは現在も「山口県地方史学会」としてなお継承されている。

この間、中央では西洋史の瀬川秀雄（明治二十九年東大卒、岩国出身）、日本史の渡辺世祐（明治三十三年東大卒、萩出身）、古文書学の伊木寿一（明治三十九年東大卒、三隅出身）があり、郷土にあつては、山口高等学校教授であった小川五郎（昭和四十四年六七歳没）の業績が著しかった。小川には没後「防長文化史雑考」（昭和四十五年）がある。彼の筆は考古学、民俗学にわたり、短歌にもおよんでいる。

現在活躍している史家には、日本史の三坂圭治、藤井貞文、奈良本辰也等があるが、奈良本の才能はマスコミに迎えられて華々しく、修史的なこの県の史家のなかで異彩を放つている。評論家には横山健堂（昭和十九年七二歳没）がある。明治から大正

初年にかけて「新人国記」「旧藩と新人物」などを書いた。黒頭巾のペンネームでその獨得のきびきびした文体が中央論壇を賑わわした。経済学者であるかたわら「千山方水樓主人」のペンネームで読売新聞に執筆して名声を博した河上肇（昭和二十一年六九歳没）は、大正五年の秋から大阪朝日新聞に「貧乏物語」を書いて数万回の読者を魅了した。

河上肇が山口高校の生徒であつた頃、山口中学の生徒として、山口市後河原の下宿に同宿していた中川仲之進は、その晩年、次の述懐をしている。

「明治二十九年の夏に河上先輩が私の家に避暑に来た。漢学者であつた私の父の部屋で、河上さんは、観潮樓主人という扁額の文字を見て、父に△△樓主人の使用法を質問した。父は一時間ばかり種々説明した。そののち父は私に、お前も河上さんのようなものを究める人間になれといった。私が東大に入った時は、河上さんは千万水樓主人のペンネームで人気のある文章を発表していた。

同宿の頃、或日河上さんは明治天皇の写真を街で求めて来て、そつまリ馬前へ寝た。河上さんは夜半ふと自覚めても、陛下の視線に自分の目がピタリと対う、天皇への敬愛の心がおのずから湧く、といつた。幾日か経つた或晚、河上さんは寝床の位置を変更して云つた。僕も隨分考えたが、やはり君と同じ方向で寝る方がよいと思いついた。」

昭和の戦争の末頃、「松下村塾の人々」で岡不可止が声名を得

た。草莽のこころをうたい、屈原の心情を唱えたが、戦後は不遇裡に亡くなつた。岡と対象的に戦後、左翼評論家として岩上順一（昭和三十三年五一歳没）が登場して一時名を得たが、業績半ばで倒れた。

他に日独戦争の従軍記者で名を馳せたジャーナリストとして活躍した後、劇作などの翻訳をし、戦後の晩年に古浄瑠璃の研究をした

若月紫蘭（明治三十六年東大卒、防府出身）がいた。山口高校で小川五郎の教えを受けた荒正人は東京で健在。郷土では村嘉穂多、中原中也に関する調査的評論で名を得た太田静一（山口女子短大教授）と詩人であり国文学者である佐藤泰生（緑光女学院大学長）がいる。評論の杉本春生も着実な仕事をしている。

昭和四十七年の文化功労者になった河上徹太郎（明治三十五年生）は、「小林秀雄とならび、わが国の近代批評の創始者といわれ、とくにフランス象徴詩の中心思想をわが國に紹介、東西の古典を通じ、西洋文明とその影響下にあるわが國の近代文明への批判を展開した」と受賞当日の新聞に書かれていたが、彼は山口県の文人としては異色の円寂型の人とすべきである。父が東大工学部卒の明治の実業家であり、その教養期間および半生をほとんど県外で過ごした人で、音楽評論から出発している。しかし彼が、その母の看病のために近年故郷岩国に退した期間に、彼の眼は吉田松陰に注目し、評価の高い評論を書きあげている。河上のことを、県人二世といふべきだろう。二世が父祖の地に住んでみて「山口県のアウトサイダー」を書いたとでもいべきか、それとも父祖達の血の匂ひをかぐ晩歌の中に、今日を綴じ明日を想つたのだろうか。いずれにしてもこれ

からの若い県人はだんだん河上型の人間像に目標を置くようになると考えられる。こうして維新も、明治も遠くなり、山口人が日本人の水準の中へ定着し、個人としての自己に主体を持つようになるのであらう。

### 絵画と音楽

明治初年の画家には朝倉靄陵（明治四年没）、羽様西壁（明治十一年没）があつたが、狩野芳崖（明治二十一年六一歳没）、森寛齋（明治二十七年八一歳没）の両人が出て、明治の新園壇に大きい影響を与えた。

芳崖は文政十一年、長府藩のお抱え絵師晴翠の子として生まれた。十九歳で上京、狩野画所に入ったが、ゆくなくも橋本雅邦と同日入門をした。十数年の研鑽を経て塾頭となつたが、藩主より許された修業年限が来て、老父と病婦のいる長府の家へ帰った。老父のすすめる嫁をもらつたが、間もなく父の許を得て単身上京。藩主よりの学資の給与はなく、窮屈し、信州人の後援者の紹介で佐久間象山の大砲等の製図などを画いたが帰郷。文久元治の頃から藩内で国事に尽しき、養蚕機業、山林開墾、桂月は秋に生まれ二十歳で上京。野口幽谷の門に入り、研鑽して新機軸を出し、「春溪図」で画壇に地位を獲得。芸術院会員となり、昭和三十三年文化勲章を受けられた。

柏陰は諱岡県人で防府の田中家に入った人である。田能村直入の門下で、南宗画の巨匠と仰がれた。他に山口出身の女流画家として兼重暗香（昭和二十一年七四歳没）があった。現役では宇部出身の西野新州がいる。

以上の画家の生涯の周辺には、常に、県出身の政治家が、何等かの形影を帯びてチラついていることが見過ぎない。これと対照的な存在に田布施町出身の小野良庭がいる。現代社会のひずみをえぐり出し荒廃した漁村風景を描きつづける現代日本画壇の特異な存在として注目を浴びている。

洋画家としては山口出身の永地秀太（昭和十七年六九歳没）、岩国出身の桑重儀一（昭和十九年八八歳没）があつた。現役では秋穂出身で尾道在住の小林和作、三隅町の香月泰勇につづいて、若手では中本達也、宮崎進、田中稔之、山本文彦等が中央で活躍しており、彫刻では宇部在住の河内山賢作、東京在住の長嶺武四郎、特異な存

### 月桂林松



度上京。しかし狩野派は當時顧みられず、生計のため陶器の絵などを描いた。明治十七年第二回共進会に出品した彼の作品は最劣等の三等賞に入った。しかしこの作品がフュノロサに認められ、岡倉天心と知り東京美術学校創立に加わったが、開校前三か月で不如意な生計の中に病没した。描きかけの「悲母観音」が絶筆であった。寛斎は芳崖にくらべて円寂型である。文化十一年萩に生まれ、京都に出て森鶴山に学び、のち養子となつた、江戸時代の円山派四条派の画風を明治時代に伝えた。代表作「松間瀑布」。だが寛斎も幕末には一時期、京都にあって国事に奔走したといわれている。

明治中期まで大庭学蓬（明治三十二年八〇歳没）が活躍したが、晩年は故郷に帰り、閑日月を楽しんだ。

高島北海（昭和六年八二歳没）は嘉永三年萩に生まれた。天性画を好んだが、地質地形の学に志し、明治初年但馬生野鉱山に至り仏人コニエーに従つて学んだ。その後官界に入り仏国に留学して林学、地質学を研究し、帰國後農商務省の山林技師となつたが、明治三十六年官を辞して画業に専念した。文展審査委員、日本美術協会委員として画壇にあらわれ、南北派を折衷組しやくとした山水画は、穎々たる風格をもつて、時流にぬきん出たものがあつた。彼は伊藤博文について、若手では韓国に渡っている。米国にも行き、中国には二

在では山口在住の田中米吉がいる。

### 音楽と宗教

明治以後、風土が音楽を敬遠する雰囲気を持っていたので、その方面の人物が極めて少ない。このことは明治からの日本の政治に、義太夫や浪曲のさわりを貴る風潮があつたことともあわせて考えられる。また日本軍國主義が陸軍を主流として、この風土に陸軍軍人が多數輩出して、音楽に向う若い芽を環境的にはぐくませなかつたのかも知れない。それかららぬか、岩国出身の田中穂積（明治三十七年四八歳没）の名をあげるのみである。田中が陸軍でなく海軍楽長であったことも象徴的である。彼の作曲では「美しき天然」が人口に膾炙され、「勇敢なる水兵」も国民的に親しまれた。しかしその田中にも郷土では永い間無視されていた。大正十四年になつてやつと岩国で追悼音樂演奏会が開かれ、昭和二十九年誕生地岩本市横山に記念碑が建立された。

だが県人に音楽への求心性がなかつたとはいえない。音楽研究家として、兼常清佐、森本覺丹が出てゐる。森本は「カレワラ」の訳者としてフィンランド國家の文化勲章を授賞されている。

現在の県音楽のレベルアップに尽した人としては宇部サイロン社長俵田寛夫の終戦前後からの絶えざる指導、後援があつたが大きい。戦前戦後にかけて、山口師範、山大教育学部に教鞭をとり、県内の小中学校の音楽担当教師の育成指導を通じて果たした故鶴岡義雄の功績が高く評価されている。また現山口芸術短大の石井洋之助の高校教師としての、永年にわたる音楽指導も見捨てがたい。吹奏樂舞では宇部の石井好美と山口の加藤耀子が県下を二つの流派に分けて健闘している。

明治の山口県の宗教家としては、維新発祥の地に起つた廢仏毀釈の運動の中で、かつて尊王攘夷に挺身した身が今度は護仏に傾注しなければならなくなつた仏教界に、僧行が現れた。大州鉄然（明治三十五年六八歳没）と島地黙雷（明治四十四年七四歳没）である。

他方、ザヴィエルの故地に新しくキリスト教に目覚めた人も現われた。長州征伐の時、小瀬川口に向つた長州軍に沢山馬之進（明治十六歳没）である。維新後の明治五年に官吏を志望して神戸に赴き米人の宣教師について学び、ついで渡米したが、日本におけるキリスト教伝導に生涯を捧げることを決意して、使徒ボーロの名を慕つて改名した。帰朝後大阪に浪華教会を創立し、新島襄等と共に明治初期の教界開拓者として仰がれ、梅花女学校を創設して、宗教と教育に尽粋したが、病と貧困の不運裡に病没した。

保羅の同郷に成瀬仁蔵（大正九年六一歳没）と服部草蔵がいた。

草蔵は維新後海軍兵学校の教授となつてゐたが、熱烈なキリスト教信者となり、明治十三年郷里に帰り、生涯を県内の布教伝導に捧げた。

後年日本女子大学を創設した成瀬仁蔵は保羅より七歳年少であつた。明治九年山口県教員養成所を卒業した校長であつたが、帰郷した沢山保羅に会い、たちまち入信し、大阪へ同行し保羅の援け人となつたことから、後年の、「寄宿舎生活に訓育の重点をおく女子教育」者としての出発をした。

サヴィエルを憧れて山口に来て、天主公教の伝導に従事したフランス人にピリオン神父があつた。彼はリヨンに生まれ二十三歳で祖国を出發。明治元年長崎に渡來。神戸、京都と布教して、二十三年に山口へ来た。晩年、奈良に転じ、昭和七年九十一歳で没した。著書に「鮮血遺書」「日本宣教五十年」がある。

越後の弥彦山の麓に生まれた本間俊平は、建築技術をもつて宮内省の役人になつてゐたが、明治三十五年、感じるところがあつて職を始めた。人生に絶望、挫折した多くの人を集めて、共に働きながら、彼等のため、時には命をかけた友となり、師となつた。秋芳の聖者と呼ばれている。

戦後、北村サヨによつて、熊毛郡田布施町に創始された新興宗教

「天照皇大神宮教」である。この教えは終戦虚脱の国民心理にマッチし、たちまち内外に多数の信者を獲得した。いわゆる「踊る神様」として、全国的に有名になり、ハワイその他海外に教勢を伸ば



### 文 学

山口県人ではないが、その学齢期を維新後の山口県の風土に送った国木田独歩（明治四十一年三七歳没）の生涯を見ると、吉田松陰や高杉晋作にどこか通じる、あわただしく、時にせつかちで、自己の一身をかえりみる余裕とてない、それでいて時代を先取りする進取の気性がうかがえる。独歩の本来の個性か、風土の環境がしからしめたものか。

独歩はその短い生涯に、新しい詩を興し、従軍によりルポルタージュのジャンルを開いた。更に自然主義文学の先駆的作品書き、それに思想的なエスプリを導入したリアリズム文学を創り出そうとした。すなわち明治文学の開拓者の一人として仰がれる所以である。

独歩没年のあとさきの頃から二人の文学者が現れた。明治二十二年生まれの吉田常夏（昭和六年四二歳没）と新南陽出身の青木健作である。

常夏は十四歳で河井醉人として活躍したが、明

治四十二年来、ジャーナ

リストに身を転じ、大正

十二年関東大震災後父の

郷里に帰り、翌十三年閑

門日日新聞の編集長に迎えられたが、昭和二年、脳出血に倒れ、生計に苦しむ状態となつた。この時友人知己が彼に「燭台」という雑誌編集の仕事を与え、この雑誌が彼の晩年の事業となつた。「燭台」は今日にいたるまで、山口県の地方誌で、これをしのぐものはないほどの豪放なもので、その読者は北九州におよび、火野葦平の初期の作品なども発表された。

青木健作は「帝國文學」によつて登場した作家で、生地の瀬戸内海の海滨の海や山を舞台に、かすりの織物を手織るように一作一作を書きつけた。自己経験、自己観照の範囲内の事象のみを終始黙々と書いて、夏目漱石から注目を受けた。その作品集は大正二年から発刊している。學校の教壇に立ちながら、文學執筆をつけ、昭和三年に春陽堂から発刊した「青木健作短篇集」に彼の主軸的な作品を収録した。その後昭和十九年に隨筆「椎の実」を刊行している。目立たない地味な作家である。國文學者井本麿は彼の長男で、エニ、商三の弟がある。静かな彼が士農工商の士をさけて、おそらく彼が作家として出発したころに、その長男に農一と命名していることは、彼が

シニには何かを持ついたことがうかがえる。

青木健作とともに山口中学を明治三十四年に卒業した生徒の中に防府市の大地主の子、種田正一がいた。二人の郷里は余



中原也

の小作を余りつくらなかつた。その風土の中流地主である嘉村家の家風の

中に、穢多の文学をもう一度見直してみなければならぬ。その点、穢多文学には、文学以外の別の問題の提起がある。生

身の体を実験台上にかけた姿勢、およそみやびとか洒落とかとは遠い余裕のない土着の人生である。

穢多より十年遅れて中原中也（昭和十二年三〇歳没）が山口に生まれている。中也もまた生存中は一部の人にのみ囁きされ、その平担でない人生行路に、時にすばらしい光線と良彩を発した詩人であった。死後に問題を多く残している。

風土と女流作家は結縁が強い。男ならお槍かついで仲間になつて……の伝統ではなかろうが、岩国出身の宇野千代（明治三十年生）、弘達千代、山口高女の同窓生の中本たか子（明治三十六年生）と田島準子。それに下関で明治三十六年から七年の十二月三十一日に生まれたといふ林美美子は「私は本当は五月に生れたのだそうですね」とか「私が生れたのはその下関の町である」などとその作品に書いている。吉屋信子の血にも風土の地があるという噂がある。宇部在住の上田芳江もいる。どの女流もあり構わない人生を書くのが風土の特徴なのだろうか。

鶴外と同じ津和野で生まれ山口中学を出た伊藤佐喜雄がいた。生



田山山頭火

の草を余りつくらなかつた。その風土の中流地主である嘉村家の家風の

中に、穢多の文学をもう一度見直してみなければならぬ。その点、穢多文学には、文学以外の別

後間もなく父の家を出て新劇女優として名を得た、実の母を慕うた追っかける青年を「海賊行」に描いて、第一回芥川賞候補になつた、日本浪漫派の作家である。

同じ山口線沿線の長門岬に近い地に戦争作家として現れ、児童文學者として業績を終えた氏原大作（昭和三十一年五二歳没）がいた。彼もまた生みの母に生別し、母を恋う人間の哀しさを胸奥に秘めた作家であった。風土の現役の作家群には前記の古川、寛永以外に井上孝、長谷川修、赤江潔、豊田行二と下関関係者が多い。歌人としては明治二十二年に兄赤松照幡の学校を援助するために徳山に来て、三か年間その女学校の教壇に立ち、地域の作歌熱をかきたく謝野鉄幹がいた。その他としては生田蝶介が有名であった。昭和に入つてからは、故岩松文彌が光り、現役に小島經彦、竹内八郎、橋本武子、友廣保一、前田喜代人、山中鉄三の郷土歌人がある。俳人には先に土居南園城、久保白船、兼崎地橙孫、有馬草々子、水田のぶほ、西尾真桃があり、現役として、西尾桃枝、山崎青鑑、大中青塔子など多数の人が積極的に活動している。

詩人としては、長門市出身の児玉花外（昭和十八年六九歳没）がいた。明治大学の校歌の作詩者として名が残っているが、彼が明治三十年代の社会主義詩人グループの中心人物であったことは忘れられ勝ちである。晩年は養老院で送り不遇であった。他に、昭和初期のモダニズム詩人の上田敏雄があり、郷土詩人としては「こだま」の和田健、「駒駒」の磯村秀雄が活動している。

最後になつたが明治から大正にかけて、日本の川柳の革新を行なうため活躍した萩出身の井上劍花坊（昭和九年六四歳没）の名をあげておきたい。

（山口県立豊浦養護學校長）

り遠くない。正一すなわち山頭火はその生涯を一部の知友にのみ愛され、謹られ、囁きされた、行乞漂泊の俳人であった。昭和十五年秋、四国松山で五十八年の生涯を閉じた。死後県内五か所に句碑が建立され、三十年も経った今日、彼の文が國立大學の入試問題に出題され、週間誌の漫画に彼の生涯が描かれ、春陽堂から「定本山頭火全集」七巻が刊行中である。脱社会ムードでテレビのコマーシャルまで彼を偲ばす雲水塾が登場しているありさまである。

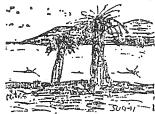
山頭火の生地から北の山のみを越えた山口市の興に、そこの中流域の子として生まれた嘉村穢多（昭和八年三十七歳没）がいた。無に帰するため、酒と水を愛した山頭火に対し、自己の魂への執着を怨念のように書きつづけて果てた穢多の業苦の人生は、不思議の一脈相傳のものを持っている。

「ゆきゆき倒れるまでの道の草」とつぶやき、「分け入つても分け入つても青い山」とうたつた山頭火が、マラソンのランナーであるなら、彼よりひとまわり山口中学の後輩であった穢多は、短距離ランナーだった。しかし彼は一筋の道を、下ばかり見て、こせこせと走った。大正以後の日本の心境小説、身辺小説、私小説といわれる系譜の中で、志賀直哉と葛西善蔵が從来両極視されていたが、最近では直哉と穢多が対比されはじめた。直哉と善蔵の人生態度は、やはり前方を向いて真直ぐに歩いている。他の宇野浩一、尾崎一雄、上林曉にしてもほとんど素直に歩いている。その中で穢多の歩き方だけは、ひねこびている。それが直哉と対比される主な要因だろうか。穢多のいんぎんさ、我執の強さの中には、風土の地主・百姓の血が流れている。山口県の明治初年の土地放出は、大地主や極貧

人物を中心とした

## 文化郷土史

——徳島県——



藤井喬

## 一 風土と県民性

十郎兵衛と阿波踊りと鳴門の渦潮とを以て聞こえる本県は、中央に四国山脈が東西に走り、中に四国山地を作り、その中に祖谷・木頭などの別天地を抱き、北には讃岐山脈があり、その間に大河吉野川が蜿蜒數十里を東流して海に注ぎ、流域に広大な平野を形成する。他に、四国山脈中から流れ出る勝浦、那賀、海部の諸川もあり、改修工事が今のように整備されない以前は、河川が氾濫し、流路の変更や田畠の荒廃により、沿岸住民は泣かされた。四国山脈の主峰剣山は、高さ二千米に近く、それ故南方海岸地帯は比較的に温暖であるが、吉野川流域は冬は寒冷で、積雪を見るのも稀ではない。それで徳島を中心、南方、北方に県が二分され、自然、この南北両地方は、人情と風習に差があり、南方は温和、北方は、氣性が激しいといわれる。

その昔、吉野川沿岸の板野、阿波、麻植の地に、天富命の率いる忌部族が来て、栗と麻とを植え、郡名にその名残りを止め、その頃、北方を粟の國、南方を長の國と称した。奈良、平安時代は国司の来任があり平稳、後豪族が所々に割拠して城を構え、南北朝時代には、平野部武士は北朝につき、山岳武士は南朝に尽し、軍功状を貰っている。細川、三好氏四国を制覇した時代を経て、土佐の長曾我部元親の侵攻があり、阿波武士は中富川の合戦に脆くも敗北を喫し、後豊臣秀吉の長曾我部征伐に戦功を立てた三河武士蜂須賀家政が播州龍野から阿波に転封、二代至鎮は闘ヶ原の戰功で、徳川氏に

より淡路六万石を加増され、二十五万石の大名となつた。初代家政

は入国すると、祖谷などの豪族を鎮撫し、渭の津（徳島）に新しく城を築き、城下町を作り、藩の制度を確立すると共に、吉野川流域

の沃野に藍を植えさせ、徳島や撫養の海浜に塩田を開かせ、十五代三百年に亘る藩体制の基礎を固めた。

このような本県の自然環境と歴史的な伝統により、培われた県民性は保守的傾向が強く、事大主義的であり、教理に長じ、打算的であるとの評もあり、史上に異彩を放つ人物はあまり出ていないが、學問、文学、藝術などの分野では、中央に進出して活躍した人物が多くあり、本県の歴史は又それなりに特色がある。

## 二 宗教、教育界の人々

キリスト教的立場から社会運動に尽した人に、著名な賀川豊彦（明治二一～昭和三五）がある。鳴門市大麻町の人。父の神戸在住時代に神戸市で生まれ、後徳島に帰り、ローガン牧師により洗礼を受け、明治学院、神戸神学校を出た。後米国に渡り、プリ斯顿神学校に学び、帰國後神戸市の新川の貧民窟に住み伝道に従事。労働運動、農民運動に挺身、その時の体験記「死線を越えて」はベストセラーとなつた。



賀川 豊彦

明治四四年（天保二二～大正九）は、那賀郡那賀川町の人、昭和二十七年金剛峰寺座主高覺寺門跡、大僧正となり、小松島市立江寺住職庄野琳真（明治二二～昭和四三）は那賀郡那賀川町の人、昭和二十七年金剛峰寺座主高野派管長となつた、天台宗の碩學上田照遍（文政一一～明治四〇）は徳島市の人。河内の延命寺の住職となり、大僧正に進んだ。学識が卓絶し、天台学の第一人者といわれ、著書百余部がある。

儒仏二道を折衷し、修正講社の別派管長となつた新田邦光（文政一二～明治三五）は、美馬郡脇町江原の人。漢学、国学、武芸を学び、經世に志があり、海防を論じ、藩主、朝廷に建議した。「教道大意」「軍備経略」などの著がある。

明治二十三年十月、時の文部大臣として教育勅語を發布した芳川顯正（天保二二～大正九）は、麻植郡山川町川田の人。医師を志したが、後大阪にて、大阪日報の記者となり、後広告取次業万年社を創立した。竹亭福良虎雄（明治三～昭和一六）は徳島市の人。徳島中学校を出て、明治二十六年上京、報知新聞に入り、後大阪毎日に転じて、二十余年勤め、内田通信部長から編集顧問となり、後大阪新聞の主幹となつた。北海道実業界の重鎮阿部興人の養子阿部宇之八（文久元～大一三）は徳島市の人。明治五年大阪新報に入り、大阪毎朝などを経て渡道、明治二十年札幌の北海道新聞を主宰し、「二十一年社長となり、他紙を併合して北海タイムス」とし、理事となつた山根文雄（明治一五～昭和一二）は麻植郡川島町学の人。明治四十三年神戸新聞に入り、その後京都新聞主幹、昭和八年京都日々新聞社長となつた。大正十三年、我が国放送事業開始の際、大阪放送局常務理事となり、十五年日本放送協会理事となつた。福井市出身で、徳島毎日新聞の主筆となり、多年本県の言論、文化に尽した人に井上一（明治四～昭和一二）がある。上京して大洲学会に学び、徳島毎日新聞に迎えられ、後主筆、編集局長となつた。戦時中新聞の統合により退社。羽城と号し、漢詩、和歌をよくし、「宜南峰」

し、長崎に行き、伊藤博文に英語を教えた縁で引き立てられ、後年伯爵に昇り、枢密院副議長となつた。教育界には岡本斯文（天保一四～大正八）があり、徳島市の人。那波鶴峰に学び、上京して安井息軒、林鶴梁に教えを受け、帰國して徳島師範学校などの校長を勤め、功により藍綬褒章を受けた。又儒学に長じ、南海の儒宗と崇められた。女婿岡本対南（明治三～昭和三〇）も大阪の藤沢南岳に学び、長年徳島中学校に教え、文部大臣の表彰を受けた。退官後は逍遙会を作り、詩文の指導に尽した。

東大史学科を出て、大阪府立図書館長となつた今井貢一（明治三～昭和一五）は那賀郡羽の浦町の出身。県立光慶図書館長として、長年本県の社会教育に尽した坂本章三（明治九～昭和二二）は徳島市の人。館長就任以来図書館の經營に専念し、光説会、精説会を作つて読書法を指導し、蜂須賀家の阿波国文庫を光慶図書館に移し、整理して活用を計り、ポルトガルの文豪モラエスの遺品、遺著を集めモラエス文庫を館内に作つた。又童話会吟詠会、阿波郷土会を作り、郷土文化の振興にも貢献する所大であった。盲啞教育の父五宝翁太郎（文久三～昭和一六）は徳島市の人。徳島師範学校を出て、盲啞教育に志し、明治三十四年独力で徳島盲啞学校を起こし、後にそれを師範学校の附属小学校の学級に組み入れ、一訓導となり教えた。後これを母体として、県立盲啞学校が設立された際、選ばれて初代校長となつた。傍ら盲啞保護院、徳島盲人会、徳島鐵灸会を起こし、盲啞教育と事業に、その一生を捧げた。

## 三 言論、報道界の人々

明治初年、自由民権思想を鼓吹した土佐の立志社に刺激され、本県でも、自助社、後に普通社ができる、これから出た新聞人に伊坂柳（弘化四～明治一四）益田永武（嘉永三～明治三六）吉田喜六（万延元～明治二四）らがある。高木貞衛（安政六～昭和一五）は徳島市の人。藩士真蔵の長子。明治初年、徳島の自助社社員となり活躍したが、後大阪にて、大阪日報の記者となり、後広告取次業万年社を創立した。竹亭福良虎雄（明治三～昭和一六）は徳島市の人。徳島中学校を出て、明治二十六年上京、報知新聞に入り、後大阪毎日に転じて、二十余年勤め、内田通信部長から編集顧問となり、後大阪新聞の主幹となつた。北海道実業界の重鎮阿部興人の養子阿部宇之八（文久元～大一三）は徳島市の人。明治五年大阪新報に入り、大阪毎朝などを経て渡道、明治二十年札幌の北海道新聞を主宰し、「二十一年社長となり、他紙を併合して北海タイムス」とし、理事となつた山根文雄（明治一五～昭和一二）は麻植郡川島町学の人。明治四十三年神戸新聞に入り、その後京都新聞主幹、昭和八年京都日々新聞社長となつた。大正十三年、我が国放送事業開始の際、大阪放送局常務理事となり、十五年日本放送協会理事となつた。福井市出身で、徳島毎日新聞の主筆となり、多年本県の言論、文化に尽した人に井上一（明治四～昭和一二）がある。上京して大洲学会に学び、徳島毎日新聞に迎えられ、後主筆、編集局長となつた。戦時中新聞の統合により退社。羽城と号し、漢詩、和歌をよくし、「宜南峰」

などの著がある。前川静夫（明治三〇～昭和四四）は広島県出身。東京外語を中退し、初め国民新聞に入り、神戸新聞等を経て読売新聞に転じ、昭和十九年統合後の徳島新聞の主筆、編集局長を経て、昭和二十一年社長となり、今日の徳島新聞に発展させた。

#### 四 学術界の人々

井上十吉（文久二～昭和四）は徳島市の人。自助社の発起者高格の一男。明治六年十二歳で、主家蜂須賀氏より英國に留学を命ぜられ、ラグビー校、鉱山専門学校に学んだ。明治十五年帰朝、外務省翻訳官となり、後諸国の日本公使館に勤め、退官後多くの英語辞典の編纂や英語通信教育に当たり、英文により日本事情を外国に紹介した。井上勤（嘉永三～昭和三）は徳島市の人。幕末七歳で、徳島に来たドンクル・クルチウスに英語を学び、鹿児島、長崎に留学して、英仏独露及びエスペラントの語譜に熟達。電信業を始め、各省に歴任、役所の仕事の傍ら、西洋文学を次々に翻訳、出版した。「女権論」「西洋珍説人肉質入裁判」など多数の訳書がある。

國語、國文學では、文法学者として知られた谷千生（天保三～明治二一）は徳島市の人。元藩士。數理的理論的頭腦の持主で、幕末湯浅春緒に和歌、國文を学び、明治となり、徳島師範学校の教員となり、著述を刊行した。後退職上京して、学究生活に入ろうとし、上京の途次、大阪で赤痢に罹り、帰國療養したが病後、「言語構造式」「詞の組立」などがある。林森太郎（明治五～昭和一二）は徳島市の人。東大國文科を出て、三高教授を久しう勤め、「日本文學



井上十吉  
（明治三〇～昭和四四）  
井上勤  
（嘉永三～昭和三）  
谷千生  
（天保三～明治二一）  
林森太郎  
（明治五～昭和一二）

翌年東大助教授に進んだが、辞任、昭和三年上智大学の文学部長となつた。十四年北京の燕京大学に招かれ、一家を擧げ赴任、満州、蒙古の研究に従つた。戦後二十六年退職、東京に帰り、八十四歳で歿した。その晩年、徳島市はこの老学者に名誉市民の称号を贈り慰め、その後、徳島県は鳴門市に鳥居記念館を設立し、博士の遺品・遺著を收め、その一部を公開している。我が國中世史を専攻した藤直幹（明治三六～昭和四〇）は徳島市出身の文学博士。京大史学科を出て、阪大教授となり、「中世文化研究」などがある。東洋史学者藤田豊八（明治二～昭和四）は美馬郡美馬町の人。東大漢学科を出て、明治三十年上海に行き、東文学社教授となり、在支十六年、帰国して、大正七年学位を受け、早大教授、東大教授を経て、昭和三年台北大学文政学部長となつた。「東西交渉史の研究」など多數の著がある。東北大名譽教授曾我部靜雄も東洋史家豊八の甥に当たる。那波利貞（明治二三～四五）は徳島市の人。幕末の儒家那波鶴峰の孫。京大文科を出て、唐代史を専攻、三高教授から京大教授に進んだ。その他、考古学、上代史の研究家で、「耶馬台国」の研究を残した笠井新也（明治一七～昭和三）は美馬郡脇町の人。古文書、書誌学に精進した猪熊信男（明治一五～昭和二八）の蜂須賀意心の子で、香川県の猪熊家を継いだ。聖徳太子の研究で注目された黒上正一郎（明治三三～昭和五）は上京活躍したが、三十歳で惜しくも病歿した。なお郷土史研究で業績を残した人に神河庚蔵（嘉永三～大正一五）、田所廣東（明治五～昭和一六）、島田泉山（明治七～昭和二二）、森敬介（明治二一～昭和二二）、銀田義資（明

史」などの著を残した。阿南市椿泊町出身の古川左京（明治二一～昭和四五）は神宮皇學館を出て、最後に日光東照宮官司となつた。人類学、考古学、歴史学では、多数の人材を出した。徳島市の人小杉楓邨（天保五～明治四三）は池辺真標、本居宣長に国学、和歌を学び、明治六年上京して教務省に勤めた。有職故実、正倉院文書に通曉、推薦で東大から学位を受け後に帝室博物館鑑査員、東京美術学校教授、東大講師、宮内省御歌所参候となつた。「阿波國徵古雑抄」など多数の著がある。喜田貞吉（明治四～昭和一四）は小松島市鰯沢町の人。東大史学科と大学院を出て、文部省に入り、国定教科書編集官となり、後学位を受けたが、明治四十四年、國史の教科中の南北朝の記事が帝国議会で問題となり、責を負うて辞任。後京大講師から教授となつたが退職。その後東大講師となり仙台に行き、奥羽、蝦夷などの研究を行つた。我が國古代史の權威で、「平城京の研究」「南北朝論」など多数の著がある。人類学の島居龍藏（明治三～昭和二八）は徳島市の人。小学校中退後独学で人類学の研究に入り、二十歳で上京、東大の人類学教室の助手となり、坪井正五郎博士の指導を受け、同大学の講師に進んだ。明治三十九年蒙古王府の学堂の教師に赴任、蒙古、満州、朝鮮を調査した。大正十年学位を受け、なり、坪井正五郎博士の指導を受け、同大学の講師に進んだ。明治三十九年蒙古王府の学堂の教師に赴任、蒙古、満州、朝鮮を調査した。大正十年学位を受け、

本晚翠（文化九～明治二〇）は淡路の人。藩の儒官となり、詩をよくし、柴野碧海以後晩翠あるのみといわれたほど、優れた詩人であった。美馬郡木屋平村の出身山田貢邸（安政五～昭和一六）も東京に出て、国学院大学などに教え、明治天皇紀編纂に携わった学者で、詩文に秀れていた。

## 五 文学界の人々

女流詩人生田花世（明治二一～昭和四五）は板野郡上板町泉谷の人。本名は西崎花世。文学に志し、小学校教員を退職して上京、河井醉翁、水野葉舟らに詩文を学び、「青踏」「女人藝術」などで活躍、「青踏」で知り合った生田春月と結婚したが、昭和初年春月が瀬戸内海に身を投じた後も、詩、小説、隨筆を各誌に発表。戦後は生田源氏の会を起こし、源氏物語を婦人に講じた。詩集「春の土」などがある。「オリンピック讃歌」を作詞した詩人野上彰（明治四二～昭和四二）は徳島市の人。本名は藤本登。京大法學部に学んだが、退学。園暮の名手で、上京して「園暮春秋」の編集長となり、川端康成らの知遇を得て、文壇に出た。戦後は藝術前衛運動「火の会」を起こし、詩、小説、ドラマを制作した。「野上彰詩集」など多数の著がある。三好郡井川町の人内田彌八（万延元年～明治二十四）は、上京して慶應義塾に入り、英学を学び、塾長福沢諭吉に愛された。在学中に書いた「義經再興記」は、義經が衣川から蝦夷地を経て蒙古に入り、ジンギスカンとなつたと述べたもので、行文が流麗であったとのと時好に投げ、ベストセラーとなり、数千金を得て、

中国・印度・暹羅・濠州を巡り、病を得て帰國、療養に努めたが、三十二歳で歿した。恩師諭吉は彌八の死を悼み、その碑文に「不幸短命にして逝く。その人の為に悲しむのみならず、國の為に之を惜しむ。」と記した。鳴門市高島の出身貴司山治（明治三二～昭和四八）は本名は伊藤好市。大阪新報に入り、処女作「新恋愛行」が同紙の懸賞小説に入選、上京して作家生活に入り、プロレタリア大衆小説家となつた。晩年は文学誌「暖流」を発刊、郷土の後進作家の育成に努めた。「新篇維新前夜」「ゴーストトップ」などがある。佃実夫は阿南市新野町の人。本県から横浜市に転出して歴史小説家として活躍、既に「わがモラエス伝」「阿波國自由党始末記」などの著がある。推理小説家の海野十三（明治三〇～昭和二四）は徳島市の人。本名は佐野昌一。早大電気科を出て、通信省電氣試験場に勤めた。昭和三年「電氣風呂怪死事件」の処女作で文壇に出、江戸川乱歩、大下宇陀児らと共に、科学、探偵、推理小説家の先駆となつた。「振動魔」「浮囚」などがある。評論家新居格（明治二一～昭和二六）は鳴門市大津町の人。東大法科を出て、読売、東京朝日などの記者を経て東京毎夕の文芸部長となり、後社会評論家として独立、文芸、思想など幅広い評論を試み、高く評価された。戦後一年間杉並区長を勤めた。「左傾思想」「区長日記」など多数の著がある。佐古純一郎は名西郡神山町の産。日本大学宗教科を出て、日本聖書神学校に学んだ。昭和十六年「文藝」の懸賞評論に入選、評論家となつたキリスト教的立場から宗教と文学を論じ、「純粹の探求」などがある。小説家富士正晴は三好郡山城町の人。三高を中退し、

在学中竹内勝太郎に詩を学んだ。後雑誌の編集者となり、代表作に「競輪」「游魂」などがある。流行作家瀬戸内晴美は徳島市の人。

東京女子大國語専攻部を出て、結婚し満州に行き、戦後引きあげて夫と離婚、作家を志し、丹羽文雄の「文学界」に加わり、「田村俊子」により、田村俊子賞を、又「可愛い女」により、女流文学賞を受け、作家となった。「かの子撲」など女性の愛慾を描いた作品を次々に発表したが、昨年得度して尼僧となり、寂聴と号し、尼僧生活と作家生活を両立させている。「美は乱調にあり」など多数の著がある。郷士にあって、古くから武者小路寒鶯の門下となり、新しき村にも参加、農民文学を書き続けている悦田喜和雄は海部郡由岐町の人。農業の傍ら「農民文学」「四国文学」「暖流」などの同人として活躍、後進の指導にも努めている。「新しき日」などがある。徳島に住み、且つ死んだ異邦の文学者に、ベセンスラオ・デ・モラエス（一八五四～一九二九）がある。ポルトガルのリスボンに生まれ、海軍兵学校を出て、士官となり、その後外交官となつた。

明治三十一年神戸の同國総領事となり、後辞職した。

大正二年七月、亡妻ヨネの郷里徳島に来り住み、ヨネの妹の娘斎藤小春を妻とし、文筆生活を送り、徳島の風物により日本を祖国に紹介した、小春の歿後、昭

和四年七月、孤独の生涯を徳島で閉じた。「おヨネと小春」など多数の著がボルトガルで出版されたが、後邦訳され、最近その全集も刊行された。モラエスは徳島の小泉八雲であった。

和歌は次の俳句と同じく、日本に名を知られるほどの人は出でない。細井菊枝（嘉永三～大正二）は阿波郡阿波町の人。明治の頃、岩津の淵の畔に枕流亭を結び、詩歌、俳句、絵画、彫刻などの風流生活を送り、歌集「枕流集」を残した。与謝野鉄幹・晶子の新詩社の歌風が全国を風靡した頃、歌誌「明星」に参加した人に、美馬郡半田町の逢坂藍水（明治二一～昭和二四）、徳島市の松永清乱（明治一七～昭和四七）、鳴門市の吉岡春琴（明治二〇～大正一四）がある。藍水は医師で、町長や県議となり、短歌から離れたが、清乱は周二の本名に帰り、長く与謝野一家との交渉を保ち、晩年歌集「天地一馬」を残した。春琴は早世したが「吉岡春琴歌集」がある。アララギ派の藤屋嫗（明治一二～大正一五）は徳島市の人、万葉調の優れた「藤屋嫗遺詠集」がある。板野郡上板町高志出身の小西英夫（明治二五～昭和三〇）は新聞人、潮音派で長く作歌して同人、選者となり、「小西英夫遺歌集」などがある。美馬郡一字村の西内瀧三郎（明治二〇～昭和四五）は吾妹派で、歌集「樹に射す光」があり、小野克子（明治二九～昭和三六）は霸王派で、歌集「鮎となれ」などがあり、同派の古い同人佐沢波経は大阪市に健在、今も作品を発表している。現在徳島には、「徳島歌人」「徳島島歌人」

俳句では、木太刀派の木下彌城（明治五～昭和三）は麻植郡美郷村出身で専売局官吏、木太刀の同人、選者となり、「龜の蹤」などを残した。美馬郡半田町の杉山虹泉（明治二七～昭和四五）は専売局官吏、晩年「俳人吉分大魯」の著がある。石楠派の森遼日（明治二七～昭和四三）は同派の幹部となり、句集「泉」がある。ホトトギス派の山尾白兎（明治三四～昭和一三）は鳴戸市瀬戸町の人。早世したが、小鳴門の海を愛し、秀句を残し、虚子の歳時記に句が載せられた。倦鳥派の宇山老谷（明治一〇～昭和四三）は美馬郡半田町の医師。昭和七年松瀬青々を半田に迎え、句集「桐の花」を残した。現在本県では、句誌「祖谷」「松苗」「航標」「向日葵」などが刊行され、句作に精進する者が多数ある。

## 六 芸術界の人々

絵画では、日本画の土佐派守住貢魚（文化五～明治二五）は徳島市の人。十六歳で渡辺広輝に入門、後に江戸に行き、住吉広定に学び、藩の絵師となつた。明治十三年大阪に出て、各絵画共進会に出品、入選、後審査員となり、画壇の重鎮となつた。二十三年帝室技藝員に選ばれた。野口小蘋（弘化四～大正六）は名は親子。麻植郡鳴島町出身の



蘋 小 口 野  
(弘化四～大正六)は名は親子。麻植郡鳴島町出身の

医家松村春岱の女。大阪で生まれた。南画家日根対山に師事し、野口正章に嫁した。後上京、明治六年昭憲皇太后的屏障を書き、明治十五年華族女学校教授、内国勧業博覧会等に出品、受賞した。明治三十五年常員、周宮面内親王の御用係、後帝室技藝員に選ばれた。子小蕙も絵をよくした。広島晃甫（明治二一～昭和二六）は徳島市の人。東京美術学校日本画科を出て、大正八年第一回帝展に特選となり、大正三年推薦、昭和二年審査員、昭和十一年文展の審査員となつた。那賀郡羽の浦町出身の日下八光は東京芸大教授を長く勤めた日本画家。古墳内壁画の研究を以て知られる。

洋画では、先輩の三宅亮巳（明治七～昭和二五）は鳴門市出身。松本民治らに学び、後に米国のヨーロピ大学附属美術学校に学んだ。子小蕙も絵をよくした。伊原宇三郎に徳島市の人。大正十年美校を出て渡仏、六年間留学、昭和四年帝展に特選となり、後美校助教授を長く勤め、帝展、文展の審査員となり、今も活躍した。

版画の伊上凡骨（明治八～昭和八）は徳島市の人。上京して、日本橋の木版影刻師の徒弟となり、明治三十二年頃木版技術を以て洋文展の審査員となり、今も活躍した。  
「白鶴」「明星」の表紙画やカットを彫って有名になった。「凡骨

版画集」がある。  
書道の都郷鐸堂（安政五～昭和一九）は美馬郡一宇村の人。小学校教員、校長退職後、八十七歳で東京で歿するまで書道の鼓吹と革新を全国の遊説した。特に草書をよくし、「草訣百韻歌刪修」などがある。

彫刻では、日展鑑査員服部仁郎（明治二八～昭和四一）は鳴門市大津町の人。家職の瓦焼の職工より始め、苦学して美校彫刻科を大正十五年卒業。後帝展、文展、日展に特選となり、後鑑査員となつた。

阿波人形、操り人形の首は江戸期からの伝統をもつ、明治以後の名匠は天狗屋久吉（安政五～昭和一八）は徳島市国府町の人。本名は吉岡久吉。川島富五郎に師事し、後名人となつた。弟子天狗弁（明治六～昭和四四）は、本名は近藤浅吉。近松座、文楽座の座付作者となり、昭和三十七年県の人間文化財となつた。

## 七 芸能界の人々

林鼓浪（明治二〇～昭和四〇）は徳島市の人。若年画を森魚淵に学び、青年時代神戸市に出て、映画、演劇に携わり、後帰郷、絵画、芸能、音曲に通じ、徳島の花街で芸妓の指導に当たつた。県文化財保護委員に選ばれ、県知事の表彰を受け、徳島市の人間文化財となつた。

義太夫は阿波の伝統的芸術で県立城北高校にこのクラブが出来て

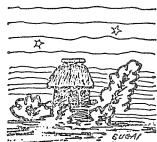
（徳島文理大学教授）

人物を中心とした

## 文化郷土史

—香川県—

松浦正一



### はじめに

香川県は四国の東北部にあり、瀬戸内海に面していて、中国や朝鮮の古代文化が、瀬戸内海を通じてわが国の中心地近畿地方に伝わったのを早く受け入れた所で、四国地方では古墳や上代寺院跡などが、最も多い地方である。

また朝鮮半島の文化を、山陰地方から岡山県を経て、受け入れている。中世以後も南海道では、政治経済文化などが、近畿地方についですぐれていた地方の一つであった。近世江戸時代には、藩主松平家が幕府の親藩として、江戸文化を早く伝えたほか、讃岐・三白といわれた、米・塩・綿（後には砂糖）の特産物があり、経済的にもすぐれていたので、裕福な藩であり、明治時代に入つても、漆芸彫刻などの独特の文化を生んだ県であった。本稿では、香川県の文化の中心ともいえる美術工芸に絞つて紹介することにする。

### 讃岐漆器と玉楮象谷

讃岐漆器の発展は江戸時代の後期に、高松に玉楮象谷<sup>たんしょくじょうこく</sup>が出て、藩主松平家のために、高級な漆器の作成に努力したことに始まり、それが明治時代に入り一時衰えたが、その後復興して一そう進歩し、手工業的な地場産業に発展し、昭和時代には本県の特産品にまで発展した。特に蒟蒻<sup>きゅうわ</sup>（和名「キンニ」）、存清（通称「存星」、香川県では存清と書く）など、鎌倉時代から室町時代に中國や東南アジア地

方から輸入されて珍重されていたものが、象谷の苦心によつて、彼の地に行かず棄物を見ただけで、その技法を心得し作成するようになつて以来、次第に発展した。現在では座卓、飾り棚、盆以下小物漆器などにこの技術が使われ、年産額約七十七億円（昭和四十九年度）に達し、地場産業の第七位となつてゐる。

玉椿象谷ははじめ姓は藤川、名は為造と呼び、通称を敬造また正直ともいひ、象谷（蔵谷とも書く）と号した人。高松市の郊外香川郡西山崎村（今の大高松市西山崎町）に生まれたが、青年のころ高松城下町の外磨屋町の、藤川家の養子となつた人である。藤川家は先代から、刀の鞘を塗ること

を職業とし、漆を売つてもいた。

象谷は養父について鞘塗りの方法を習い、なお彫刻も練習した。そのほか盆などの日用雑器に花や果実、文字などを彫り、それに漆を塗ることも始めていた。二十五歳の文政十三年ごろ、その名が近郊に知られ、藩主から菊唐草督上げの葉子盆、存清を模した食籠や軸盆などの高級品の御下命があるようになつた。天保三年には「讃岐彫」「讃岐塗」の名を許され、その作品に用いる印を藩主から下された。天保六年三十歳のころには、キンマ塗も作るようになり、



象 谷

年（こう）のころ高松城下町の外磨屋町の、藤川家の養子となつた人である。藤川家は先代から、刀の鞘を塗ること

帯刀が許され、天保九年には、お目見えを許され、玉椿の姓を賜つた。

蒟蒻とはタイ北部チエンマイを主産地とした漆器で、竹を編んだ素地すなわち籠胎に、漆を何回も塗り、これに模様を線彫りしたうえ、朱漆あるいは色漆を塗りこみ、それを研ぎ横様の部分だけをあらわしたもので中国の沈金の法が地方化した技法である。その名称はタイ語のキンマークから出たもので、この地方では古くからキンマ（こしょう科の常緑蔓性の灌木）の葉で、ビンロウの実に石灰を塗つて巻いたものをかむ風習があつて、これをキンマークといつてから、これを入れておく漆塗りの容器、さらに同じ手法の漆器をふくめて、キンマと呼ぶようになったものである。存清は中国漆芸の一體で、鎗彩または塙漆といい、その名の由来は中国の元時代の影漆の名工、張成の子張源の婚の名といい、また存星影に星のようないものがあるので、存星とも呼ばれたという。中国の鎗金（沈金）の法で、文様の輪郭線を描き、その内を色漆で埋め、あるいは文様を彫りくぼめ、色漆を充填してとき出すなど、各種の色漆を使い、はなやかな色彩効果を出した漆芸である。蒟蒻、存星とも日本の茶人がつけた名である。

### 玉椿象谷とその子供

象谷は三十四歳の天保十年には、一角（北極海あたりに住むクジラ類の海獸で、雄には二メートル以上に及ぶキバがあり、象牙質な

ので細工物に使われた）で印籠を作り、池に蓮の生えた図を彫り、それに龜やカニ、鳥、昆虫など、九百九十九匹を、ケシ粒ほどの大きさに彫り、藩主に献上した。また四十六歳のときには、堆朱の忘れ貝の香合、四十八歳のときには、堆朱の鼓箱、安政元年には、キノマの料紙箱・硯箱を作つて献上した。（それは今、重要美術品に認定されている）それらのことと、三人扶持を賜り、父理右衛門にも、苗字帯刀が許されなどした。このようにして当時、中国や東南アジアから輸入の堆朱・堆黒・キンマ・存清など、高級漆芸品が象谷の苦心によつて、わが国で作られる至つたが、明治二年（一月一日）象谷は六十四歳で病没した。

象谷には四人の男の子があり、長男理吉は父の名を継ぎ蔵谷と号し家を継いだが、その子倭太は早く卒し家業は断絶した。次男勇造（拳石と号した）三男良吉（雪堂と号した）四男新造（藤樹と号した）は、中年のころ没し、業を繼ぐ子孫がなかつた。象谷の弟の舜造（黒斎と号した）は、藤川姓を名乗り、文綺堂といつて古新町で、漆器商を営み、その次子新造（蘭斎と号した）は文綺堂を継いだ。新造の弟米造は分家して文賞堂といい、漆器商を営んだが、その家は繁榮しなかつた。しかし漆芸作品は特産品となつて現在に及んでゐる。

### 明治以後の漆芸と工芸学校

玉椿象谷の子四人は、叔父の舜造（黒斎）その子新造（蘭斎）らと

象谷は三十四歳の天保十年には、一角（北極海あたりに住むクジラ類の海獸で、雄には二メートル以上に及ぶキバがあり、象牙質な

技術を伝え、量箱・盆など高級品の製作を続けた。明治中期には國内産業が次第に発展し、外國からの新しい文化が伝わるとともに、従来の伝統ある漆芸のほかに、旧藩時代からの絵画、彫刻、金工、書道など、美術工芸の作家も次第に養成されるようになつた。特に香川県では県立工芸学校が設立され、急速に各方面的技術が発達し名声を博するに至つた。

明治二十八年に、富山県から徳久恒徳知事が来任すると、県令で「今後はこれまでのようになつて、一家の生活が何反何畝といふ、田を持つて生活に必要な米を作るだけの時代は過ぎた。四疊半一室でも一家を支えることのできる仕事に、切り換えるべきである。スイスの時計製造は、そのよい例である。今後は手工業、特に工芸に進むべきである」と説いて石川県立工芸学校から納富介次郎氏を校長に迎えて工芸学校を創立した。

納富校長は肥前（佐賀県）小城藩士柴田花守の二男で、弘化元年（一八四四）に生まれ、納富家の養子となつた人。早く長崎に遊学して南画を学び、明治四年横浜で油絵を学んだ。明治六年ボヘミヤのエルボーゲン製陶所で陶器のことを習い、フランスのセーブル製

陶所でも陶器の研究をし、一八七五年帰国。陶器、銅器、漆器の研究を続けた。徳久知事は香川県に来任前の石川県知事、富山県知事時代に、それぞれの県にも工芸学校を建ててある。また九州佐賀県には納富先生の建てた工芸

学校がある。明治四十年に文部省は、美術展覧会、即ち文展を開いたが、それが富後に帝展となり、終戦後には文部省を離れ、独立して日展となつたが、これら長い間の展覧会には、前記四工芸学校及び東京美術学校（現在の東京芸術大学）の卒業生がいかに多く活躍したかは驚く程である。



郎 次 納 文部省は、美術展覧会、即ち文展を開いたが、それが富後に帝展となり、終戦後には文部省を離れ、独立して日展となつたが、これら長い間の展覧会には、前記四工芸学校及び東京美術学校（現在の東京芸術大学）の卒業生がいかに多く活躍したかは驚く程である。

### 続出した漆芸家

香川県には玉楮象谷の漆芸技術を継いだ人々に、象谷の四人の子と弟舞造（黒斎）のほかに、数多くの名手が出た。

後藤太平（一八八四～一九三三）最も早く、出た人である。太平は高松藩士後藤健太郎の二男で嘉永二年高松に生まれた。明治維新の変革で、士族も職を持たねばならなくなり、象谷塗を学んでそれに変化を求め、独特的の技法をもって実用的な朱色を塗った煎茶用具や、松材を用いた彫り抜き盆など、「新機軸を開いた塗物を作り、後藤塗・後藤盆の名で呼ばれるものを作り、現在も子孫がその製作



試験場に兼務となり、昭和十一年には帝展に特選となつた。以後無鑑査出品、招待出品となり、昭和二十八年母校を退職、岡山大学教育学部美術科工芸主任教授となり、香川県漆芸研究所

技術指導員を務めた。昭和三十一年四月重要無形文化財技術保持者に認定され、昭和三十二年には、香川県文化功労者として表彰され、昭和三十六年十一月には、紫綬褒賞を受章した。昭和三十九年八月二十三日死去し、從五位勲四等旭日小綬章を授けられた。

香川宗石（一八九一～）本名は勇。明治二十四年十一月高松市福井町に生まれた。十六歳のころから、父に従って風の絵付を手伝い、次いで座卓の下絵を習い、長じて座卓の漆塗りに従事。二十七八歳のころから存清塗の漆芸に専念するようになった。昭和二十八年三月、文化財保護委員会から無形文化財存清漆器の記録作成を依頼され、実物標本の作成と記録を作成した。現在香川県漆芸研究所工芸指導員として、後継者の養成に勤務している。昭和四十一年十

一月十二日紫綬褒章を受章し、昭和四十五年四月二十九日には勲四等瑞宝章を受章した。

明石朴景（一九一一～）本名は聖一。明治四十四年高松市に生まれ、東京美術学校図案科を卒業、高松工芸研究所長、京都美術大

を続いている。大正十二年六月七十五歳で没した。

石井馨堂（一八七七～一九四四）本名は清治。明治十年高松市北龜井町に生まれた。若いころ父に就いて彫刻を学び、のち象谷の彫りや塗りを研究し、一般大衆用の盆、茶托等を作った。昭和十九年七月六十八歳で没した。門下に音丸耕堂、鎌田稼堂、齊藤淋谷などが出た。

音丸耕堂（一八九八～）本名は芳雄。明治三十一年六月高松市

古馬場町に生まれた。大正二年から石井馨堂に師事して、彫刻を学び、堆朱、堆墨をも学んだ。昭和七年以来帝展・文展に出品して入選し、昭和二十七年からは日展審査員となり、昭和三十年依頼出品となつた。その間に象谷のキンマ・存清の技法をさらに発展させ、多数の色塗を数十回ないし数百回重ね塗り、それを彫り削って彫漆にまでひろげ、昭和三十年五月国の重要無形文化財技術保持者に認定され、東京に在住活動している。

磯井如義（一八八三～一九六四）本名は雪枝。明治十六年三月高

松市宮脇町に生まれた。紫山高等小学校のころ、絵が好きだったので、玉水塾に通つて絵を学び、明治三十六年香川県立工芸学校を卒業した。最初刑務所に勤め囚人の漆塗り作業の指導をしていたが、同年末大阪の山中商会に入社した。中国や東南アジア製の漆器類の修理補修や、陶器や書画類の取り扱いや取り引きの知識を得た。大正五年帰國し、母校に勤務するかたわら、漆芸作品の製作をはじめた。昭和四年帝展にキンマ手箱を出品初入選、昭和九年香川県工業

学助教授を経て現在高松短期大学教授である。日展で漆芸の特選となり、無鑑査出品依頼、現代美術展の審査員をも勤めた。現在高松市で作家として活躍中である。

大西忠夫（一九一八～）大正七年善通寺市に生まれ、香川県立工芸学校を卒業、その後上京して故堆朱陽成氏に師事して漆芸を研究し、昭和二十一年日展に初出品、昭和三十年には特選、昭和三十一年には無鑑査となり、昭和三十四年から出品依頼となる。その間香川県漆芸研究所の指導員となり、昭和三十六年日展審査員となり、大型の作品製作に専念し、新機軸の開拓に邁進している。音丸 寛（一九二七～）音丸耕堂氏の長男で、昭和二年東京で生まれ、文化学院美術科を卒業。昭和三十二年より第一美術展で受賞三回、昭和三十六年以来日本伝統工芸展に入選、昭和四十一年優秀賞受賞、昭和四十二年日本工芸会総裁賞などを受賞した。

音丸 淳（一九二九～）昭和四年音丸耕堂氏の二男として高松市に生まれ、昭和二十七年東京美術学校を卒業。作家として活躍し、昭和三十二年イタリアのブレラ美術大学に留学、日本伝統工芸展では優秀賞を二回受賞した。

### 影刻家

小倉右一郎（一八八一～一九六一）明治十四年大川郡白鳥町に生まられ、香川県工芸学校から、東京美術学校に進み、彫刻を学び明治

四十年卒業。大正九年からフランス・イタリア・イギリスなどを訪れて研究。文展の特選審査員をも勤めた。昭和二十一年母校香川県立工芸学校長となり、昭和二十七年まで在任、同校の戦災後の復興に努め、昭和三十一年第一回香川県文化功労者として表彰された。

藤川第三（一八八三～一九三五）明治十六年十月高松市古新町に生まれた。漆芸で有名な玉椿象谷の孫である。香川県立工芸学校を卒業。明治四十一年東京美術学校彫刻科を終え、二十六歳で農商務省の海外留学生としてフランスに渡航、ジュリアン研究所で腕を磨き、のちロダンに師事してその助手となるなどして、大正四年に帰国、近代フランス彫刻の精神を正しく伝えた。帰国後二科技藝がで、製作のかたわら後進の育成に尽くした。昭和十年五月帝国美術院会員にあげられ、わが國近代彫刻史に、大きな足跡を残した。昭和十年六月五十三歳で東京で死去。

國方林三（一八八二～一九六七）明治十六年大川郡寒川町に生まれ、いまだ香川県立工芸学校がなかったので、富山県立工芸学校で学び、卒業後上京して、大正元年まで太平洋画会研究所で、木炭画および塑像を修業、のちに彫刻の本道に進み、明治四十一年第二回文展以後毎回入選、帝展は推薦無鑑査を経て、第四回帝展以後新文展、日展の審査員、無鑑査となつた。昭和二十七年以来日展參事となつて出品していた。作品の多くは人体彫刻が主で、新しい洋風彫刻の流れをくみ、写実に出发し、流麗で氣品のある傑作を残した。

昭和三十年ごろ視力障害、のち両眼失明に至り、昭和四十二年十月八十四歳で没した。

矢野誠一（一八八五～一九二九）明治十八年五月徳音寺市に生まれ、香川県立工芸学校彫刻科を卒業。新田藤太郎氏と同期で、木彫を多く作った。四十歳と四十一歳のとき、帝展で連続特選になり、無鑑査となり、その後審査員と進んだが、昭和四年十二月四十四歳で没した。

池田勇八（一八八六～一九六三）明治十九年八月綾歌郡綾南町に生まれ、琴平工業子弟学校に学んだ後、東京美術学校に進み、同校彫刻科を卒業。二十二歳で文展に初入選、のち無鑑査となり、審査員にも選ばれた。作品は種々の動物の生態に題材を求める、特に馬の作品が多く、また傑作が多い。

新田藤太郎（一八八八～）明治二十二年三豊郡詫間町に生まれ、明治四十年香川県立工芸学校を卒業。明治四十五年東京美術学校彫塑科を終え、同校研究科に二年間在学した。明治四十三年美術学校入選を続け、その後無鑑査となり、昭和二十二年文展、帝展、新文展に毎年入選を続け、その後無鑑査となり、昭和七年審査員となつた。昭和二十年東京で戦災にあ



新田 藤太郎  
昭和二十年東京で戦災にあ

い、郷里香川県に疎開、高松市に在住している。昭和九年以来香川県美術展覧会開催の世話をし後進の養成に努められ、昭和三十四年には香川県文化功労者として表彰され、昭和四十二年には日本彫刻会から功労賞を受け、昭和四十五年勲五等瑞宝章を受章した。現在八十七歳なお高松市立美術館の専門職員として活躍している。

渡辺弘行（一九〇一～）明治三十四年大川郡志度町に生まれ、昭和二年東京美術学校を卒業。彫刻家として大正十四年帝展に初入選、昭和九年には文展無鑑査となり、昭和二十九年には日展に特選となり、昭和三十一年より依頼出品となつていて。現在東京で製作に励んでいる。

横山文次（一九一六～）大正五年綾歌郡岡田村に生まれる。昭和十四年東京美術学校彫刻科を卒業。同年文展に初入選、昭和三十九年文展に特選となり、昭和四十一年より日展依頼出品となつていて。

### 洋画家

小林万吾（一八七〇～一九四七）明治三年三豊郡詫間町に生まれる。明治二十年愛媛県松山で、堀越喜三郎氏に絵を学び、明治二十二年には上京して、原田直次郎氏に師事し、ついで東京美術学校に入学、フランスから帰国したばかりの黒田清輝氏について洋画を学び、同校卒業後は白馬会の主力作家として画壇に登場した。明治三十六年東京美術学校助教授となり、その後、官展系作家の重鎮とし

て、文展、帝展に多くの力作を発表したほか、明治四十四年にはドイツ、フランス、イタリアに三か年間留学、帰国後は東京高等師範学校教授、東京美術学校教授となり、美術教育に尽くした功績は大きい。昭和十六年には帝国芸術院会員を命ぜられたが、昭和二十二年十二月、七十七歳で没した。

柏原寛太郎（一九〇一～）明治三十四年高松市屋島町に生まれ、香川県師範学校から東京美術学校に進んだ。昭和三年以来二科展に連続出陳。昭和七、八年と昭和三十九年には、ヨーロッパ諸国に留学。昭和二十年行動美術協会の創立以来、その委員となり、東京で現在も活躍中である。

白川一郎（一九〇八～）明治四十一年仲多度郡琴平町に生まれ、昭和七年東京美術学校洋画科を卒業。同校講師となつた。昭和十七年文展に特選で、政府買上げとなり、昭和十八年文展に無鑑査のうち依頼出品となる。外遊三回。昭和二十八年伊勢神宮式年遷宮の記録画を描き、また最後の御前会議の図を描いた。

熊野俊一（一九〇八～）明治四十一年香川郡塩江町に生まれ、正宗得三氏に師事し、昭和九年から二科展に出品し九回入選、同十七年会友となる。終戦後二回会に出品、同人受賞、昭和三十一年委員となる。昭和三十八年から外遊二回、東京で活躍中である。

猪熊弦一郎（一九〇二～）明治三十五年十二月、高松市中野町に生まれ、丸龜中学校から東京美術学校洋画科に進み、藤島武二画伯に師事した。大正十五年第七回帝展に初入選し、昭和四年から昭

和八年に特選となつたが、昭和十年新帝展に反対し、不出品の盟友らと旧帝展派で第一部会を組織し、新製作派協会を作り、新方向に進んだ。昭和十三年外遊しフランス・イタリア・スイスなどを巡り、マチスを訪れるなどして帰国、昭和三十年からアメリカに渡り、ニューヨークに滞在、新しい方向に活躍している。

### 金工家



北原千鹿（一八八七～一九五一）本名は千祿。明治二十年五月、高松市旅籠町に生まれた。明治三十九年香川県立工芸学校卒業、明治四十四年東京美術学校彫金科卒業。大正五年から大正十年まで、東京府立工芸学校教諭を勤め、その後新工芸研究会、無人同人として活躍、昭和二年第八回帝展から、手がたい作風

で連続特選となり、のち無鑑査、昭和二十一年第一回日展以後は審査員、昭和二十四年から二十六年まで参事となった。晩年は郷里の香川県立工芸学校の講師も勤めた。昭和二十六年十二月六十四歳で高松市で死去した。

鴨幸太郎（一九〇一～一九五七）明治三十四年高松市五番町に生まれ、香川県立工芸学校卒業。大正十四年東京美術学校金工科を

一月徳島市に生まれた。父が高松に来て高等女学校の教師であったので、香川県立工芸学校に入学、漆芸の蒔絵まきえを学んだ。ついで東京美術学校に入学、日本画科を修めて卒業。第一回帝国美術院展に「青衣の女」を出品して特選、第二回に「夕暮の春」を出し、続けて特選となり、大正十四年帝展の審査員となり、さらに無鑑査となり、昭和五年ド・イツ・イタリア・オランダ・ベルギー・スペイン等を巡歴帰国し、主として人物画、晩年には花鳥を描いた。昭和二十六年十二月、六十二歳で死去した。

馬場不二（一九〇六～一九五六）本名は和夫。明治三十九年高松市に生まれた。香川県立工芸学校から東京美術学校日本画科を経て作家生活に入った。昭和九年明暦展、歴程美術展、院展等に出品、院展では大観賞、院賞等を受賞、昭和三十一年日本美術同人に推せんされた。長い不遇時代に続く、闘病生活を強い製作意欲で克服し、独自の大きい形象を把握し、おだやかな色調で氣韻のある描出に成功したが、昭和三十一年十月五十歳で他界した。

### 書道家

炭山南木（一八九二～）明治一十八年小豆郡内海町に生まれた書道家で、特に漢字にすぐれた作家である。京都市芸術大学を出て谷川尚亭に学び、日展に入選、のち同展審査員となり文部大臣賞を受け、毎日展審査員にもなり、昭和三十六年度芸術院賞を受けた。大阪に住し樟蔭女子大学教授で、勲三等瑞宝章を受け、紺綬褒賞を

終え、文展、帝展、日展にそれぞれ入選。昭和二十六年には日展で特選となり、のち無鑑査、ついで招待依頼出品となり、昭和二十七年には審査員となつたが、昭和三十二年十一月若くして死去した。

鴨政雄（一九〇六～）前記鴨幸太郎の令弟で、明治三十九年高松市に生まれた。香川県立工芸学校卒業、昭和五年東京美術学校を終え、なお研究科に学んだ。昭和五年から昭和二十七年まで、文展・帝展・日展に入選十七回に及んだ。昭和十年には日展で特選となり、以後審査員となつた。現在高松市立美術館学芸員を勤めている。

後藤學（一九〇七～）明治四十年二月高松市昭和町に生まれ、大正十四年香川県立工芸学校を終え、昭和六年三月、東京美術学校彫金科卒業。昭和七年以來母校で実習助手、昭和十五年同校教諭となり、昭和三十三年四月、同校校長となる。昭和四十二年十一月同校退職。その間帝展・日展・日本伝統工芸展に出品、奨励賞を受け、特選について無鑑査となつた。

### 日本画家

野生司香雪 明治十八年（一八八五）今のが高松市櫻紙町に生まれる。東京美術学校日本画科卒業。仏教方面の研究に進み、明治四十一年には仏画を東京博覧会に出品、大正六年には文部省から印度に派遣され、アジャンタの石窟寺院の壁画のほか、信州善光寺の大壁画など、寺院に關係の作品が多い。

広島晃甫（一八八九～一九五一）本名は新太郎。明治二十二年十

授与された。

### 陶芸家

大森照成（一九一〇～）明治四十三年三豊郡高瀬町に生まれ、大正八年ハワイに渡航、国画会員山下品藏氏に師事、絵を習った。昭和二十年陶芸研究に着手し、ハワイ大学陶芸部で釉薬を研究、昭和三十四年帰國し郷里高瀬町に南山窯を築き、なおハワイ大学研究室で二年研究を積み帰国、作陶に精進されている。昭和四十九年香川県文化功労賞を受賞した。

### 染織家

鎌倉芳太郎（一八九八～）明治三十一年十月香川県に生まれ、香川県師範学校から、東京美術学校国画師範科に進み、大正十年卒業。沖縄県で教育に従事のかたわら、財團法人啓明会の補助により琉球独特の紅型の資料収集、研究を重ね、古典的様式をきわめて型絵染に独自の作家活動を続け、昭和三十八年四月、無形文化財技術保持者に認定された。その間昭和十七年には、東京美術学校助教授となり、社団法人日本工芸会会員、のち同会理事となり、昭和三十九年には伝統工芸展奨励賞、昭和四十七年には総裁賞を受賞した。

（香川県文化財審議委員）

人物を中心とした

## 文化郷土史

—愛媛県—



今村三郎

## はじめに

明治・大正期における愛媛の先覚者として役割を果たした人は数多く他方面にわたっている。その中でも文芸特に俳壇においては正岡子規を中心として多くの俳人が輩出し、全国的に活躍している。

これ等は豊かな気候風土にめぐまれ、こまやかな人情によって受け継がれた県民性によるところ大きいものがあると思うのである。それと共に当時中央に出てそれぞれ研鑽を積み、なみなみならぬ努力をはらっていることがうかがえるのであるが、当時の藩主は東京に学生寮をかまえこれらの有為の子弟の育英に努められており、全国的に有名な人物の輩出にあたり意義深いものがある。

特に愛媛の文化郷土史を考える時、俳句をぬきにして考えることはできないであろう。このたびの人物を中心とした文化郷土史も俳人を中心にして述べることにした。

正岡子規 慶應三年松山藩士の子として生まれ本名は常規・幼名は升<sup>のぼる</sup>といつた。幼少から外祖父大原綱山らについて素読を学び十二歳にして漢詩を作り十三歳の時学友と回覧詩誌を編集した。松山中学を中退後上京し、大学予備門に入学したのが明治十七年十八歳であった。二十年松山中学に帰り、三津の大原基戒について俳諧の教えを受けた。當時野球に熱中し、松山にはじめて野球を伝えたのは子規といわれる。二十二年同郷の新海非風、五百木顯亭、藤野吉白ら、のち内藤鳴雪も加わって、俳句の研究を始めた。近代俳句の黎明である。夏目漱石とも交わりを結んだが俳句革新を生涯の事業として決意し明治二十五年東京帝国大学文科を中退して、日本新聞社に

入社した。まず旧派、月並派との戦いである。日清戦役には病弱の身を挺して従軍記者となり、帰途略血して重態に陥り、小康を得て明治二十八年八月、松山中学教師であった漱石の寓居愚院仏龕に入つて十月まで滞在、松山の新派俳句はこの時に勃興し、後年の文豪漱石はこの間子規によつて生み出された。明治二十九年東京に帰つたが以後はほとんど歩行の自由を欠き病床に親しんだが、新聞「日本」紙上ならびに雑誌「ホトトギス」の創刊もあって、日本新派俳句は全国に普及した。この後しばしば病勢悪化したが、三十一年に「病臥漫録」に明治三十三年ようやく月収五十円となり、昔の妄想が実現したとよろこんでいるほどである。文士は貧乏なれという神文を提唱、小説作家らに大きい影響を与えた。三十四、五年は病いよいよ重く、写生画に病苦を慰めるとともに、新聞「日本」紙上に「墨汁一滴」ついで「病状六尺」の執筆を怠らず、死の二日前まで続いた。絶筆三句は死の前日であった。子規は一生清貧であり、「病臥漫録」に明治三十三年ようやく月収五十円となり、昔の妄想が実現したとよろこんでいるほどである。文士は貧乏なれという神文を提唱、小説作家らに大きい影響を与えた。三十四、五年は病

の捷にかなうものと悟り、人の高給をうらやまぬといつてゐる。また闘病については「病氣の境界に處しては病氣を楽しむ事」の境地に達し、苦痛、煩悶、号泣など「一条の活路を死路の中に」



正岡子規

求め、禅宗の悟りは平氣で死ぬことではなく平氣で生きていることと道破している。叔父加藤拓川らの援助や、母八重、妹律の献身的奉仕、師友門下らのあたたかい協力はあつたが、三十六年の短い生涯に、貧困病苦に屈せず、文学史上不朽の大業をなしとげたのは、みずから勉学研鑽はもとよりその異常なまでの情熱、意志力、闘志によるものといわなければならない。年少の碧梧桐、虚子はもとより、極端また二十歳も年長の大先輩鳴雪まで欣然傘下に参じ、内外幾多の有力門下グループによつて、その遺業が繼承大成された。寒川鼠骨のごときは神のごとく尊敬した。子規はそうした天賦の魔力と才能を備えていた。生誕百年、死後六十余年、子規はいまなお生きつづけている。

内藤鳴雪 弘化四年松山藩士内藤同人の長男として江戸三田の松山藩邸で生まれた。名は助之進のち素行、十一歳のとき父に従つて松山に居住、藩校明教館に学び、別に書を武智五友、漢詩を大原観山、軍学を野沢象木に、武芸にもはげんだ。久松家藩主定昭の小姓役となり長州征伐の軍に従い、また京都に遊學、東京の昌平校にも学んだ。明治三年藩制改革により松山藩恵少參事に任せられ、学政を主管することになり、明教館の大改革を試み、漢学のほかに洋典、医療、算數の各科を設け少壯教官を採用して新知識の流入をはかった。みずから「当時はハイカラであった」といつてゐる。明治四年廃藩とともに再び上京して英学を修業し、五年帰国して石鉄県学区取締を命ぜられ、小学校の創設に力を尽くした。この年、名を素行と改めた。明治八年愛媛県権令になった岩村高俊は普通教育に熱心で、学区取締の鳴雪はしばしば諭問をうけ、その進歩的な意見

が岩村の意に投じ、信任を得て第一等出仕に抜擢され学務課勤務、のち課長になり小学校教育の普及につとめ、師範学校創設を提議して実現せしめた。英学所長草間時福らと学生雄弁会で演説したり、自由民権を唱えたり、創刊早々の愛媛新聞に執筆したり、大いに新人ぶりを發揮した。同時に南塔と号として漢詩をよくし、地方詩壇に重きをなした。岩村県令が十三年内務省に転じ、鳴雪は後任の閑新平と相容れず、上京して文部省に勤めた。ここでもその識見手腕を認められ二十三年参事官に昇任した。これにより先、久松家が東京遊學の旧藩子弟のために設けた常盤会寄宿舎の監督を委嘱されていたが、二十四年四月文部省を退いて監督に専任した。当時同寄宿舎には正岡子規、五百木瓢亭、勝田主計(のち大蔵大臣・文部大臣)らがいた。漢詩人としてかねて敬慕した内藤先生を迎えて舎内の文學活動は盛んになつたが、子規らが俳句に熱中するようになり、鳴雪もその影響をうけてそのグループに加わった。時四十六歳。郷党の大先輩が二十歳も年少の子規の指導を仰ぐ、恬淡洒脱、拘泥せぬ人柄がうかがえる。明治四十年末、監督を当時陸軍中将の秋山好古に譲つて常盤舎と別れ俳句専念の生活に入った。流派を超越し、諸所の句会にも元気に気軽に出席、一流の詠謡をとばして、だれからも慈父のごとく慕われた。全国の新聞雑誌俳句欄の選者をたのまれているもの三十余の多きに及び、みずからも俳句小学校の先生をもつて任じた。俳句に関する著書もすこぶる多い。俳画にも巧みで、頗まればここよく描いた。「ただのむ湯婆一つの寒さかな」を辞世に、大正十五年二月二十日、東京麻布駒町の自宅で没した。享年八十歳。道後公園の寿碑は旧常盤会寄宿生が古稀を祝して建立

したもので碑文はつぎの文句で結ばれている。「郷党育英ノ功没ス可ラズ、世人其人格ノ崇キヲ嘆称セザルハナシ」。

河東碧梧桐 明治六年旧藩士、儒学者静溪の第八男として生まれ、本名秉五郎、六歳のころから父静溪から漢学の素読を受けた、京都三高、仙台二高を退学して東京に居住する佛聖子規の双壁として虚子とともに子規を助け優れた門下生であった。東京に来て、子規の居た陸羽園の日本新聞に入社、子規没後は新聞「日本」の俳句選者、新聞「日本」廢刊後は三宅雪領の雑誌「日本及日本人」の同人として俳句の選を継ぎ、明治三十九年から全国行脚をし「三千里」「続三千里」を連載し、明治末期から大正初期にかけては新傾向俳句で俳壇を風靡した。書は画人中村不折の勧めで「六朝」の書体を学び碧門下並びに新傾向派の俳人争つて「六朝」の書風に傾倒した。今も虚子門下は虚子の文学、碧門下は碧の文学を繼承する者が多いが「碧は六朝」の書も碧の「六朝」たらしめた。

少青年時代互いに「へいさん」「きよさん」と呼び合つた二人は、碧の新傾向俳句、虚子の伝統俳句で対立してから激しく相争つたが、碧梧桐逝去の時は、虚子もこれを哀しみた。

碧梧桐とはよく親しみよく又争うたりたとふれば独樂のはじける如くなり。

の追悼句を贈つた。六十五歳で逝去したことは子規門下の人々を驚せしめた。子規門下中最も長寿を保つは碧であらうというのが定評であったから。虚子の凹みを帯びた圓熟味に対し、碧は貴公子然たる風貌にかかわらず、肩をそびやかせ剛健を誇っていた。好んで山を歩き「日本の山水」「南アルプス縦走記」等の著書がある。晩



桐 東 梶 古

年は蕪村研究でも著名であつた。「國人蕪村」「蕪村十一部」はじめ「反古文」「明和辛卯春」などの原本複刊などもし蕪村の書画鑑定では第一人者であった。水の流れも停滞すれば腐敗すると、従来の定型伝統俳句から新傾向派の樹立となつたが、しかし止まるところを知らず終わりには難解句となつて自ら俳句を絶つた。大正四年創刊の「海紅」は一碧樓にゆり、歐米より帰來後の人雑誌「碧」「三昧」も発刊、晩年は「子規言行録」「子規を語る」等の著書はあつたが淋しい不遇時代、昭和十一年友人、門下などから安住の家屋を贈られ非常に喜んでいたが、その喜びは一年に過ぎなかつた。

明るくて桃の花に葉種さしそぶる

今宵泊らん脚いたはりつもみだねれむ

汐のよい船脚を瀬戸のかもめは鷗づれ

さくら活けた花屑の中から一枝拾ふ

君を待たしたよ桜散る中を歩く

これらの句は得意時代のものである。明治の子規は元禄の芭蕉に比すべき優れた後繼者と多くの門下を有したが、河東碧梧桐と高浜虚子はその子規門下における双璧であった。しかも現俳壇において一流を成せる人たちの多くは碧門下、虚子門下の人々である。碧は虚

様に子規の許に教えを乞うたが、霽月は僅かに二、三度しか訪ねていない。ある時、漱石居で、子規の前で、松風会員が「霽月君あたりも早くから、子規先生の教えを受けていたからよかつた」と言った時に、子規が「否こうでない。霽月君は旧派の混沌たる所から独りで、此處までやつて来たのだよ」と言ったといわれている。霽月は常に「俳句は人格である。人格の発露でなければならぬ。句中に個性の発揮を期せねばならぬ。個性を發揮しないのであつたら、むしろ十七字の活字で機械的に印刷してもよい」とか「自分の句には花鳥諷詠などと言った様な暢氣な作はない。季題は感慨を表現し、吟詠する対象であり、吟詠の多くは人間の苦哀歎息、憤激罵倒の表現である。わが俳句は全人格の反映であり、反響である」とも言つてゐる。

霽月は俳人としても、愛媛農業経済界の大先駆者である。明治二十五年に一市六郡農会を設立し技術改善や農業経済に力を注がれた。明治三十年には、資本金十万円を以て伊予農業銀行を発足し、頭取として迎えられた産業金融の面にも多くの功績を残している。

柳原極堂　慶應三年旧松山藩士大小姓格柳原権之助正義の長男として松山に生まれた。本名は正之といつた。子規と同年であるが子規より半歳の先輩である。明治十六年、子規と相謀って松山中学校を中退した。先ず極堂が上京し子規は一ヶ月遅れて上京して、極堂の下宿に同宿した。子規と極堂は既にこうした少青年から相離ることを得ぬ運命にあつたというべきであろうか。東京の共立学校を終え明治二十二年、二十三歳の時、松山に帰り海南新聞社に入社、後同社の主筆、三十九年四十歳の時、伊予日日新聞社社長、政友会

桐 東 梶 古  
碧梧桐生誕百年祭が盛大に行われる）  
村上霽月 明治二年篆卦家の長男として生まれ子規より二歳の後輩、碧梧桐、虚子より四歳の先輩であった。明治二十四年夏、存学中の一高を中退、父久太郎の後を継ぎ、彼は青雲の志に燃えて遊学したのであるが、その父久太郎が浪費家であり叔父覺之丞の在世時代はまだしも覺之丞が二十四年七月急逝の後、父の濫費を監督の意味で、母親の意に従い学業を捨て、帰郷するに至つたのである。かえると今出紳の社長となり、二十六年頃から今出銀行の頭取にも就任していた。その二十五年頃業務出張で大阪に行った際講入した俳書の中に「蕪村句集」の上巻があつて、いたくそれに感興をひいた。東京では子規が大学をやめて根岸にうつり「日本新聞」に入社したのが二十五年の十二月、彼は二十一年頃から俳句の研究をはじめ、二十三年頃から本格的に俳句を作りはじめている。当時俳人の間にまとまつた「蕪村句集」のあることを知られていないかたが、霽月は「蕪村句集」の上巻を発見し、之を愛読した。ある機会にそれを鳴雪の知る所となり、鳴雪はそれを東京に取寄せて筆写し、子規らもこれによつてはじめて蕪村句集に接することができたのである。このような関係にありながらも、二十八年に後とも先ともこの一回だけ、霽月が根岸の子規を訪ねている。その年子規が帰松に際して、今出の霽月居を尋ねたことがある外、子規が帰松して漱石の禹陀仏庵に起居した居も郷里松山の松風会あたりの人々は、毎日の間にまとまつた「蕪村句集」のあることを知られていないかたが、



伊予日日新聞時代には同紙に俳句欄を設け、伊予吟社を創設して句会を催し、ある期間には毎週新聞二頁の「俳句附録」を出し県下俳壇の興隆に寄与するところすこぶる大であった。「鶴頭」発行中には「子規と其の郷里松山「子規の下宿がえ」を連載、十八年二月

「友人子規」として出版、これによって「子規全集」に欠けたる子規の青少年時代を明らかにし子規研究の貴重な文献たらしめた。終戦後における松山時代の晩年は子規会の創設、子規句碑歌碑の建設、子規生誕五十年祭等、子規顕彰のために在るが如く、これにその余生を捧げ尽くした。「吾生ハへちまのつるの行き處」の辞世の句そのままであった。「ほととぎす」「伊予日日新聞」「鷄頭」の経営に苦難の道ばかり歩んで来たが、最後には松山市より初の名誉市民称号、県より教育文化賞、没後には内閣より勲四等瑞宝章を贈られ最後が飾られた。句集「草雲雀」がある。

春風やふね伊予に寄りて道後の湯

城山や笛のびし垣の上

いつまでも忘れじ秋のこの旅を

の外三十墓に近い句碑がある。

高浜虚子 明治七年旧松山藩士池内庄四郎政忠の四子として生まれる。後祖母の姓家系高浜姓となつた。本名清・今日の俳壇「ほととぎす」「玉藻」は虚子没後においても俳誌の王座を占め、ホトトギス系の俳誌、ホトトギス派の俳句人口は他の追随を許さぬものがある。これだけの俳句王国を築きあげた虚子は、それだけでも偉大なる俳人であったと言わねばならないであろう。虚子にとって最大の不遇時代は碧梧桐の新傾向俳句の全盛時代のみであった。この時はさすがの虚子も勢いの赴くところ抗する術もなく「ホトトギス」の経営も

詫師」「続俳諧師」「神二つ」「句日記」「虚子俳話」、歳時記「花鳥諷詠」、能楽の方では「夷朝」「奥の細道」歌舞伎俳優で門下の中村吉右衛門のために「髪を結う一茶」「嵯峨日記」の戯曲まで書いた。昭和十二年には日本芸術院会員、二十九年文化勲章、没後從三位勲一等瑞宝章が授けられた伝統俳句の大御所としての面目躍如たるものがあった。句碑は全国に及んでいるが、県下にも各地にある。さとのこの松伐るな竹伐るな

松山市

笙啼が初音になりし頃のこと

松山市

この松の下にたたずめば露のわれ

北條市

戻り来て瀬戸の夏海絵の如し

今治市

春潮や和菴の子孫汝と我

今治市

の句碑がある。昭和四十八年松山市において、虚子、碧梧桐生誕百

年祭が盛大に行われる。

松根東洋城 明治十一年東京築地生まれで、本名は豊次郎。父が司法官であるため出身地守和島を離れ、転々とし築地小学校から大洲

小学校松山中学に進み、

ここで夏目漱石に英語を

学び第一高等学校に入学

のち、熊本に転任してい

る漱石に書を寄せて俳句の教えをうけ、根岸子規庵の句座に参加した。初めて東洋城と号したのは

不振困難を極め小説に活路を求めて新聞の連載小説「朝鮮」を書いたりしたが、活路たり得なかった。その他はおおむね順調幸運であった。子規とは済町四丁目の生家が隣家であり、碧梧桐の紹介で文通がはじまつた。虚子の俳号は子規が名付親である。明治二十五年京都の第三高校、二十七年同校廢校、仙台の第二高校に転校したが、同年十月碧梧桐と共に退学後上京、子規の文学運動に参加した。明治三十年一月柳原極堂が松山から創刊した「ほととぎす」が翌年第二巻第一号から東京に移され、これを継承したことが後年の大虚子たらしむこととなった。「ホトトギス」百号当時は夏目漱石の「吾輩は猫である」続いて「坊っちゃん」が連載され、虚子自身も「風流饗法」「斑鳩物語」などの小説を執筆して、一般文芸雑誌化したこともある。だが、この「ホトトギス」によってどれほど多くの俳人を育成、大成せしめ、今日の俳界興隆の基礎たらしめたことかわからない。虚子は碧梧桐の新傾向俳句に対し一俳句の目的は花鳥風月を諷詠するにあり」と平易で坦々たる五七五調と季題を尊重する客觀写生、花鳥諷詠に徹し、しかもこれを自由自在に詠んできた。たとえば「五百



子  
虚  
高  
句「五百五十句」  
句「五百五十句」  
等句集の外に、「俳

子と境地境涯の東洋城、ホトトギスと渋柿は相対峙して俳壇を両分した。大戦中全国数百の俳誌がほとんど休廻刊した中に、この両誌だけは当局から用紙配給を保証され、一号の休刊もなかつたのたのは渋柿一誌であった。昭和二十七年一月、七十五歳で隠居を声明し、二十九年喜寿を迎えて芸術院会員に推された。渋柿を野村喜舟にゆづつた。三十九年十月二十八日東京で逝去、宇和島金剛山墓地に葬られた。

芝不器男 明治三十六年、愛媛県北宇和郡松野町の旧家芝之来三郎の四男として生まれた。松丸小学校、宇和島中学校、松山高等学校を経て、東京帝大農学部に入学、後転じて東北帝大工学部に入り機械科を修める。俳句は同大学在学中から熱心に研究を始め大正十四年冬より天の川（俳誌）に投句していた。後、ホトトギスに投句するようになり、その秀れた作風は同誌壇に波紋を起こし、幾多の名作を掲げ新人として不器男時代の来るのを約束されるほどになった。就中「あなたなみ夜雨の葛のあなたかな」に付す虚子の評駁は歴史的鑑賞と言われた代表作である。東北帝大卒業後郷里に帰り、昭和三年四月同郷二名村大内、太宰孫七氏の義嗣となり長女文江と結婚、昭和四年夏、病を得八月九州大学後藤外科に入院、病名肉腫と診断された。自來療養思ひしくなく、十二月同市庄に居を移し、五年二月に永眠したが、當時二十八歳であった。

富沢赤黄男 明治三十五年西宇和郡伊方村、父医師、富沢岩生の長男として生まれ本名正三宇和島中学校を経て、家業の医師を嫌って大正十年早稻田第二高等学院文科に入学、在学時代、松根東洋城門下の俳人に俳句をすすめられ句作していくが、卒業後すぐ軍隊に志願してはげしく主張したが、昭和十八年九月召集令によつて佐倉聯隊に入隊、草北武定にて肺結核にかかり陸軍病院に入院した。これより、波郷に肉体的な苦痛が加わつたが、俳句に対する熱はさめることはなかつた。陸軍病院でも俳句をつくると共に院内同好者の指導をかつて出た。終戦後、自宅療養となつたが病氣は進むばかり、昭和二十三年、東京療養所へ入院宮本忍博士によつて、第一次成形、第二次成形手術を受け、恢復をはかつた。その後小康を得て、句集「惜命」が上梓、戦争のため休んでいた「鶴」を復活、療養隨筆「清瀬村」を出す。二十九年には句業に対し「馬酔木賞」を受賞、再び俳壇に浮び上り、俳壇を風靡はじめた。しかしながら結核が再発したが文筆はなお続き読売文学賞を受け、「俳句哀歎——作句と鑑賞」「四月八日虚子忌」「南山房」「西東三鬼と現代俳句」「現代俳句歳時記」など多くの文をかいだ。四十年東京清瀬療養所に再び入院をしたが四十三年、気管切開手術をした。その間も休むことなく句集「酒中花」を出版、四十四年、芸術選奨文部大臣賞を受賞し、これが波郷への最後のはなむけとなつた。

かえり来し命慶しめ白菖蒲

病むわれを囲む師かなし白菖蒲

遺書未だ寸伸びしきて花八つ手

も有名である。

酒井默禪 本名和太郎明治十六年生まれ、明治四十二年東大医科卒

し、廢島工兵隊に入隊二年後陸軍少尉に任官していた。除隊後、川之石の人々と俳句をはじめ蕉左右と号し、のち赤黄男と改め俳句をつづけていた。木材会社に失敗し、単身上阪、日野草城選「青嶺」に出句、昭和十年創刊の「旗鑑」に参加、評論「窓秋氏の魅惑」を書き、俳壇に頭角をあらわした。この「旗鑑」で終生の赤黄男のパトロン水谷碎壺に会い以後彼の世話になることが多かった。昭和十二年の支那事変に召集を受け、中支に出征、戦争俳句を作り、新しい分野に入り赤黄男独特の詩情ロマンの句が數多く作られ、俳壇を風靡するにいたつたが、十五年マラリヤにかかり中支野戰病院に入院し、転送帰還、善通寺病院に入院した。このとき中尉に昇進、帰郷療養を許され、いち早く大阪の水谷破壊を訪ね逢つた。戦後、大陽系俳壇で大活躍、多くの名句、問題を提唱し、句集「天の狼」第二句集「蛇の笛」を出版して人間探求派の全盛時代を築き上げた。神田秀夫は「戦前、戦後を通じ、態度、方法をまげず横波を突つ切るようになつた俳句作家は有季俳句では石田波郷、松本たかし、新興俳句では赤黄男と窓秋であった」と言つてゐる。惜しくも奇病で倒れたが富沢赤黄男氏は惜しい人である。

石田波郷 大正二年松山市垣生、農家の二男として生まれ本名哲夫。少年の頃同じ村の村上霽月の句会をながめていた。昭和四年松山中学校時代の友達にすすめられ、愛媛新聞、海南新聞俳壇に投句し、隣村の五十崎古郷に師事、本格的に俳句をはじめたが、従来の渋柿一派の句を捨てて「馬酔木」に投稿、水原秋桜子に学び、庇護を受け、後「馬酔木」の編集に参加し、この頃より俳壇に頭角をあらわし、波郷時代を築いた。自らも「鶴」を創刊、人間探求の句を発表

業後、同大学内科教室に内科学、薬物学を研究され、大正九年松山赤十字病院長に就任、以来昭和二十三年退職されるまで、二十七年間の長期にわたり県内医学振興のため貢献している、昭和二十八年には日赤初の名誉院長に推された。その在職中、高浜虚子に師事し、ホトトギスの同人として活躍、県内俳壇の重きをなした。俳誌「葉桜」「柿」「峠」等の選者となり俳句界の指導者として敬慕をうけた。またN.H.K、各新聞の選者を委嘱され、活躍するなど愛媛俳壇に貢献している。

阿部里雪 本名利行明治二十六年伯方島生まれ、幼少の頃より文才に優れ、早くから俳諧文芸に志を立て、十六歳のとき野村朱鱗の門下に入り、子規門下の人々とともに、俳諧振興に参画、柳原極堂が社長の伊予日日新聞社に入社し、昭和二年廃刊まで極堂を助けて大いにその敏腕をふるつた。その後極堂の俳誌「鶴頭」の編集にあたり、斯界の注目を集め好評を博した。戦時、郷里の伯方島に帰つた。以来戦中、戦後を通じて郷土文化の振興に精魂を傾け、専ら本県俳諧先駆者の調査研究に情熱を注ぎ、「子規門下の人々」「極堂書翰集」などの編集発刊に努力した。また伯方文化会を設立し、俳句の指導に専念した。昭和三十二年は極堂会を設立し副会長に選任され頤彰に努力するなど、地方俳諧振興のために貢献しており、県教育文化賞を受けるなど県民から尊敬されている。

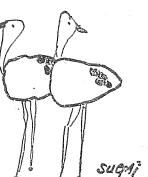
西岡十四城 明治十九年伊予郡砥部町原町に生まれ、愛媛県師範学校を卒業し、大正七年北条市河野小学校に就任した。在職中、僚友古川芹亭とともに既望会を起こし、かつ北条市風星吟社に出席し、

仙波花斐のすすめによって松根東洋城の渋柿に入門した。以来東洋城の来松ごとの俳席にぞみ研鑽をつんで、海南新聞俳壇、南海集、下崩集また各方面に作句活動を始めていた。大正十一年上京して早稲田大学に学び、その間東洋城、寺田寅日子、小宮豊隆の漱石研究にたずさわった。大正十五年三月帰松、松山商業高等学校に就職、以来松山渋柿会に出席、ますます東洋城から渋柿の至宝として羨望され、昭和十七年課題句選者に推せんを受け、また松山支部長として、同門の融和と後進の育成に情熱を傾けた。自身は俳諧生活でも徹底して古句の研究をおこたらず詩歌の音構成の研究を重ね、昭和四十四年「国語音考説」の著書を刊行した。この書は多くの専門学者から絶賛を受けるにいたった。作風にも音感研究の進むにつれて、芭蕉晩年の莊重な句風から次第に天心無縫というべき境涯句に変わって来た。四十八年二月米寿を記念し第二句集「続此一筋」を出版した。同年八月四日永眠したが愛媛俳壇史に特筆すべき人物である。

昭和四十八年の俳句年鑑によれば、現代活躍している俳人には筆頭として、全国に会員を有する「萬綠」の主宰、そして朝日新聞俳壇の選を担当している中村草田男、石田波郷なき後、全国俳壇では随一の長老株、関西俳壇で読友の最も多い「柿」の村上香史、老舗「渋柿」の新珠集の選者の関谷期風、天狼同人「炎蜃」主宰の谷野予志、萬緑同人「海杏」の主宰橋本月登、現代も句作をつづけ俳画で活躍の渋柿の村上臺天子、地方俳壇の長老「糸瓜」の森薰花壇、全國演繹である俳人協会に所属する「浜」の吉野義子、現代俳句協

会に所属する「いたどり」の川本臥風等が活躍しているが、愛媛にはその外に多くの作句のための集団や指導者がいて、それぞれ機關紙等が発行されていることは喜びにたえないところである。

(愛媛県教育委員会文化課長)



## 人物を中心とした

## 文化郷土史

— 県知高 — 吉田忠松



る『壯語』ではなかった。

中江兆民、植木枝盛、幸徳秋水の三者の名をあげただけで、すでに日本の新しい思想の夜明けがそこにはっきりと象徴されている、といつてよい。

中江兆民（一八四七～一九〇一）は維新の動乱期に青春を過ごしたが、その時代の激動に心をとらわれることなく、西洋の学に志し、ヨーロッパの新思想を日本に紹介した明治の先覚思想家である。



十九歳で高知藩から選ばれて長崎へ留学、さらに江戸へ出て、そぞれの地でフランス語を学んだ。明治四年、岩倉具視卿らの欧米視察に便乗してフランスに渡り、彼の地で若き日の公爵西園寺公望と相知り肝胆相照らす交わりを結んだ。後に、日本の政治を昭和の激動期までずっと推進した元老・西園寺と兆民との出会いは、近代日本の政治思

想の実戦面でも歴史的に意味の深いものであった。

兆民はフランスから帰国後、西園寺の後押しで「東洋自由新聞」を発刊、民権ジャーナリストとして健筆をふるった。その間、代議士となり実際政治にも関与しようとしたが、国会の醜状に幻滅し、即座に辞職した。彼の学問は法学、哲学、文学の広い分野に及び、当時の第一級のものであつただけに、現実政治の渦中を泳げる

ひとではなかった。

だが、その著「民約論」「三醉人経論問答」「一年有半」などは、今日なお明治思想史をたどる者の必読の書とされている。

植木枝盛（一八五七～一八九二）もまた兆民に劣らぬ新思想の鼓吹者であり、進歩的なジャーナリストとして盛んな文筆活動をおこなつたが、彼の場合は、兆民の現実的、漸進的な平民政義と異なり、一種、狂信的とも思える激情的な性格と相まって、最も急進的な自由民権家として終始した。

板垣退助の立志社に入り、板垣の片腕として自由民権運動の理論的支柱の役割を果たしたが、国会開設を要求する天皇への上奏文のいくつかは枝盛の執筆によるものとされており、また、彼が草した「私製・日本國憲法」は、死刑廃止や人民の革命権なども盛り込んだ内容であり、今日の民主憲法に比してもなお色あせぬ進歩性がある。

第一回国会に代議士となり政界の表面にも登場したが急死。一時は暗殺説も伝わるほど、その三十六年の生涯は波乱をきわめた。著書「無天難錄」「植木枝盛日記」は貴重な明治研究資料とされる。

兆民、枝盛の二先覚者以上に明治の新思想家として幸徳秋水（一八七一～一九一一）の名は当然、指を屈せねばならないが、秋水が前二者と決定的にちがうのは、その殉教者的革命行動である。

若いころ、兆民門下の逸材としてルソーの思想を学び、「平民新聞」を刊行し、日露戦争反対の論陣を張った活動ぶりは、兆民、枝盛と同様の進歩的ジャーナリストとしてのそれであるが、明治天皇

土佐の人物や事件を題材にして、かずかずのベスト・セラーを書いている作家の司馬遼太郎さんは、日本にあって歴史も人間も風土も今に連続している、と感じられるのは京都と土佐だけだ、と言っている。

一九七六年現在の土佐人を見ても、戦国時代や幕末、明治の土佐人とすこしも変わらぬ言動をしているように見える、といふのである。

土佐通の大作家に、そう指摘されると、純粹の土佐種である私なども、いろんな意味で、思い当たることが少なくない。

いま、明治以降の芸文の世界で、力強い足どりを示した人物をあげようとする場合にも、幕末維新時の変革運動から自由民権運動とつづく反体制の精神と行動が、どの分野にも色濃くじみ出していることに気づく。まことに、土佐という国は、何よりも『人間』の体臭が、この百年、連綿として生きつづけている風土だ、と改めて痛感させられる。

以下、おもなジャンルについて思いつくままに気軽に文化人巡礼を試みてみよう。

## 思 想

板垣退助（一八三七～一九一九）をリーダーとする自由民権運動が燎原の火のように燃えひろがろうとしていた時期、『政府は東京にあるが、政治は土佐にある』という言葉がはやった。新生日本の政治思想であつた「自由」は、土佐の山間より生まれるという当時の土佐人士の自負がいわせた語であろう。だが、これは必ずしも單なる感想である。

暗殺謀議の容疑による刑死という終焉の姿は、秋水のイメージを暗くしている。いわゆる秋水一派の大逆事件は明治政治史のナゾとして、いまだに不分明な問題を多く残しているが、秋水の思想と行動もまた、日本の社会主義の歩みを正しく解明するために、こんどの研究に待たねばならぬ部分が少なくない。

明治以降の土佐の文化人物史の中で「思想」を明瞭に位置づける

ために、ここでは、兆民、枝盛、秋水の三者をもって代表させた

が、板垣の自由党の中心をなし、衆議院議長にもなった片岡健吉

(一八四三～一九〇三)ほかの、世にいう自由党土佐派の民権運動

家たちの多数が熱心なキリスト教徒であった事実は、土佐の反骨。

反体制思想の基盤には人道主義的性格も色濃かった証左だと考えた

い。

ただ、このような明治の土佐人の鮮烈な思想活動をその後、大正・昭和にかけて継承した人脈があったか?となると、少なくとも「思想家」としては、さっそく名をあげるのに苦しむという実情は残念ながら認めなければならない。明治土佐人の変革の志は、思想家としてよりはむしろ、次の「文芸作家」において、実り多いものが、三代にわたって受け継がれているのではないかろうか。

この分野における土佐の人物群像はなかなかに壯觀である。

現代においても依然としてブームを起こしている坂本龍馬物のは

しりの小説「汗血千里の駒」を書いた坂崎紫瀬(一八五三～一九



九三八)の二人であろう。英光はロサンゼルス五輪大会でのボート選手としての

経験を書いた「オリンピックの果実」で大いに喝采され

たが、私生活の破綻により

三十七歳で自殺。浩は「間

島バルチアンの歌」で反戦

詩人としてその天才をうたわれたが、治安維持法に触れ、獄中生活

の労苦によって、二十六歳の若さで病死した。

ここで目を現存の作家群に移すと、これはまた文壇土佐派ともい

うべき有能な人気作家が多士済々である。

まず、長老作家として長い病中生活にありながら口述によつてま

でも力作を發表しつづけている上林曉(一九〇二～)をあげねば

ならない。曉は私小説作家として一貫し、初期の「聖ヨハネ病院に

て」「春の坂」などから、近作の「ブロンズの首」(川端文学賞)

等に至るまで、その透明、素朴な文体による身辺心境小説は他に類

を見ない文業として高く評価されている。

その他、「悪い仲間」(芥川賞)の安岡章太郎(一九二〇～)は最近、小説だけでなくエッセー、評論、紀行などにもユニークな

仕事をしており、ますます油がのってきた。

「足摺岬」「霧の中」などの田宮虎彦(一九一～)は、しばらく鳴りを静めているが力量は十分だから、やがて秀作を發表するだらう。「強情いちご」(直木賞)の田岡典夫(一九〇八～)も

は最近、小説だけでなくエッセー、評論、紀行などにもユニークな

一三)、島崎藤村とともに「文学界」同人として明治の浪漫主義文学の發展に尽くした馬場孤蝶(一八六九～一九四〇)、明治文壇批判、資本主義批判の文章で鳴らした漢学者・田岡嶺雲(一八七〇～一九一一)らは、その先駆的文學活動において、土佐の伝統的な麥革精神を如實に反映している。

また、黒岩涙香(一八六二～一九二〇)は「萬朝報」新聞を経

營、記事面でも日本の新聞製作に清新の風をもたらしたが、自らも筆をとり、「巖窟王」その他の翻案小説を連載し、大いに世に迎えられた。森下雨村(一八九〇～一九六五)も雑誌「新青年」の編集長として敏腕をふるい、自分でも翻訳作家として、日本の探偵小説の草分けとなつた。

涙香、雨村が果たした新聞スタイルの一新、新文藝創始の役割は、まさに土佐的性格の文学面での発現といえる。

さらに、土佐人の人間的側面を作品にも生活にもあらわに見せた何人かの作家がいるのも面白い。

美文調で後世まで教科書にまで宣伝された大町桂月(一八六九～一九五九)らは、それぞれの作品以上に、その愛酒、感傷の風韻が

酒仙作家としてかずかずの逸話を生み、「酒は土佐」の文学者と切つても切れぬイメージとして今日に至るまで定着している。

昭和期に入つて、土佐の作家としてやや異風の悲劇性をとどめているのは田中英光(一九一二～一九四九)と樋村浩(一九一二～一九二六)らである。英光はロサンゼルス五輪大会でのボート選手としての経験を書いた「オリンピックの果実」で大いに喝采されたが、私生活の破綻により三十七歳で自殺。浩は「間島バルチアンの歌」で反戦詩人としてその天才をうたわれたが、治安維持法に触れ、獄中生活の労苦によって、二十六歳の若さで病死した。

ここで目を現存の作家群に移すと、これはまた文壇土佐派ともい

うべき有能な人気作家が多士済々である。

史家・平尾道雄(一九〇〇～)が「龍馬のすべて」などの歴史エッセーで優れた成果をあげており、土佐文雄(一九三〇～)は「人間の骨」「熱い河」など、横村浩、植木枝盛をそれぞれ主人公とした小説でローカル性を強く打ち出している。

地元では、維新史、とくに坂本龍馬研究の第一人者とされている

史家・平尾道雄(一九〇〇～)が「龍馬のすべて」などの歴史エッセーで優れた成果をあげており、土佐文雄(一九三〇～)は「人間の骨」「熱い河」など、横村浩、植木枝盛をそれぞれ主人公とした小説でローカル性を強く打ち出している。

幕末維新時の、変革を求めてやまなかつた土佐の政治風土が、文化面において最も多彩に發揮されていると思われるは美術界である。この稿は、明治以降の文化人国記ということになつてゐる

## 美術

が、美術分野に限っては、土佐的性格のよつてくる強烈な個性の画人として幕末の絵師・絵金（一八一二～一八七六）についてまず若干、触れておかねばならない。

絵金一正しくは絵師・金蔵。その風変わりな人物像と奇怪な作品群は、ここ数年来、全国的なブームをなしている。美術雑誌は絵金の人と作品を特集で紹介し、映画化、舞台化もされた。その、血みどろな、病的ともいえる作風が現代の風潮にあってはやされたのはなぜだろうか。

絵金は、もともと名字帶刀を許された藩のおかかえ絵師だったが、その激しい性格がわざわざいし、野に下つて一介の市井の画家となつた。好んで下層生活になじみ、もっぱら芝居絵を描いた。特権者に奉仕する、きれいごとの絵師でなく、常に大衆とともに喜びと悲しみをともにする庶民派画家として、おどろおどろしい彩管をふるった。この絵金の人と作品をつらぬく反権力・孤高の精神と、新風を成そうとする情熱的画魂は、明治以降の土佐の画家たちにも、かなり色濃く尾をひいているところである。

例えば、近代日本洋画発達の端緒を開いた国沢新九郎（一八四七～一八七七）の場合を考えてみよう。

国沢は土佐藩上士の子として生まれ、維新時には、若くして砲術局陸軍所指南役、仕置役、大監察、海軍參謀となり藩船夕顔の艦長として活躍した。明治三年、彼が二十四歳のとき、藩命によつて渡英、そのチャンスに彼は自らの運命を百八十度、大転換させる。藩の意向は、彼に法律学を修得させることにあつたのだが、彼はひそかに、かねて幼時から秘めていた画家たらんとする志の実現を

信徳（一八八六～一九五二）についてもそれがいえるだろう。

山脇は東京美校西洋画科の卒業制作として描いた「停車場の朝」が第三回文展で入賞、日本に初めて本格的な印象派が誕生した、と内外から騒がれた。

当時の山脇の画壇へのデビューはまことに華麗なものであつた。とくにそのころ、西洋美術の紹介に熱っぽい意欲を注いでいた若い文学グループの志賀直哉、武者小路実篤ら白権派の人たちは、山脇を日本の新しい美術運動の旗手の一人として積極的に交わりを求めた。

志賀直哉のそのころの日記を見ると、山脇との深い交友、明治末期の青春像がよくわかつて興味深い。

山脇はフランス遊学中、梅原龍三郎らの国画会創設に参加し、在仏のまま会員となり、力作を発表した。脇が、晩年、土佐へ帰つてからは格別に見るべき画業もなく六十五歳で孤独な生涯を終つた。最盛期の作で

ある「疎林」「叢山の雪」など七点は山脇の没後、所蔵者志賀直哉から高知市へ寄贈され、日本洋画史における山脇の余光をわずかにとどめている。

このように絵金、国沢、山脇——と、幕末から明治——昭和初期へかけての土佐の三画人の生涯をたどつてみると、いずれにも共通

期し、当時ロンドンで知られた画家ウイリアム・エドガーについて洋画の手ほどきを受け、三年間の留学期間をもつぱら西洋画技の習熟につとめた。

そして帰国するや、直ちに東京麹町に画塾彌堂を設立し、子弟に西洋画を教えた。また、初の絵画展覧会を開催し、政府に美術学校建設の必要を説いた。帰



国 沢 新 九 郎

国後、数年ならずして死んでいるから画業については見るべきものはないけれども、日本洋画の最初の扉を開いた人物が土佐藩の特権武士の出であったという事実は特記されてよからう。

国沢は藩の要職にあり、当然、明治新政府においてもその地位が約束されていたはずなのに、なにゆえ突然に変身したか。

思うに、彼の行動は、維新時に政治変革の大業に参じた土佐の下級武士たちと共に、成すところあらんとする志が、日本の美術革命という「文化革命」への参加となつて現れた、ということではあるまい。

常に新しいものに感動し、あこがれ、新世界の創造に身を挺していどんでもいくバイタリティーは土佐人に生得のものであり、土佐的エネルギーの源泉ともいってよくはなかろうか。

土佐の画人群像に、こうした見方が許されるとすれば、日本における最初の印象派画家として日本洋画史に重要な位置を占める山脇

島一司（一九二〇～）が奈良で、小松益喜（一九〇四～）が神戸で、それぞれいい仕事をしている。いずれもしばしば帰郷して個展をやっている。故郷忘れ難し、という彼らの土佐人としての心情は、その作品にも画材としてだけでなく、色調その他に何がなし懐かしくにじみ出ている。

日本画では森田駿平（一九一六～）が東京に、山本倉丘（一九一三～）が京都におり、東西の両大家として實績ある実績を示している。

漫画家として著名な横山隆一（一九〇九～）、横山泰三（一九一七～）兄弟も土佐出身だ。

書道では宇島石卿（一九〇一～）が土佐人らしい風貌と豪絶の迫力を持った書業で断然、重きをなしている。

土佐には日本画の下司寅月（一八八一～）が九十四歳でなお

かくしゃくとして画筆をぎりぎりまで、最後の日本画絵師として

幽仙の境地に遊んでいる。山脇につながる国画会員中村博（一九一～）も健在で「花」の運作などに豊かな才能を開かせている。

## 学界

自然科学畑で傑出した存在は、物理学の寺田寅彦と植物学の牧野富太郎である。

寺田寅彦（一八七八～一九三五）は三十歳のとき「尺八の音響学的研究」で理学博士となつたが、すでにこの博士論文が示しているように、常に意表に出たテーマでユニークな実験物理の研究成果を

であった。

小野梓（一八五二～一八八六）は大隈重信の股肱として早稲田大学の前身・東京専門学校を創立した教育家であり、優れた法律学者でもあった。「國憲論綱」「利學入門」等の著を成し、官途にもついたが、彼がおこなつた「洋書の取りつけ」という良書普及運動は読書運動の大先覚として高く評価されねばならない。

日本で最初のテレビジョン開発者・山本忠興（一八八一～一九五一）も土佐の生んだ稀有の電気工学者である。

このようにあげてくると、学界においても土佐出身の学者の果たした役割は、それぞれの專攻分野は異なつても、いずれもが、前人未踏のテーマへの挑戦であることがよくわかる。そして、それは常にいばらの道であり、たたかいの生涯であった。これらの学究たちの生きざまにも、土佐人の激しい性格がありありとうかがえるのである。

## 芸能

まず純音樂部門で作曲家・弘田龍太郎（一八九二～一九五一）をあげねばならない。

弘田は東京音楽学校教授としてピアノ、作曲の音樂教育にたずさわったが、それよりも彼は日本の音樂界に革命的な新風運動を起こしたことで知られている。彼の作曲家としての生涯は三つに分けられる。

その一是、大正六年春の宮城道雄、尺八の吉田晴風が「新日本音

あげた。

彼は多才な学者で、夏目漱石とも親しく、吉村冬彦のペンネームで好エッセーをものし、藝術家として俳句もよくした。世に知られた『天災は忘れたころにやつてくる』というのは彼のことばである。

牧野富太郎

（一八六二～一九五七）は、ろくに小学校も出でて東京大学の植物学教室へ飛び込み、九十四歳まで長生きし、世界的な植物学者として大成した。彼が命名して学界に発表した日本植物は新種千種、新変種千五百種、採集した標本は五十万点にのぼっている。没後、文化勳章を贈られたが、生前は東大でも万年講師として報いられることなく、学閥の外にあってほとんど独立で日本の植物学を確立した、スケールの大きい野性的な学者であった。

寅彦、富太郎と共に通する異色の学風は、やはり土佐人の血脉に流れれる反骨の氣質の学問世界における發現といふべきであろう。

神經衰弱（現在のノイローゼ）に關して獨特の療法（森田療法）を創始した森田正馬（一八七四～一九三八）は、精神医学者として

世界の医学界に広くその名をとどめている。彼の治療は、いっさいの薬を使わず、物理療法もやらない、徹底した生活指導による自然療法であり、当初は医学界からも軽視されたが、現在では最も有効なノイローゼ療法として認められている。

小島祐馬（一八八一～一九六六）は一般には「支那學者」として通っているが、京大教授として中國の哲學・思想をきわめた日本の数少ない中國学者である。中國に關する學問と知識を完全に自家篠籠中のものとし、全く自分のことばでそれを述べ、理論づけた学者

樂運動」を起こしたとき、これに参加し、不遇時代の宮城らを助け、舞踊曲「柳」「姥捨山」「雪の幻想」「生にえ」「刺客」など、新邦樂への道を開いたこと。

その二是、東京大震災後、詩人・北原白秋らと童謡運動を起こし、大正から昭和へかけての童謡の世界に一時代を画したこと。「すずめの学校」「靴が鳴る」「雨」「キーピーさん」「涙千鳥」「叱られて」など今に愛唱されている名童謡はみな弘田の作曲である。

その三是、島崎藤村の「千曲川旅情のうた」「小諸なる古城のほとり」などに詩の連作曲をおこない、戰時中は、仏教音樂「仏陀三部曲」と歌劇「西浦の神」の大曲を書いたこと。

以上を見ても日本の西洋音樂移入の約半世紀に弘田が残した業績の大ささがわかるだろう。

弘田龍太郎とコンビを組み、一時期、ステージにも立って活躍した声楽家・外山国彦（一八八五～一九六〇）の名も抜かせない。外山はシャンソン風歌曲「お菓子の好きな巴里娘」で知られているが、現役引退後、東洋音樂學校教授となり音樂教育家として多くの人材を育てた。

パリトン歌手・下入川圭祐（一九〇一～）は外山と同郷の門下生で、藤原義江とともに日本のオペラ界を代表し、現在なお音樂教育の現役として精力的に活動している。

外山門下には他に歌謡曲「緑の地平線」で一世を風びした流行歌手・楠木繁夫（一九〇三～一九五六）がやはり土佐だ。彼は終戦

後、自殺した。かつてのステージ生活が花やかだっただけにその最期の哀れさが目立つた。

演劇部門には、新国劇の創始者・沢田正二郎（一八九二～一九二九）がいる。彼は、わが国新劇運動の草分けである文芸協会から出発し、協会解散後は芸術座に加盟して松井須磨子の相手役をした

が、その後、新国劇により国民的な大衆演劇を創始し、「國定忠次」「坂本竜馬」などの当たり役で「沢



郎二正 沢田

正」の名は国民的英雄の地位にまで高められた。三十七歳、人気絶頂の時期に急死したのも、いかにも土佐人らしい潔さとして今に伝説的な逸話が伝えられている。

浄瑠璃界には名人・竹本土佐太夫（一八六六～一九四一）がいる。彼は若いころ、土佐出身の大政治家・後藤象二郎の書生をしていたこともあり、郷党意識が強く、「土佐」にゆかりのある演し物「吃又」や「賀の祝い」を好んで語った。特に世話物の語りは入神の至芸といわれた。

新劇界では左翼演劇演出家・土方与志（一八九八～一九五九）の名を逸せない。若き時期、ヨーロッパ、とくにベルリンで演劇理論と演出を学び、大正末、帰国して築地小劇場を建設した。それは日本で初めて有形劇場と財源を持つ芸術的新劇運動であった。彼は維新の土佐の功労者・土方久元伯爵の孫であったが、戦争中左翼演劇

人として終戦まで下獄、爵位も奪われた。日本の新劇受難史を象徴する指導者の一人であった。

その他には民芸の下元勉（一九一七～）がテレビに映画に浅い芸を見せ、俳優座の浜田寅彦（一九一九～）も老巧な役をよくこなしている。映画界では「狂った果実」で石原裕次郎ブームを作った監督中平康（一九二六～）がいる。

（高知新聞社業務開発委員）

